
わぁおん！

現地 晶

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わぁおん！

【Nコード】

N7414I

【作者名】

現地 晶

【あらすじ】

ドジでお馬鹿な「狼女」の美緒^{みお}と、容姿端麗？頭脳明晰？スポーツ万能、だけど「異常な犬好き」という最低最悪の欠点がある蓮^{れん}の恋物語。コメディ。変人注意！軽い流血描写があります。苦手な方はご注意ください。

第1話（前書き）

この小説は「人外」と「変人」の恋愛物語です。少々アブノーマルな内容ですので、苦手な方はご注意下さい。「気持ち悪い」等の苦情は受け付け致しかねます。理解のある方のみお読み下さい。

第1話

来る、来る！来る！！

急げ、急げ！急げ！！

少女は走る。

茶色の髪をなびかせ、スカートを翻し、住宅街を只ひたすらに。すぐその先、石田さんちを左に曲がれば、辿り着ける。

もう少し、もう少し！

全速力で角を曲がる。肩に掛けていた鞆が石田さんちの塀にぶつかるが、気にする余裕はない。

一、二、三軒目の家の玄関ドアを開けて、中に飛び込む。そのまま階段を上り、目の前の部屋に入る。

「ハア、ハア・・・」

荒い呼吸をしながら、鞆を放り投げ、ブレザーのボタンを外す。はやく、はやく！

ブレザーを脱ぎ捨て、スカートも下に落とす。

「——あっ！」

少女が膝から崩れ落ちた。

両手について、四つん這いの状態で、震える手を背中にまわす。

——パチンッ

ブラのホックが外すと、張りのある胸がブルンと飛び出した。

少女は次に指をパンツに引っ掛け乱暴に脱ぎ捨てる。

「ハア・・・ハア・・・あっ！」

少女の身体がビクビクと震える。腕の力が抜けて、上半身が崩れ落ちた。

「あっ、あっ、あっ、ああーっ!!!!」

少女の絶叫が、家中に響いた。

第2話

「・・・ハア」

美緒^{みお}は息を吐くと、その場に伏せて顎を床につけた。

「疲れたあ・・・」

学校から自宅まで徒歩十五分の距離を全力疾走したのだ。

「でも、間に合って良かったな・・・」

目を閉じて、そのまま少し眠ろうかな・・・と思った時、ドンツドンツと強いノックの音が聞こえた。

「はい、何？」

返事をしてドアの方を見ると、怒り心頭といった感じの弟、優牙^{ゆうぎ}が立っていた。

「・・・姉ちゃん」

「へ？何？」

優牙は美緒に近付くとしやがみ、両手で美緒の頬を掴んで思いきり引っ張った。

「い、いひゃい、いひゃい」

「痛くしてるんだから、痛いのは当たり前だ。何度言ったら分かるんだ？声がでかすぎなんだよ。変身の度にいやらしい声を出すな。」

ご近所の多感なお年頃の少年達を刺激するな」

優牙は最後に両手で頬を叩くと、立ち上がって腰に手を当てた。

「うう、だって・・・」

美緒は上目遣いに優牙を見る。三角の耳が後ろに倒れ、垂れ下がった尻尾が媚を売るように左右に揺れている。

「それに、もういい加減、変身をコントロール出来るようになれよ。十七にもなっただけでいつ変身するか分からないなんて、それでも純血か？」

そう、この姉弟、大上美緒^{おおかみお}十七歳と優牙・十六歳は、『狼人間』なのだ。

絶滅の危機に瀕している狼人間の純血なのである。

「漫画みたいに、『月見て変身』だったら楽なのにねー」

狼人間というと、満月の夜変身するというイメージが強いが、実際は違うのだ。

生まれる時は狼の姿をしているが、1週間もすると人型に変身するようになる。

狼になったり人になったりを繰り返し、自分で変身をコントロール出来るようになるのだ。月などまったく関係無い。

見た目もまた、よくあるイメージの『大きな体躯に銀色の毛』とは違い、美緒達は中型犬並の大きさに薄い茶色の毛である。

はつきり言って見た目は『犬』である。

「何、のんきなこと言ってやがるんだ？お・ね・え・さ・ま」

優牙は右足で美緒の頭を踏むと、グリグリと床に押し付けた。

「人間の前で変身したらどーすんだコラ」

「大上さんは狼さんだったー！なんてね」

グリグリグリグリ

「痛い痛い痛い・・・」

「ほんとに、今まで無事でいたことの方が不思議だよ」

グリグリグリグリ

「痛いよー。やめて。大丈夫だよ変身する前に、なんか『来る』な

ーってのは分かるんだから」

優牙はため息を吐いて、美緒の頭から足を退かした。

「姉ちゃん、いつか、とんでもない酷い目に遭うぞ。気を付けろ」

美緒は首を傾げる。

「ん？なにそれ？」

「俺の野性の勘が、そう言ってるんだよ。素直に忠告聞いとけ。――

―それと」

優牙は床に落ちていたブラジャーを手に取ると、美緒の耳に被せた。

「こっぴつたもんは直ぐに片付けろ」

優牙はそう言うと、部屋から静かに出て行った。

「んー、もう、うるさいなあ。優牙の『小言ジジイ』・・・」

美緒は欠伸をすると、頭にブラジャーを乗せたままゆっくり伏せをして、目を閉じた。

後に優牙の忠告を真面目に聞かなかった事を、後悔することになるとは、この時美緒は、思ってもいなかった。

第3話

「・・・おはよー、愛ちゃん」

二年一組の教室――。

机に座り、一限目の授業の予習をしていた河内愛が、顔を上げた。
「おはよー・・・って美緒、また？」

愛は呆れたように口を開けたまま、美緒の全身を眺めた。
泥だらけの制服に、ボサボサの茶色い長い髪、擦り剥いた膝は血が滲んでいる。

「いやー・・・だつてさー・・・」

「ああ、ちよつとやめて。何があつたかなんて聞くだけ無駄。時間がもつたない」

愛は机に向き直ると、教科書に視線を戻した。

「ちよ、ちよつと待つて愛ちゃん！」

美緒は慌ててしゃがみ込んで愛に縋った。

「お願いだよお。ちよつとだけ、お話し聞いて」

「なんで？」

「うつ・・・なんでつて、うーん・・・話を聞いてもらうだけで、気持ちが楽になるというか・・・」

「誰の？」

「・・・私の」

「私にメリットは？」

「え・・・いや、無いけど」

「残念ね」

「いやいやいや！」

美緒は愛の膝を揺さ振った。

「友達じゃない！とーもーだーちー！」

「誰が？」

「あ、愛ちゃん・・・」

美緒の目に涙が浮かぶ。

それをチラリと見て、愛はペンを置いた。

「冗談よ。泣かないで。聞くからほら、話さない」

愛は美緒の方に体を向け、長い足を組んで、さらに腕組みをした。波打つ長い黒髪に、切れ長の目、紅い唇、抜群のスタイル・・・愛は美緒と同じ歳とは思えない程、大人びた美しさの持ち主だ。

その愛に縋りつく美緒は、まるで女王様に跪く犬のようであった。「うう・・・今日はね、朝からいい感じだったんだよ。早く起きたし、階段からも落ちなかったし・・・それが、外に出たとたん、石田さんちのコロが・・・散歩してて・・・」

「石田さんのコロって、ああ、あのバカ犬？で、まさか襲われたとか？」

「・・・うん」

「まったく、信じられない。あなたそれでも狼？」

「う・・・」

美緒がうなだれる。

愛は美緒が狼人間だと知っている。親同士に交流があり、小さな頃からお互いのことをよく知っているのだ。

「そんなことだから、いまだに変身のコントロールが出来ないんじゃない。精神鍛える修業でもしたら？山にでも籠もって」

「え・・・？私、辛いとかキツいとかは苦手・・・」

「・・・」

愛は静かに立ち上がると美緒の左右のこめかみに拳を当てた。

グリグリグリグリ。

「痛い痛い痛い痛い・・・」

「美緒、そんなのんきなことばかり言って、いつかひどい目に遭うからね」

「あ、それ昨日優牙にも同じこと言われた！」

グリグリグリグリ！

「あいつと一緒にしないで！虫酸が走る！」

「い、痛い痛い！愛ちゃんごめんなさいー！！」

美緒が痛さに耐えかねて叫んだ時、二人の横から声がかかった。
「河内さん、もうやめてあげたら？大上さん、凄く痛そうだよ」

第4話

「河内さん、やめてあげたら？大上さん、凄く痛そうだよ」

二人が振り向くと、そこにクラスメイトの佐倉蓮さくられんが立っていた。愛が渋々美緒から手を離す。

「おはよう、佐倉」

「おはよー、佐倉君」

「おはよう、河内さん大上さん」

蓮は鞆を開けると中から絆創膏を取り出した。

「大上さん、膝から血が出てるよ。これどうぞ」

「うわぁ！ありがとう」

美緒は嬉しそうに絆創膏を受け取った。

それを見た愛が蓮を睨み付ける。

「甘やかさないでちょうだい。この子バカなんだから。勘違いしたらどうするの？」

「バカってそんな・・・」

苦笑する蓮を愛が冷ややかな目で見た。

「昨日、一年生を振ったらしいじゃない。一昨日は三組の子だったわよね。その前は——」

「か、河内さん。急に何言って・・・」

「うわー、佐倉君モテるんだねー」

焦る蓮とそんな蓮を尊敬の眼差しで見る美緒。

「——つまりね、そんな気がないんだったら、誰にでも愛想振りまくのやめたら？」

「別に僕はそんなつもりは・・・」

「つもりは無くてもそうでしょ？」

「そんなことは・・・」

「いたいけな婦女子の心もてあそんで、酷い男よね」

「いや、だから・・・」

「佐倉君は彼女作らないの？」

美緒の問いかけに、愛の追及から逃れたかった蓮はホッとして微笑んだ。

「来年は受験生だからね。僕は勉強と恋愛両立出来る程器用じゃないんだ。もっと大人になって、責任が取れるようになってからでいいかな」

「へえー。佐倉君偉いねー」

「そんなことないよ。あ、そろそろ授業の予習しなきゃ。じゃあね」
蓮は軽く手を振って教室の前の方にある自分の席へと行った。

そんな蓮に手を振り返している美緒から愛は絆創膏を奪うように取ると、それを怪我をしている膝に貼った。

「佐倉君ってかっこいいなあ」

ぼけっと蓮の方を見ている美緒の様子に、愛が眉を寄せる。

「男は見た目じゃないわよ」

「え？でも佐倉君って成績だっていいし、スポーツも出来るし、優しいし、ちよつといいよね」

愛が腕組みして教科書を見ている蓮を睨むように見る。

「完璧過ぎると思わない？」

「・・・？」

美緒はキョトンとして愛を見た。

「完璧な男なんていないのよ。どこかに欠点の一つや二つある筈よ。どんなにいい男でもね。うちのパパだって、あんなに優しくって、頭がよくって、かっこよくって、とにかくもう素晴らしい男だけど、やっぱりほんのちよつとだけ欠点はあるものね」

美緒はうんうんと頷いて同意した。

「確かに。愛ちゃんのお父さんいい男だけど、見た目がアレだもんね」

「アレって何よ！」

愛は美緒の頬を摘んで引つ張った。

「い、いひゃい、いひゃい、あいひゃん」

愛は美緒の額に自分の額をつけて、低い声で囁いた。

「いい？ パパのこと悪く言ったら、例え美緒でも許さないからね。分かった？」

コクコクコクコク。美緒は必死に首を縦に振った。

極度のファザコンである愛の前で、彼女の父の話をするのは危険を伴う。分かっているのに、ついっかかり言ってしまう美緒は、やはりかなり抜けているようだ。

愛は美緒の頬から手を離して、もう一度腕組みをした。

「・・・私、前から思ってたんだけど、佐倉って何か胡散臭くない？」

「へ？どこが？」

「何となくよ。不用意に近付いちや駄目よ」

「そんな大げさな・・・」

笑う美緒を愛は睨む。

「私の野生の勘が、そう言ってるのよ。素直に忠告聞きなさい」

「あ、それ昨日、優牙も同じこと言ってた！」

ギリギリギリギリ！

愛は美緒の頬を掴むと思い切り引く張った。

「あいつと一緒にしないでって言ってるでしょう？ バカ狼」

「いひゃい、いひゃい！ あいひゃん、ごへんなひゃいー！！」

美緒の頬が容赦なく引く張られる。

この日は一日中、頬の腫れが引かなかった、美緒であった。

第5話

「あー、終わったー！」

美緒は鞆を肩に掛けると、愛の席へ走って行った。

シヨートホームルームが終わり、部活に入っていない美緒は、後は帰るだけである。

「愛ちゃん！ね、遊びに行こー！どこ行く？どこ行く？ケーキバイキング行く？イチゴとチョコとマンゴーと期間限定マロンも食べたいよね。」

「うるさい！」

愛は持っていた教科書で美緒の横面を叩くと、それを鞆にしまい、美緒を無視して帰ろうとした。

「いや、待って愛ちゃん。置いてかないで、捨てないでー」

自分の腕に縋りつく美緒を愛は冷たい瞳で見下ろした。

「美緒・・・もうすぐ学年末テストって分かってる？」

美緒はキョトンとして愛を見た。

「もうすぐって・・・まだ二週間以上あるじゃない」

愛は溜息を吐いて、美緒を引き剥がした。

「あと二週間程度しかないの。遊ぶ余裕なんてあるわけないでしょ？」

「ええ！？」

「ええ！？じゃない。あんたも家に帰って勉強しなさい」

美緒はもう一度愛の腕にしがみつくと、甘えた声を出した。

「だったらさあ、美緒、愛ちゃんと一緒に勉強したいなー。お・ね・が・い」

「気持ち悪い。離しなさい」

愛は乱暴に美緒を引き剥がして、少し離れた。

「私はパパに勉強教えて貰うんだから、邪魔しないで」

「あー、愛ちゃんのお父さん、頭いいもんねー。見た目アレだけど・

「・・・って痛い痛い！」

愛は素晴らしい速さで美緒に近付き、拳でこめかみをグリグリした。

「何度言えば理解するの？この頭は」

「痛い痛い！ごめんなさい」

「ちゃんと勉強しないと、酷い点数になるからね。そうよね、先生」
「・・・ん？」

美緒が愛の視線を辿って後ろを見ると、あきれ顔のクラス担任、三好吉人みよしよしとが立っていた。

「何やってんだ、お前は」

「先生、この子と一緒にしないで下さい」

愛はこめかみから拳を離すと、足元に置いていた鞆を手に持った。

「ヨシヨシ先生、どしたの？愛ちゃんに何かご用？」

三好は溜息を吐くと、美緒の頭を撫でた。

「先生はお前に用事があるんだよ。ちょっとあっちの部屋でお話しような」

美緒は不思議そうに首を傾げた。

「私？」

「ああ。行こうか」

「あ、でも私、愛ちゃんと・・・」

「河内なら、もう帰ったぞ」

「え！？」

驚いて美緒を見ると、そこにもう愛の姿は無かった。

「さ、行こうな」

美緒は三好に引き摺られるようにして連れて行かれた。

第6話

三好は美緒を連れて、教員研究室のドアを開けた。

室内は、机と椅子、本棚、おまけにテレビや冷蔵庫、ソファ、ベツドまであり、なかなかの充実ぶりだ。

「ほら、大上入れ」

三好に促されて室内に入った美緒が、キョロキョロと辺りを見回す。

「せんせー、結構いい部屋に住んでますねー」

「いや・・・住んでるわけじゃないがな。大上はここに来るのは初めてだったか」

「そーですよ。んで、こんなとこ連れて来て、なんですか・・・つてまさか!？」

美緒はハツと目を見開いて、三好を見た。

「・・・なんだ？」

三好が眉を寄せる。

「担任に密室に連れ込まれる美少女! 『いくら大声を出しても、ここには誰も来ないぞ』とか言われて、凌辱されるんです!」

「・・・なんだそりゃ」

「昨日読んだ小説に書いてありました」

三好は溜息を吐いて、右手を額に当てた。

「お前、どんな本読んでるんだ？」

「えー? 違うんですかー? じゃあ、何の用で連れ込んだんですか？」

美緒がガクリと肩を落とした。

「なんでガツカリしてんだよ。お前の成績のことで、話があるんだ」
「分かった! 『内申点上げてやるから言うこと聞け』ですか？」

「だからどんな本読んでるんだよ。いいからそのソファーに座れ。いい加減にしないと、先生本気で怒っちゃうぞ」

「はい。ごめんなさい」

美緒は勢いよくソファ―に座る。

「ヨシヨシ先生、ノリ悪いー」

「あーそうか、悪かったな。ほら、入り口のドアは開けとくぞ。これで密室じゃないからな」

三好は美緒の正面に、椅子を持ってきて座った。

「でな、大上、成績のことなんだが、お前ヤバいぞ」

「・・・へ？何がですか？」

美緒は三好の言っていることが分からず、首を傾げた。

「つまり、今回のテストの結果が悪ければ、二組落ちということだ」
「へえ、そうなんですか」

美緒は興味無さげに頷いた。

この学校は、成績順にクラス分けがされている。上位三十名が一組、以下二組三組・・・となっているのだ。

「そうなんですかじゃないだろ？もつと頑張れ。」

「いやー、でも、努力とか苦手だし・・・」

三好は溜息を吐いた。

「お前、二組落ちしたら、河内とクラスが別々になるぞ。河内は頭いいからな」

美緒はハッと気付いて、愕然とした。

「・・・そうだ。どうしよう。先生、愛ちゃんの成績書き換えて、二組に落として下さい」

「・・・俺に不正行為をしろと？」

「はい」

「出来るか！」

美緒はプウッと頬を膨らませた。

「だって、愛ちゃんと別れたくないよ。せんせー、どうすれば愛ちゃん二組に落としてくれますか？山吹色のお菓子があればやってくれますか？」

「時代劇の観過ぎだ。お前はなんで努力しようとしない？」

「だって・・・」

美緒は首を傾げて上目遣いで三好を見た。

「そんなことしても無駄だ。勉強しろ。河内に教えてもらえばいいじゃないか」

美緒は首を横に振った。

「愛ちゃんはパパとの時間を邪魔すると、烈火の如く怒るのです」
「……………」

三好は可哀想な子を見る目を美緒に向けた。

「先生なあ、前から思ってたんだけど、お前と河内は友達か？大上の片想いにしか見えんぞ」

「失礼な！私と愛ちゃんはラブラブです！」

「ああそうか、ごめんごめん。でな、話を戻すけど、勉強頑張れ。お前はやればできる子なんだぞ」

「うーん……………」

眉を寄せ、唇を尖らせる美緒に、三好はガクリと肩を落とした。

「お前、進路はどうするんだ？将来就きたい仕事とか、夢とか無いのか？」

「あー、はい」

美緒が頷く。

「見合い結婚します。出来れば若い男希望です」

「……………なんだ？それは」

「父が私に『見合い結婚しろ』って言うんです。一族の繁栄の為にうちある意味由緒正しいお家柄なんで」

「……………お前はそれでいいのか？」

「抵抗するのも面倒くさいのでそれでいいです」

三好は溜息を吐いた。なんだこのやる気の無さは。

でも担任としては、脱落者を出したくない。ろくに勉強してないのに一組にいるのだから、頑張ればトップだって狙える筈なのだ。

「とにかく少しは頑張れ。一組に残らなくては、河内ともお別れだぞ」

「……………はい」

三好は立ち上がって美緒の頭を撫でた。

「さあ、もう帰って勉強しろ。いいな」

「分かったよう」

美緒は鞆を持って立ち上がった。

「ヨシヨシ先生さようならー！」

勢いよく部屋から飛び出していく美緒を、三好は溜息と共に見送った。

「あいつ、あれで大丈夫なのか？・・・いつか痛い目に遭うんじゃないか？」

三好は右手を軽く握って、痛む頭を叩いた。

第7話

三好の実験室から出て、美緒は昇降口へと向かった。
学校には自主勉強や部活でまだ沢山の学生が残っている。
途中会ったクラスメイト達に手を振って、階段を降りようとした
が、そこで美緒は身体の変異に気付いた。

——来る！！

しかも既に変化し始めている。

美緒はすぐ近くにあるトイレに猛ダツシュして、洋式便器の個室
に入り鍵をかけた。

靴を床に投げて、急いで制服を脱ぐ。

狼に変身後は服や下着を脱ぐのは難しい。

もしそのまま外に出れば、学校の制服を着た犬が居ると騒ぎにな
ってしまう。

しかも首輪をしていないので、捕まれば野良犬と思われて保健所
行きかもしれない。さすがに美緒もそれは避けたい。

脱いだ服と靴を靴に突っ込み、便器の蓋に蹲るように乗った。

「う・・・あっ！」

身体が細かく震え、美緒は蓋に頭を押し付け背中を反らし、尻を
突き出す格好になる。

「あっ・・・あっあっ——」

——トントントン！

突然聞こえたノックの音に美緒はビクツと身体を揺らした。

「美緒ー！どした？具合悪いのー？」

先程会ったクラスメイトの一人だ。

(い・・・いつの間に!?)

トイレに入って来ていたことに、変身に集中していた美緒は全然気付いていなかった。

美緒は震える前足を踏ん張り、一度深呼吸をした。

「な、何でもないよー。大丈夫ー」

「えー？だつて凄い勢いでトイレ入ったでしょ？なんか苦しそうな声聞こえたし？」

トイレに駆け込んだのを見られていたのだ。

美緒は焦った。ドアを開けるわけにはいかない。なんとか早く立ち去ってもらわなければならない。

「えーと・・・ちよつと、お腹痛い・・・かな。でもでも大丈夫！出た！全部出た！！」

「『出た』って・・・露骨過ぎ、美緒」

引き気味だがそんなのに構ってなどいられない。

「うん、だから大丈夫だよ！ありがと！」

「そお？じゃあ私帰るけど、ホント大丈夫？」

「ん！ありがと！また明日ね」

「またね！」

クラスメイトが帰っていき、美緒はホッと息を吐いた。いつの間にか変身も完了している。

滑りやすい蓋の上に丸くなり、目を閉じた。

学校から生徒がいなくなるまで待たなくてはならない。ウトウトしながら暫く時間を潰した。

二十分・・・三十分・・・一時間・・・。

「――！」

美緒は便器から落ちそうになってハッと目を覚ました。

慌てて座り直し、欠伸をする。

何度か瞬きをしてトイレの中を見ると、もう暗くなっていた。

「・・・お腹空いた」

何時かは分からないが、お腹が空いているので、もう帰りたい。

「暗いし、静かだし、大丈夫だよね・・・」

美緒はもう一度欠伸をすると、そっと床に降りた。

トイレの床を裸足で歩くのは、正直かなり嫌なのだが、仕方ない。前足でガリガリ引っ掻いて、個室の鍵を開けると、靴を口にくわえた。

トイレからそつと出て、一応左右を見渡したが、誰もいない。ホッとして、階段を降りた。

愛や優牙と一緒にいればごまかしてくれるのだが、たまにこうして自力でなんとかしなければいけない時もある。

(・・・めんどくさい)

変身コントロールが出来ないのが悪いのだが、そのことは棚に上げて、心の中で愚痴りながらだらだらと昇降口へ向かった。

そして――。

(・・・あれ?)

自分のクラスの下駄箱の近くまで来た時、美緒は目の前に人がいることに気付いた。

(うあつ、やばい!)

よく見ると、それは佐倉蓮である。

(み、見つかりませんように・・・)

祈りながら、靴を持って帰るのは諦めて、昇降口から外に出ようとした、が。

(げっ! 閉まってるー!)

この学校は決められた時間になると、昇降口のドアと門が閉められてしまうのだ。

開いているのは職員用の出入口と門だけだ。そこに行く為には蓮の脇を通らなければならない。

(うう・・・仕方ない)

少し隠れて蓮が帰るのを待とう。

美緒がそつと動いた瞬間――。

「――！！」

目が合ってしまった。

蓮が目を見開いて美緒を見ている。

美緒も驚きで、くわえていた鞆を思わず落としてしまった。

（ど、ど、ど、どうしよう！いや、でも・・・）

残された道は一つしかない。隙を見て突っ走って逃げる。

（あっ・・・でも、鞆がー！）

重い鞆をくわえて全力疾走など美緒には出来ない。

かといって、鞆をここに放り出して逃げるのも危険な気がする。
下着だつて入っているのだ。

（ど、どどど、どうしよう！）

美緒がパニックになっている間に、金縛りの解けた蓮がすぐ近くまで寄つて来ているではないか。

（えーっと、えーっと、こういう時は・・・取り敢えず・・・）

美緒は首を傾げて、上目遣いで蓮を見た。

「わ・・・わん？」

（必殺！学校に迷いこんだどこかの飼い犬のフリ！）

美緒は蓮の目を見つめて出来るだけ可愛らしく吠えた。

第8話

「わ・・・わん？」

可愛く吠えた美緒の数歩前に、蓮がしゃがむ。

蓮は姿勢を低くして、右手を美緒の方に伸ばした。

「お、おいで、おいで」

そう言いつつも、ジリジリと美緒に近付いていく。

（え・・・と・・・？）

美緒はどうしていいのか分からずに、首を傾げたまま蓮を見ていた。

「おいで、おいで、おいでっ」

（そんなに「おいで」って言われても・・・。捕まえる気なのかなあ）

美緒は少し警戒して後退った。

「おいでおいでおいでおいでっ」

蓮がさらに近付いてくる。

美緒が後退る。

「おいでおいでおいでおいでっ！」

蓮が近付いてくる。

美緒が後退る。

（え・・・、どうしよう、逃げた方がいい・・・？でも鞆が・・・）

蓮の目を見ながら、美緒はさらに後退った。

そのまま暫くの間、二人共動かずに見つめ合っていた。

（うつっ。もう帰りたい）

美緒が涙目になった時、蓮がハツとして大声をあげた。

「そ、そうだ！」

（はい！？いきなり何！？）

美緒はビクリとして思わず伏せをして蓮を見上げる。

蓮は左手に持っていた鞆を開けて、中から紙袋を取り出した。

（あ！あれは！！）

蓮が持っているものに、美緒の目は釘付けになる。
紙袋から出てきたのはパンだ。

（『街の妖精』のクリームパンだ！！）

学校から少し離れたところにある『街の妖精』は、店主手作りの
ケーキやパンが美味しいことで評判の店である。

美緒の家とは逆方向にある上に、人気のクリームパンは午前中
は売り切れてしまうので、大好きなのに滅多に食べられない代物な
のだ。

（た、食べたい！欲しい！）

美緒は思わず涎をたらしながら、蓮を見上げた。

「ほら、パン、美味しいよ。おいで」

蓮がパンを左手に持って、右手で手招きをする。

（え！？くれるの？）

美緒の目が輝く。

「とっても美味しいんだよ。おいで、おいでっ！」

（食べていいの？本当に？）

美緒は立ち上がると、蓮の目の前まで行ってお座りした。

「さあ、どうぞ」

笑顔で美緒の口元にパンを差し出す蓮。

（ありがとー！佐倉君、いい人だー！）

美緒は蓮の手の上にあるパンを一口かじった。

（美味しー！）

「美味しいかい？」

蓮の右手がそつと美緒の頭に触れる。

（うんうん！）

蓮は恍惚とした表情で、美緒の頭から背中の手を移動させる。

「ああ・・・この毛並み。なんて滑らかなんだ」

（ああ・・・このクリーム。なんて滑らかなの）

蓮の手が、美緒の耳をくすぐり、頬を辿って顎に触れる。

「なんて可愛いんだ。ずっと触れていたい」

（なんて美味しいの。ずっと食べていたい）

しかし、気が付けば、パンはもう一口分しか残ってなかった。

（ああ、もう無くなっちゃったよー！）

美緒は残りのパンを口に入れると、蓮の手にこぼれたクリームをペロペロと舐めた。

「——！！あ、あ、だ、駄目だ！そんなことしたら、そんなことしたら——！」

（あー、美味しかったー。ごちそうさまー！）

満足気に口のまわりを舌で舐めて、美緒は蓮を見上げた。

「ぼ、僕は、僕はもう……！」

蓮の手が震える。

（ん……？佐倉君寒いの？）

美緒は首を傾げて、蓮の左手に右前足をのせた。

「もう……、我慢できない——！」

（……え？）

何が起こったのか、美緒には分からなかった。

視界がぐるりとまわり、何故か天井を見ていた。

（あれ？なんで？）

ボケツとしている美緒の口に何か湿ったものが触れた。

（へ？何？）

ペロペロペロペロ。

（え、え、え、何？）

ペロペロペロペロペロペロペロペロ。

（ええ？な、なんか佐倉君の顔が近い？）

ペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロ。

（……ってゆーか、舐められてる？……舐められてる！？）

美緒は呆然として動けなかった。

蓮が美緒を押し倒して、口を舐めている。

（な、なななー！？）

何度も舐められ、ハツと美緒が気付いた。

（ああー！ファーストキス！ファーストキスが奪われたー！）

美緒は慌てて顔を背けて藻掻いた。

「ハア、ハア、僕のモノだ。離さないよ・・・！」

蓮が美緒の身体をまさぐる。

（嫌ー！初めてのチュウがー！離してー！もう帰るー！って、え！？ええ！？ちよつと、やめ、どこ触って・・・！）

「女の子！女の子なんだね！ああ！大切にするからねー！」

（嫌、そんなとこ触っちゃ・・・！あ・・・やめて！駄目！）

激しく頭を振って抵抗すると、気持ちを通じたのか、それ以上触ることなく、蓮は両手で美緒の顔を撫でまわした。

ホツと息を吐いて、身体のを抜いた美緒に、蓮は何度もキスをする。

（・・・もういいやキスぐらい。一回も二回も同じだし・・・）

先程身体を撫でまわされた衝撃に比べたら、キスなど大したことはないとあっさり諦めて、美緒はされるがままになった。

そのまま顔中を舐められる。

（もう・・・ベタベタ・・・早くお風呂に入りたい・・・）

虚ろな瞳で天井を見ていた美緒だが、また蓮の手が身体を滑るように動き始めた事に気付いた。

蓮を見ると、恍惚とした表情で、荒い息を吐いている。

美緒の背中に寒気が走る。

（嫌ー！駄目ー！ソレは大人になってからよー！！）

美緒が、暴れて逃げようとする。

「ハア、可愛い！なんて可愛いんだ！愛してる！愛してるんだー！」
美緒は必死に後ろ足を動かし、身体を捻って蓮の拘束から抜け出そうと渾身の力で床を蹴る。

「——うわ——！」

体当たりを食らった蓮が、バランスを崩して横に倒れた。

（今だ——！！）

美緒は、かつてない素早さで立ち上がり、一目散に逃げ出した。

「待ってくれ！行かないでくれ！愛してる！愛してるんだ——！」

蓮の悲痛な叫びが聞こえるが、立ち止まるわけにはいかない。

（ごめんなさい佐倉君！私、まだまだ子供でいたいのに——！！）

美緒は、滑る廊下を必死に走って、家に逃げ帰った。

第9話

「・・・う・・・う・・・」

美緒はベッドから這い出すと、床に座り込んで窓を見た。

「・・・眩しいー。朝だ・・・」

昨日はシヨックな出来事から逃げ帰り、そのままベッドに潜り込んで眠ってしまった。

夕飯も食わず、風呂にも入っていない。

「・・・シャワー浴びたい」

蓮に舐められた顔が、カピカピになって気持ち悪い。

美緒は着替えを用意しようと、四つん這いでクローゼットの前行って、ハッと気付いた。

「あああああーつつっ！！！」

鞆が無い。昨日、昇降口に置いてきてしまった。

「ど、どうしよう・・・」

もしかしたら蓮に持って行かれたかもしれない。

美緒が涙目になった時、派手な音がしてドアが開いた。

「うるせー！朝っぱらからなんだ！！」

優牙は全裸で四つん這いの美緒を見ると、額に青筋を立てて、部屋に入ってきた。

「何やってんだよ！姉ちゃん！」

美緒の背中を踏みつける。

「そんな格好で誘ってんのかコラ！？俺が『禁断の愛』に目覚めたらどうすんだよボケ！！」

グリグリグリグリ！

「うう・・・痛い」

グリグリグリグリ！

「で？何があつたんだ？」

グリグリグリグリ！

「靴、学校に置いてきちゃった・・・」

「・・・・・・」

グリグリグリグリグリグリグリグリグリ！

「痛い痛い痛い痛い！」

「そんなことくらいで叫ぶんじゃねえ！」

「だって、制服も無いし・・・」

「ジャージでも着て行けばいいだろ！？」

優牙は足をどかすと、怒りながら部屋から出て行った。

「うう・・・」

美緒は溢れる涙を指で拭って、クローゼットから下着とジャージを出す。

一階に降りてシャワーを浴び、ジャージに着替えた。

「お腹空いた・・・」

リビングに行くと、昨日の夕飯の残りのハンバーグがテーブルに置いてあった。

両親はもう仕事に行ったようだ。

電子レンジで温めて、朝からしっかりと食べると、いつもより少し早かったが学校に向かった。

登校中、いつも何らかのトラブルが起こるのだが、不思議なことに、今朝は何もなく、無事学校に着く。

「うう・・・逆に怖い。なんかドカンと悪い事起こりそう・・・」

トラブルが無い分、いつもよりかなり早く学校に着いた。まだほとんどの生徒が登校していないようだ。

下駄箱を開けると、昨日置いて帰った靴が入っていた。その上は今脱いだ靴を重ねて押し込む。

靴下のまま歩き、昨日靴を置いた場所を見た。

「・・・無い」

がつくりと落ち込んで、涙を浮かべる美緒の肩を、誰かが掴んだ。

「——ひっ！」

驚いて振り返る美緒の目の前にいたのは、蓮であった。

「さ、佐倉君！」

蓮の顔を見た途端、昨日されたことを思い出し、美緒の身体が力ツと熱くなる。

蓮は気味が悪い程ニコニコと笑って、美緒に手に持っている物を見せた。

「おはよう。大上さん。これ、君のだよね」

蓮が持っているのは美緒の鞆だった。

「ああああっ！」

美緒が手を伸ばすと、蓮はそれを高く掲げた。

美緒はピョンピョンとジャンプして取ろうとするが、届かない。

「ねえ、大上さん。あの子とはどういう関係？」

美緒の動きがピタリと止まる。

「・・・何のことでしょう？」

「教えてくれたら、鞆返してあげるよ」

美緒は目を見開いて蓮を見ると、数歩下がった。

「・・・あなた誰？私の知ってる佐倉君は、そんな意地悪じゃない」

蓮は爽やかな笑顔で、とんでもない発言をした。

「僕はあの子の為なら、悪魔にだって魂を売るよ」

美緒は啞然として蓮を見上げた。

「・・・何すかそれ？意味が分かりましえん・・・」

「運命なんだ」

「・・・は？」

美緒が首を傾げる。

「運命だったんだ。あの子と僕が出会ったのは」

「・・・え？」

「愛し合う運命なんだ」

「・・・」

美緒の背筋に寒気が走った。

(やばい……。佐倉君は相当頭がイツちゃってる)

気付いてしまった事実美緒は愕然とした。

「知ってるんでしょ？」

「わ、私は何も知りません」

「本当は知ってるんでしょ？あの子はこの鞆を持ってたんだよ」

「し、知りません。そんな犬、知りません」

蓮はニヤリと笑って、美緒と額が触れ合う程、顔を近付けた。

「僕は『犬』だなんて一言も言っていないよ」

「――！！」

蓮は美緒の肩を掴んだ。

美緒は逃れようと後ろにさがる。

気が付けば、美緒は蓮に壁に押し付けられるような格好になっていた。

「ねえ、あの子は……」

「な、な、な、何？」

「大上さんの飼い犬だよな？」

「……は？」

美緒はポカンと口を開けて、蓮を見た。

(あ……そうか！)

普通は狼人間なんているとは思わない。

(なんだ、そうじゃない。飼い犬ってことにしちゃえばいいんだ！)

美緒が肯定しようとした時、蓮がうつとりした表情で遠くを見つめた。

「僕は今までいろんな子を好きになったけど、こんな運命を感じたのは初めてなんだ。いつも片想いで、誰にも言えない秘密の恋をして……」

「そりゃ、言えないでしょうね……」

「でも、こんな僕をあの子は受け入れてくれた」

「いや、受け入れてはいないのでは……？」

「僕の手を取ってくれたんだ。彼女の目は語っていた」

「・・・何と？」

「『私もあなたを愛しています』と！」

「言つてましえん！」

「もう自分を偽るのはやめるよ。例え種族が違つても、まわりに理解されなくても、自分の気持ちに正直に生きるんだ！」

美緒はもう泣きそうだった。そして悟った。

（全力で逃げなければ・・・！）

飼い犬なんて言えば、きっと会わせるとしつこく言ってくる。

もしかた狼の姿で会えば、今度こそ貞操の危機だ。

「・・・で？大上さんちの犬なんだよね？」

「いや、知りましえん！」

「何で嘔吐くんない？」

「本当に知らないんだよう」

「じゃあ何で彼女は君の鞆を持っていたをだい？」

「き、昨日・・・えっと、あの犬に盗られて・・・」

「彼女はそんなことする子じゃない！」

「本当だつてばー！」

「・・・」

「・・・」

蓮は鞆を美緒に差し出した。

「・・・え？返してくれるの？」

美緒は鞆を受け取つて、ホッと息を吐いた。

「分かつたよ」

「分かつてくれましたか！」

「君がその気なら、僕も全力で彼女を奪つてみせる！」

「・・・はい？」

「さあ、教室に行こう！今日から彼女をこの手に抱くまで、君を徹底的にマークさせてもらうよ！」

「・・・え？何でそうなりますか？」

呆然とする美緒の手を引いて、蓮は教室へと向かった。

第10話

美緒は机に突っ伏して、目を閉じた。

「あうう……。視線が痛い」

朝から誰も美緒に話し掛けない。

美緒にビツタリ引っ付いている蓮に原因があるのは、間違いないだろう。

皆、二人の間に何があったのか知りたそうにしているが、蓮の常と違う異常な雰囲気、話し掛けることが出来ないのだ。

しかも、愛さえまるで無視するかのように視線をそらす。

美緒は薄く目を開けて、隣の席に座る蓮を見た。

なんと、蓮は無理矢理席を移動して、美緒の隣に座っているのだ。

「うう……。なんでこんなことに……。！」

——ガコンッ！

「うるさいぞ、大上」

三好の投げた教科書が、美緒の頭に当たって床に落ちた。

「痛いよー、先生。角が当たったよ……。！」

三好は頭を押さえて泣くむ美緒の席まで来ると、落ちた教科書を拾った。

「こういう時はチョークを投げるのが、常識ですよ」

「どこにチョークがあるってんだ？」

この学校は電子黒板を使用していて、チョークは無いのだ。

「うう……。教師の暴力で頭が割れるように痛いので、早退してもいいですか？」

「ああ、そりゃいけないな。佐倉、保健室に連れて行ってやれ」

「治った！治りました！！」

三好は溜息を吐いて、美緒の頭をグリグリ撫でた。

「いいか、授業中は静かにして、ちゃんと聞け。昨日の先生の話を理解出来ているのか？お前は」

「はいい・・・」

「しつかりしろ！」

「はいい・・・」

三好はもう一度溜息を吐いて、今度は蓮を見た。

「佐倉、大上が落ち着かないようだから、元の席に戻れ」

「出来ません」

即答した蓮に、三好は頭痛がする思いだ。

「なんでだ？佐倉」

それはクラスの誰もが聞いたかったことである。

皆の視線が蓮に集まる。

「運命だからです」

「運命・・・？」

三好が眉を寄せる。

「一目で恋に落ちました。僕はもう自分の気持ちを抑えられないのです。だから大上さんから離れることが出来ません」

「・・・・・・」

一瞬シーンと静まりかえった後、教室中がどよめいた。

「説明不足！佐倉君、大いに説明不足！！」

美緒の叫びは興奮状態にあるクラスメイトには聞こえなかった。

「はい、皆、静まれー！！」

三好がパンパンと手を叩く。

「佐倉、熱烈恋愛中のお前に残念なお知らせだ。大上は成績が落ちているので、このままだと二組行きになる。離れたくなければ、しつかり勉強をみてやれ。はい、授業再開するぞー！もうすぐ試験だぞ。集中しろよー！」

まるで何事も無かったかのように、授業を再開させる三好に、生徒達も次第に落ち着きを取り戻していく。

「うつ・・・。違うんだよ・・・」

誤解されたまま話が終わってしまった悲しみに、またもや美緒は机に突っ伏した。

「・・・大上さん」

「誤解なのでしゅ・・・」

「大上さん」

ガタガタと机が揺れて、美緒は薄く目を開いた。

「――ヒッ！」

その途端、目の前にある蓮の顔に驚いて悲鳴をあげた。

蓮は二人の机をくっ付けてしまっていた。

「成績落ちてるの？困るよ、二組に行かれたら」

「な、何で・・・？」

「監視できなくなるから」

「うう、長期戦突入の予感・・・！もういつそのこと、二組でもいいかもしれない」

愛とは離れることになるが、蓮から逃げられるなら、それでもいいと美緒は思った。

「駄目だよ。僕が勉強教えてあげる」

「・・・遠慮いたします」

「今日から放課後は、大上さんの家で勉強会を開こう」

「絶対嫌！っていうか、何さりげなく家に来ようとしてるんですか？」

「駄目か・・・。仕方ない、取り敢えず僕の家でいいよ」

「それも嫌！」

「決定。ほら、ちゃんと先生の話聞いて。分からないところは教えてあげるから」

美緒の意志をまるつきり無視して、蓮は勝手に話を進める。

「あうう・・・。何で・・・」

机に突っ伏そうとした美緒の襟首を、蓮が掴んで引き上げる。

「真面目に授業を受ける！」

「・・・え？スパルタ教育？」

美緒は意外と厳しい蓮の指導に涙を浮かべた。

第11話

待ちかねていた昼休み。

美緒はヨロヨロとした足取りで、愛のもとへ行った。

「愛ちゃん・・・、助けて・・・」

涙を浮かべて腕に縋りつく美緒を、愛は振り払った。

「嫌よ。何やらかしたか知らないけれど、私を巻き込まないで」

「そんなこと言わないで・・・」

「ほら、ダーリンが迎えにきたわよ」

「ヒイッ!!」

悲鳴をあげる美緒の襟首を掴んで、愛が突き飛ばす。それを蓮が受け止めた。

「どこに行くのかな、大上さん？」

「あ、愛ちゃんとお弁当を食べに・・・」

「じゃあ僕もお邪魔させてもらうよ」

美緒の目に涙が溢れた。蓮は一向に離れようとしない。トイレにまで付いてくるのだ。

「二人で食へに行けばいいでしょ。私のことはお気になさらずに」
「酷い・・・愛ちゃん、見捨てないで・・・」

美緒が愛に手を伸ばした時、大きな音を立てて、教室のドアが開いた。

「佐倉蓮は、どこだー!!!」

教室にいた全ての者が驚いて、一斉にドアの方を見る。

「ゆ、優牙っ！」

突然現れた弟に、美緒は驚いて、思わず蓮に縋り付いた。

「・・・姉ちゃん、そいつが佐倉蓮か？」

優牙は美緒のもとまでゆっくりと歩いてくると、美緒の襟首を持

つて引き離し、蓮の胸ぐらを掴む。

「てめえか！うちの姉ちゃん誑かした野郎は！！」

「姉ちゃん・・・？」

「しらばつくてんじゃねえよ！二人が付き合ってるって、すげー噂になつてんだからな！」

美緒は目を見開いて、優牙の腕を揺すった。

「ゆ、優牙！噂って何！？」

「ああ！？姉ちゃんは、引っ込んでろ！」

優牙は美緒を、愛の方に突き飛ばした。

「てめーみたいな『人間』に、うちの大事な姉ちゃんやるわけにはいかねーんだよ！」

「・・・君、大上さんの弟？」

「だったら何だ！」

蓮は優牙の手を両手で掴んで、怖い程真剣な表情になる。

「君の家、犬が居るよね」

「はあ！？」

優牙は意味が分からず、眉を寄せた。

「茶色の、柴犬位の大きさの、とっても可愛い女の子、居るよね」
「・・・」

優牙が振り向いて、美緒を見る。

「ヒイッ！」

美緒は、嫌がる愛の後ろに隠れた。

「会わせてくれ！知っているんだぞ、あの子が君ん家の飼い犬だつて！！」

蓮は強い力で優牙の手首を掴み、揺さ振る。

「・・・ちよつと待て」

「待てない！」

「いいから、ちよつと手を離してくれ」

優牙は蓮の手を無理矢理引き剥がすと、愛の後ろに隠れる美緒の襟首を掴んで引き摺り出した。

「・・・どういうことだ？」

「わ、私は何も知りません」

目を逸らす美緒の顎を掴んで、ギリギリと力を入れる。

「痛い痛い痛いっ!!」

「俺の目を見て答えろ」

優牙は美緒の額に自分の額を引っ付けて、低い声で問う。

「お前、何をやらかした？」

「あうう、優牙、目から殺人光線が出てるよ・・・」

「あいつと付き合っているんじゃないのか？」

「ち・・・、違うでしゅ」

「・・・」

優牙は美緒から手を離すと、愛を睨み付けた。

「おい、どうなってるんだコラ」

「知らないわよ」

愛も優牙を睨み付ける。

「一緒にクラスにいるくせに、何でちゃんと監視してないんだ!？」

「私は美緒のお守りじゃないの。勝手なこと言わないで」

二人の間に見えない火花が散った。

「——チッ!使えない女だな!」

「何ですって!？」

優牙は美緒の襟首を掴む。

「取り敢えず場所移動するぞ。目立ち過ぎだ。愛、お前も来い」

「命令しないでよ」

そう言いつつも、愛は歩きだす優牙に付いていく。

その後ろを蓮が付いて歩く。

「・・・おい、佐倉蓮」

「なんだい？」

優牙は振り向いて、蓮を睨み付けた。

「何でお前が付いてくる？」

「場所を移動するんだろっ？」

「お前は付いて来るな！」

「何でだい！？僕はあの子に会わせてくれるまで、離れないよ！！」
「とにかく、付いて来るな！」

「そうやって、僕とあの子を引き離すつもりか！」

「意味、分かんねえよ！」

優牙が美緒の襟首を掴んでいる手を振り回した。

「く、苦しい！優牙、苦しい！！」

「いいか、佐倉蓮！」

優牙は人差し指を蓮に突き付ける。

「今から俺達は、この馬鹿と大事な話があるんだよ。邪魔するな！」
「嫌だ」

「何だと、この野郎！」

睨み合う優牙と蓮。

「・・・喉笛咬み切ってやろうか」

優牙は小さく呟くと、美緒を引き摺るようにして、歩き出す。

その後ろを愛が続き、更にその後ろを蓮が付いて、四人は興味津々の生徒達に見送られ、教室を出て行った。

第12話

「・・・お前達、先生は弁当が食べたいのだが？」

突然研究室に來た美緒、優牙、愛、の三人を、三好は椅子に座つて腕組みした姿勢で見た。

「仕方ねーだろ、佐倉蓮が付いて来るんだよ。ここならあいつに話聞こえないからな。担任なんだから協力しろよ」

教室を出た三人の後を、蓮は付いて來た。

そこで優牙は防音になっている三好の研究室に、美緒と愛を連れて入り、蓮が入る前にドアの鍵を掛けたのだ。

「オラ、ここ座れ」

優牙が美緒をソファーに座らせる。

「あうう・・・」

涙ぐむ美緒の耳を愛が引つ張つた。

「ほら、しゃんとしなさい」

「うう・・・」

優牙は腕を組んで、美緒を睨み付けた。

「・・・で？何がどうなつてんだ？」

「あうう・・・」

「答える！」

美緒がビクリとして、目に涙を浮かべた。

「早くしなさい。お弁当食べる時間が無くなつちゃうでしょ？」

「う・・・愛ちゃん冷たい・・・」

二人に睨まれて、美緒は涙を指で拭つた。

「聞くも涙、語るも涙の物語・・・」

「いいから、さつさと話せ！」

優牙が拳を振り上げる。

「ヒイッ！」

「ほら、早く！」

愛が耳を数回軽く引つ張った。

「うう……。昨日、学校で変身して、帰ろうとしたら佐倉君がいて、クリームパンで、ペロペロで、運命って言われて……」

「何だそれ！？分かるように話せ！」

優牙の拳が美緒の頭に振り下ろされた。

「痛いー！痛い痛い痛いー！」

「うるせー！！」

優牙がもう一度拳を振り上げる。

その時、三好が溜息と共に立ち上がった。

「大上弟、そのくらいにしてやれ。折角覚えた授業内容を忘れるだろう？もうすぐ期末テストなんだからな」

三好は冷蔵庫を開けて苺牛乳を取り出すと、それを持ってソファの前行く。

「ほら大上、苺牛乳だぞ。これ飲んで、ちょっと静かにしてろ」

三好は美緒の手に苺牛乳を握らせ、頭を撫でた。

美緒は一瞬キョトンとしたが、直ぐに嬉しそうに苺牛乳を飲み始める。

「美味しー！ヨシヨシ先生、これ美味しー！」

「そうか、良かったな」

「餌付けされてんじゃねーよ……」

優牙がガクリと肩を落として呟く。

三好は美緒の頭に手を置いたまま、優牙を見た。

「佐倉は無類の犬好きなんだ」

愛と優牙は三好の言葉意味が分からず、顔を見合わせた。

「……………だから？」

「……………何だ？」

「昨日大上は、学校で変身してな。狼の姿で帰ろうとしたところを、偶々佐倉と鉢合わせになったんだ。大上は逃げたんだが、その時鞆を忘れて帰って……。それでまあ、佐倉は狼の姿の大上を、大上の飼い犬と思い込んでしまったんだ。な、大上、そうだよな」

三好言葉に、美緒がぽかと口を開けて、首を傾げる。

「あれ・・・？何で？」

三好は笑って美緒の頭を撫でた。

「・・・その話、本当なのか？」

優牙が眉を寄せて、三好を胡散臭げに見る。

「嘘は吐いてないぞ」

「・・・でも何か隠してるでしょ？」

三好は優牙と愛の頭を撫でて笑った。

「疑い深い子達だなあ。でも先生、お前達のそういうところ、好きだぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

優牙が溜息を吐いて、三好の手を振り払った。

「・・・で？そんだけ知ってて、何でほったらかしにしてんだよ。

俺達が狼人間だつてばれたらどーしてくれんだ。あんたそれでもこの学校の先生か？」

「そうね。美緒の正体がばれたら、うちにも影響があるかもしれないじゃない。迷惑よ」

「人外を完璧にサポートしてくれんのが、この学校の売りだろう？」

三人が通っているこの学校、『悠真学園』^{ゆうしん}は、幼稚園から大学まで揃っており、一般的には優秀な成績のものしか入れない学園として有名である。

しかしその裏で、人外の受け入れをしている学園として、一部の者達には知られているのだ。

一般の生徒達は気付いていないが、教師陣はそのことを把握しており、密かに人外の手助けをしているのである。

「あのなあ、確かに先生はお前達の手助けはしてやるが、問題が起こった時は自分達で解決するのが基本だぞ」

「何だよそれ。話が違ふぞ！」

「普通クラスに通っている以上は・・・だがな」

三好はしゃがんで、美緒と視線を合わせた。

第13話

「大上・・・、十組にかわるか？」

美緒はキョトンとして三好を見た。

「人外専門の十組なら、完璧に守ってやれるぞ。大上は変身のコントロールが出来ないのだから、十組で学ぶべきなのかもしれないな。むしろ、今まで何事もなくこれたことの方が不思議なくらいだ」

愛がパンツと手を叩いて、それに同意する。

「そうよ。そうしなさい。十組に行けば問題は全て解決するじゃない」

優牙も頷く。

「そうだな、姉ちゃん十組行けよ。そしたら俺も安心出来る」

美緒は皆の言葉を聞くうちに、段々と事の重大さが分かり、持っていた苺牛乳をポロリと落とした。

「じゅ・・・十組って、十組って、愛ちゃんパパが通ってたクラスだよ」

「ああ、そういえば、河内のお父さんも十組だったらしいな」

美緒は涙目になり、三好に縋りついた。

「せんせー・・・」

「何だ？」

「嫌あ・・・十組は嫌あ・・・。だって愛ちゃんパパみたいなのが一杯いるんでしょ・・・？」

「失礼なこと言わないで！この馬鹿狼！」

愛が美緒の耳を思い切り引っ張った。

「大上、見た目で判断するのは駄目だぞ。十組の生徒達は一組以上に優秀だ。文武両道に秀でた者ばかりの、いわば『超エリートクラス』なんだぞ」

「うう・・・じゃあ愛ちゃんも一緒に十組に・・・」

「それは出来ないな」

「何ですかー！」

「人間としてやっていける者は、出来るだけ普通クラスに通うと決められているからだ。普通クラスは、人間に混じって生活していく為の、練習の場でもあるからな」

「うう・・・」

「どうする？大上が頑張れるなら、一組のままでもいいんだがな」

美緒は三好の服をぎゅっと掴んで、顔を上げた。

「せんせー、頑張るからあ、一組で頑張るからあ、十組に行けなんて言わないで」

「えー！何だよそれ。姉ちゃんの『頑張る』なんて、口先だけに決まってるんだろ。十組に行け！」

「そつよ。迷惑よ」

「うう・・・言葉の暴力」

優牙と愛の非情な言葉に涙ぐむ美緒の頭を三好が撫でる。

「大上弟、河内、頑張るって言ってるのだから、少しは信用してやれ」

優牙と愛が、眉を寄せて、嫌そうな顔をする。

「・・・今夜の職員会議で、この件について話し合う予定だ」

三好は床に落ちた苺牛乳を拾い、立ち上がった。

「予定が早まってしまった上に、佐倉の反応が思ったより激しかったからな。今後の対応について、検討する」

優牙と愛が一瞬顔を見合わせた後、三好を睨む。

「どういう意味だ？」

「先生、何を隠しているの？」

三好は困ったような表情をして、首を少し傾げた。

「お前達が『特別』なように、佐倉にも学園として『特別』な事情があるんだよ。今日の職員会議で正式決定したら、お前達にも教えるから、明日の昼休みにまたここに集合してくれ」

三好は美緒の手を引いてソファから立たせ、ポンポンと背中を叩いた。

「もし本当に大上が駄目な時や、危険と判断した時は、先生が必ず助けてやるからな。ちよつと頑張ってみろ」

美緒は三好の言っていることの意味が分からず、首を傾げた。

「せんせー……。何がどうなっているのか、さっぱり分かりません……。危険ってなに？怪我したりとか？」

三好は笑って美緒の頭を撫でた。

「まあ、お前にとつては『ある意味危険』かな。でもな大上、先生は今回の件が、お前に良い影響を与えていると思うっているんだ。少しやる気を出してみろ」

三好は冷蔵庫のところに行くと、中から何か取り出して戻って来た。

「ほら、これをやるから頑張れ。さあ、昼休みが終わってしまつぞ。教室に帰りなさい」

美緒は三好がくれたものを見て歓声を上げた。

「わーい！フルーツ牛乳だー！」

「頑張るんだぞ」

「はーい！」

優牙と愛は、そんな美緒を見て、呆れ果てた。

「だから、餌付けされてんじゃねーよ……」

自分に災難が降り掛かってこないことを祈りつつ、優牙と愛は溜息を吐いて、ドアに向かって歩きだした。

第14話

ショートホームルームが終わった瞬間、美緒は鞆を持って立ち上がった。

そのまま出口へダッシュしようとしたが、腕を蓮にしっかりと掴まれてしまう。

「何処行くの？大上さん」

「うう・・・、お許しください。家で病気のおとっつあんが待っているのです」

蓮は目を細めて美緒を見た。

「・・・嘘でしょ？」

「う・・・、見逃してける。腹を空かした幼い弟たちに、おまんま持って帰るって、おら約束しただ」

「何？その怪しい訛り」

「ああ、やめて！お代官様、お許しを！」

「・・・この場合僕は、『よいではないか、よいではないか』と言わなきゃいけないのかな？」

蓮は呆れ返った眼差しを美緒に向けた。

「大上さん、時代劇観過ぎ」

「うう・・・。助けて、暴れたがりの將軍様・・・。いや、もう贅沢言わない。只の旅の隠居でもいいから・・・」

美緒は虚ろな目で遠くを見つめた。

三好の研究室を出て直ぐ、廊下で待ち構えていた蓮に引き摺られるようにして、美緒は教室に戻ってきた。

そこから異常な束縛が美緒を待っていたのだ。

常に監視されているだけでなく、席からちよつと離れようとするだけでも、椅子に戻される。休憩時間には、復習しろと怒られる。

それは自由気ままにやってきた美緒にとって、とても辛いことだった。

「馬鹿なこと言っていないで、帰るよ」

蓮の言葉に美緒はハッと気付いた。そういえば、蓮の家に連行されそうだったのだ。

「嫌ー！！お家に帰るー！！」

蓮は鞆を持つと、暴れる美緒の襟首を掴んで歩こうとした。

しかし、美緒は机にしがみついて抵抗する。

「こら、やめなさい！」

「嫌ー！やめてー！！」

蓮は美緒の身体に腕をまわして、机から引き離そうとした。

必死で机にしがみついていた美緒だが、男の力に勝てる筈もない。

「——あっ！！」

美緒の手は机から離れ、身体が勢いよく蓮にぶつかった。

その衝撃で蓮の鞆が床に落ち、中から赤い物体が飛び出して床を滑っていく。

黒板の前で動きを止めた赤い物体に、教室にいた生徒全員が注目した。

「ああ！いけない！」

蓮は慌ててそれを拾いに行くと、フウフウ息を吹きかけて、袖で汚れを拭った。

「良かった。傷はついてないみたいだ」

満面の笑みで戻ってくる蓮に、美緒が頬を引きつらせる。

「・・・何ですか？それは」

美緒の質問に、蓮は笑顔で赤い物体を見せた。

「可愛いだろ？きっと似合っと思うんだ！」

「・・・誰に？」

「やだなあ、聞かなくても分かるだろう？」

蓮が持っている赤い首輪を愛し気に撫でる。

「早くこの首輪をはめた姿が見たいよ。ああでも可愛いくなりすぎて、他の男に狙われたらどうしよう」

美緒の背中にゾクゾクと寒気が走る。

教室のあちこちから「うわぁ・・・」と、ドン引きする声が聞こえた。

「い、嫌ーつつつ！ー！」

美緒は叫びながら、教室を飛び出した。

「あつ！待て！！大上さん！」

蓮がその後を慌てて追いかる。

美緒は階段を一階まで一気に駆け降りると、昇降口に向かおうとした。

「逃がさないよ！」

「ヒイヒイッ！」

しかし追ってくる蓮に捕まりそうになり、美緒は咄嗟に女子トイレに駆け込んだ。

そして、女子トイレに入ることと蓮が躊躇している隙に、トイレの窓から外に脱出した。

「うわーん！首輪は嫌ー！！私、鎖で繋がれて、監禁されるんだー！ー！」

美緒は家まで、泣き叫びながら走って帰ったのだった。

第15話

下駄箱を開けて、既に二足入っている上にぎゅうぎゅうと今脱いだ靴を詰め込んで、美緒は力なく教室へと向かった。

「うう……。行きたくない」

昨日は何とか蓮から逃げる事が出来たが、今日は更に監視が厳しくなるのは間違いないだろう。

優牙や愛の助けは、期待出来そうにない。

本当は美緒は今日、学校をずる休みしようとしたのだ。

だがしかし、よりによって仕事が休みだった母親に仮病があっさりばれて、家の外に放り出されてしまったのだ。

「教室入った途端、縄で縛られたりして……。」

のろのろと階段を上り、嫌々ながらも教室のドアを開け、そつと中を覗く。

「……。あれ？」

ところが、蓮の姿は見当たらない。

美緒はほっとして、席に座って勉強している愛に走り寄る。

「愛ちゃん、おはようー！」

美緒の声に顔を上げた愛は、足を組んで髪を掻き上げた。

「おはよう美緒。ダーリンがお待ちかねよ」

「……。え？」

美緒がぼかんと口を開けた時、目の前に一本の縄が現れた。

「おはよう大上さん。昨日はどうして一人だけ帰っちゃったのかな？」

後ろから聞こえる声に、美緒は慌てて逃げようとする。

「ヒイイイッ！！」

しかし、身体に縄を巻かれて床に引き倒されてしまう。

「ま、まさかの予感的中！」

蓮は手際よく縄を結びながら美緒を睨んだ。

「これでもう逃げられないよ」

「嫌ー！！愛ちゃん助けてー！！」

縋るような目で美緒は愛を見たが、愛は眉を寄せて手を振った。

「話しかけないで。同類だと思われたくないから」

「そんなー！佐倉くんやめてよぉーっ！！」

「あの子に会わせてくれないから、こんなことになるんだ。嫌なら今すぐあの子を連れてこい」

「嫌ー！それも嫌ー！」

「それなら仕方ない。さあ、席に戻るよ。立つて」

「痛い痛い痛いー！！」

ぐいぐいと縄を引っ張る蓮だったが、

「――！！」

その頭に突然何かが投げつけられた。

驚いた蓮と美緒が後ろを振り向く。

「ヨ、ヨシヨシせんせー！！」

三好は二人に近付くと、蓮の頭に投げつけた出席簿を拾った。

「やりすぎだぞ、佐倉。」

縄を解くと、三好は美緒の頭を撫でる。

「よしよし、怖かったな。よく頑張った。偉いぞ」

「うわーん！せんせー！！」

縋りつく美緒の背中を宥めるようにポンポンと叩いて、三好は縄を纏めた。

「佐倉、これは没収だ。それと大上は昼休み先生と大事な話があるからな。お前は付いて来ないように。さあ、皆、席に着け！」

三好の言葉に、注目していた生徒達が席に戻っていく。

そんな中、不満気な顔で渋々戻ろうとした蓮の肩を三好が掴んだ。
「いいか、佐倉。厳しくすればよいという訳ではないぞ。大事なのは『飴と鞭』だ」

訝しげに見る蓮の肩を叩いて、三好は前へと歩いて行く。

「出席とるぞー！」

蓮は三好をじつと見て、それから横に座る美緒を見た。

「ヒイッ！」

怯える美緒の姿を暫く見つめて、やがて頷いた。

「・・・成る程」

「何がですかー！？」

「うるさいぞ！大上」

美緒は机に突っ伏して、溢れる涙を拭い、自分の身に降り掛かった不幸を嘆いた。

第16話

昼休み――。

美緒、愛、優牙の三人は、三好の研究室に集まった。

「・・・で？　どういうことか説明してもらおうか」

ソファ―に足を組んで偉そうに座る優牙と愛に苦笑して、三好は美緒の頭を撫でた。

「あれから怖いことされてないか？」

美緒は眉を寄せて、首を傾げた。

「佐倉くん、煩いことあまり言わなくなったけど、なんかじつと見てくるんだよ。将来はきつと立派なストーカーだろう」

「そうか。教え子がストーカーになるのは嫌だな」

笑う三好に、優牙が苛立つ。

「そんなことより、早く話をしろよ！」

「分かった、分かった」

三好は椅子に座ると、真剣な表情で三人を見た。

そんな三好に、優牙と愛も緊張した面持ちで、組んでいた足を戻し、背筋を伸ばした。

「昨夜の職員会議で、今回の件は『このまま様子を見る』ということが正式決定した」

愛と優牙が顔を見合わせる。

「・・・何？」

「・・・意味分かんねえ」

美緒も首を傾げる。

「佐倉はこの学園の『教員候補』なんだ」

愛と優牙が眉を寄せる。

「だから何？」

「それがどうしたってんだ」

「佐倉くん先生になるの？　ストーカー先生だね」

三好は棚から菓子の入った籠を取り出すと、美緒に渡した。

「大上、ちよつとこれ食べて静かにしてろ」

「これ全部食べていいの？」

三好が頷いたのを見て、美緒は嬉しそうに菓子を食べ始めた。

「実はこの学園は今、深刻な教員不足に陥っているんだ。この学園の教員になるには特殊な条件があるからな。まず第一に人外が通っているという秘密を守ること。いざという時の判断能力。どんな人外相手でも壊れない強い精神力。勿論文武両道に秀でていなければならない。・・・まあ、その他にも色々あるが、とにかく、そんな条件に当てはまる人物は少ない」

優牙がソファーに深く座りなおし、足を組む。

「——で？その条件に当てはまったのが佐倉蓮か」

三好が頷く。

「佐倉は元々別の高校に通っていたんだが、偶々この学園の理事長の目に留まり、少々強引に転校してもらったんだ」

愛が「そういえば・・・」と人差し指を顎に当てる。

「佐倉は一年生の途中で転校してきたのよね。この学園では珍しいうって話題になったわね」

「そうだな。それで、佐倉をこの学園の教員にする為には避けて通れないことがある。大上弟、何か分かるよな？」

「この世に人外が存在することを教え、受け入れさせる」

「その通り。本来ならお前達が大学に行ってから、大上弟、お前にやってもらおう予定だったんだがな」

優牙は目を見開いた。

「俺に？」

「ああ。昨日も言ったが、佐倉は無類の犬好きなんだ。佐倉に近付き友人になり、徐々に人外存在を理解させる。その役は狼人間がぴったりだが、残念ながら大上姉は変身のコントロールが出来ない」

「・・・で、俺？」

「だがしかし、狼に変身した大上と佐倉が接触してしまい、しかも

佐倉の反応が予想以上の激しさだったことから、今後どうするか教員の間でも意見が割れていたんだ。結局最終的には、理事長がこのまま佐倉と大上姉で様子見と判断したかな。ということで、お前達も協力するように。大上のサポートをしてやってくれ」

「・・・・・・・・」

優牙は腕組みをして、三好を睨み付けた。

「学園の事情は分かったが、俺達は協力しない」

「ヨシヨシせんせー。ジューズが欲しいなー」

「お前は黙ってる！」

優牙の拳が美緒の頭に落ちた。

第17話

「うわーん！せんせー、優牙が殴ったー！」

「・・・大上、冷蔵庫の中に入ってるジュースを好きだけ飲み」
頭を両手で押さえて騒ぐ美緒を冷蔵庫の方へ追いやつて、三好は話を続けた。

「大上弟、協力出来ない理由はなんだ？」

「学園の事情は分かるが、俺達が危険を冒してまで協力することは出来ない。特に姉ちゃんは、あれでも貴重な『狼女』だからな。数少ないメスを危険な目にあわす訳にはいかないんだよ」

「・・・成る程」

三好は数回軽く頷いて、腕を組んだ。

「お前のクラス担任の木村先生が、先週から体調不良で休んでるだろう？」

「だから？」

「過労で倒れられたんだ。今この学園の教員は、早朝から夜中まで休む暇なく働いている状態なんだ」

「だから？」

「このままでは、近い将来人外の受け入れをやめることになる」

「・・・」

「そうなると困るのは、いずれ生まれるであろうお前達の子供になるな。人外が普通の学校に通うのは大変だぞ」

優牙は三好を忌々し気に睨み付けた。

「なんだそれ。脅してるのか？」

「いや、お願いしてるんだよ。なあ、河内だって困るだろう？」

「・・・」

愛は溜息を吐くと、髪を掻き上げて三好を見た。

「・・・パパと相談してから返事でもいいですか？」

「おい・・・」

優牙が眉を寄せる。

「仕方ないでしょ？困るのは確かなんだから」

「でもなあ・・・」

「ああそつだ。大上弟、河内、お前達の保護者には、今回の協力の件、ちゃんと許可をもらつてゐるぞ」

優牙と愛が目を見開いた。

「パパからは何も聞いてないわよ」

三好は口元に笑みを浮かべた。

「俺から話すまで言わないで欲しいとお願いしてたからな」

「そういうことは、もつと早く言えよ！」

優牙は三好が座っている椅子を蹴りあげた。

「すぐ暴力を振るうのは悪い癖だぞ」

「うるせー！・・・でもよくうちの親が許可したな」

「お前達の親にも、学生時代同じように協力してもらつたことがあるからな。それに、万が一佐倉が人外を受け入れられない、または、人外が存在を他者に漏らすような事があれば、理事長が責任をもつて佐倉と周りの人間の記憶を消去する約束になっている。だから安心していいぞ」

優牙と愛が顔を見合せる。

「・・・記憶を消去？」

「・・・消去つて・・・」

「勿論、大上に危険が無いよう注意もするぞ」

「いや、待て待て待て。それより『記憶消去』ってなんだ」

「そついえば、私、理事長つて見たことが無い・・・」

眉を寄せる二人に、三好は困つたように頭を掻きながら笑つた。

「理事長、最近はまだ表に出てこないからな。物凄い美人だぞ」

「女性なの？」

「いや、男だ。会いたいなら連れて来るぞ。その場合大上弟は、自分の身は自分で守るように。理事長はお前みたいな生意気な少年が大好物だからな」

「・・・好物？」

優牙が首を傾げた時、冷蔵庫を漁っていた筈の美緒が、勢いよく走ってきて三好の身体に飛び付いた。

第18話

「ヨシヨシ先生！理事長は優牙みたいな少年が好きなんですか！？」
美緒は目をキラキラと輝かせて三好を見上げた。

「美しい理事長に襲われる少年！『学園もの』の定番です！優牙は言うことを聞かないと退学にするぞ」とか脅されるて、色々されてしまうのです。でも途中から、何故か理事長にときめきを感じてしまい・・・！」

「変な想像してんじゃねーよー！！」

優牙が立ち上がり、美緒の頭を拳で思いきり殴った。

「あうう、痛い。・・・こうして優牙は『狼』から『ネコ』になったのであった」

「だからやめろ！」

もう一度美緒を殴ろうとした優牙の手首を三好が掴んだ。

「怒りは分かるが、俺の研究室で流血騒ぎはやめてくれ」

優牙は忌々し気に三好を睨んで、ソファアに戻った。

「・・・愛、なに笑ってやがる？」

愛は口元を押さえて笑いをこらえていた。

「わーい！愛ちゃんにウケたー」

喜ぶ美緒の頭を撫でながら、三好は溜息を吐く。

「いかがわしいことばかり覚えてないで、もう少し教科書に載っている内容を暗記しような」

「はい！ねえ、ヨシヨシ先生も理事長に襲われたことある？」

期待の籠もった瞳に苦笑して、三好はポンポンと軽く美緒の頭を叩いた。

「あるぞ。教師になりたての頃、よく襲われた。大上が想像しているようなものではないがな。『健康チェックだ！』とか言って、血を吸われるんだ」

「・・・血？」

美緒がポカンと口を開け、優牙と愛が顔を見合せた。

「・・・ねえ、先生。理事長つてもしかして——」

「正体は、いずれ会う時のお楽しみだ」

三好は愛の言葉を遮って、しがみ付いている美緒を引き剥がした。

「さて、佐倉の件は納得してもらえたか？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

愛は髪を掻き上げて、溜息を吐いた。

「パパが承諾済みなら、私はいいけど。具体的には何をすればいいの？」

「基本的には大上と佐倉に任せておけばいいが、今朝先生がやったように、問題があると思った時には何らかの対処をしてくれ。後は気付いたことなどあれば小さな事でも報告してほしい」

「分かりました」

愛が頷く。

「大上弟は、それに加えて家庭での様子なども気を付けて見てやつてくれ」

「・・・・・・・・」

優牙は、じつと三好を見た。

「・・・本当に姉ちゃんが危険な目にあうことは無いのか？」

「まったく無いとは言いきれないが、まあ今朝佐倉には注意をしたし、大丈夫だろう」

「当初の計画通り、俺がやったほうがいいんじゃないか？」

三好はチラリと美緒を見て、また優牙に視線を戻した。

「先生はな、大上のことが心配なんだ。このままでは、ろくな大人にならないのではないかな。今回の件を乗り越えれば、大上は必ず成長する。先生そう思うぞ」

「・・・・・・・・」

優牙は溜息を吐いて、美緒を見た。

「姉ちゃん、どうなんだ？やれるのか？」

「へ？何が？」

「・・・・・・」

優牙はガクリと肩を落として頭に手を当てた。

「せんせー！冷蔵庫にあったプリン食べていい？」

「ああ、いいぞ」

喜んで冷蔵庫に向かう美緒を見て、優牙は立ち上がった。

「・・・もう知らん。勝手にしろ。俺に迷惑かけるなよ」

帰ろうとする優牙を見て、愛も立ち上がった。

「私も教室に戻ります。美緒は・・・」

既にプリンを食べ始めている美緒の姿に、愛は溜息を吐く。

「美緒、先に教室に戻るからね」

そして二人は美緒を置いて、それぞれの教室に戻っていった。

第19話

優牙と愛が出て行つたドアを見ながら、三好はクスクスと笑った。

「楽しみだな」

「何がですか？」

プリンを持つた美緒が不思議そうに訊いてくる。

「ん？あの二人と一緒に仕事するのが。佐倉もだから、三人だな」

「仕事って先生の？」

「ああ。三人共『教員候補』なんだ。本人達にはまだ伝えてないけどな。理事長は狙つた獲物は逃さないから実質的には『教員決定』だгна」

「へー！そうなんだー！」

「そうなんだ。さて、大上、プリンは食べ終わったな。ではお前に大切な話がある。ソファアに座れ」

「・・・・・・？」

美緒が不思議そうにしながら、ソファアに座る。

三好は顔から笑みを消して、真剣な表情で美緒に話始めた。

「さて、これからお前には頑張ってもらわなくてはいけない。危険が無いよう先生も気を付けるが、正直学園の外で起こることまでは対処しきれない。分かるか？」

美緒が、うんうんと頷く。

「先日の昇降口での出来事・・・いや、もっと危ない事態になるかもしれない」

美緒が、うんうんと頷きかけて、ピタリと動きを止める。

「・・・先生、昇降口での出来事って？」

「狼の姿で佐倉と鉢合わせただろう？クリームパンを旨そうに食ってたな。その後、襲われてしまったが」

美緒は驚いて目を見開いた。

「せんせー！見てたんですかー！」

「監視カメラでな」

「監視カメラ！？そんなものあるんですか！？」

「あるぞ。設置場所は内緒だがな」

美緒はポカンと口を開けて三好を見た。

「あの時、佐倉を止めに入るか迷ったんだ。異常な犬好きなのは知っていたが、まさか恋愛感情まで抱くとは思ってもしなかったからな。でも様子を見たかったし、服を着たままだったし、まあ大丈夫だろうと判断したんだ。怖い思いさせて悪かったな」

三好は美緒の頭を撫でた。

「うう……。助けて欲しかったよう」

美緒が頬を膨らまして、上目遣いで三好を軽く睨んだ。

「そこで、お前に言っておく事がある」

三好は真剣な表情で、美緒の手をギュッと握り締めた。

「いいか、自分の身は自分で守るんだぞ」

「……。え？」

「男は快樂に流され易い。お前がすっかりしないと、大変な事になるぞ」

「……。はい？」

「まだ高校生だからな。生まれてくる命に責任が持てるようになるまでは、十分気をつける」

「……。……」

美緒は三好の目を見つめ、ハラハラと涙を流した。

「せんせー。もしかして私ってば、貞操の危機？」

「こら！泣くな！真剣に聞け」

こうして美緒は、三好の保健体育特別授業を受けて、ヨロヨロと教室に戻った。

席に座ってそのまま机に突っ伏す美緒の姿に、蓮が眉を寄せて首を傾げた。

「遅かったね。それに、やけに疲れてるけど、どうしたんだい？」

美緒は少しだけ顔を上げて蓮を見ると、はらはらと涙を流した。

「佐倉くん、幸せ家族計画なのでしゅ・・・」

「・・・は？」

意味は分からないが、泣き続ける美緒の頭を、蓮はそつと撫でたのだった。

第20話

ショートホームルームが終わり、ダッシュで帰ろうとした美緒の腕を、蓮が掴んだ。

「嫌ー！帰るー！帰るったら帰るー！」

なりふりかまわず暴れる美緒の身体を蓮はがっちりと抱え込んだ。

「今日は逃がさないよ」

「嫌ー！誰か助けてー！犯されるー！」

「人聞きの悪い事言わない！お菓子買ってあげるから、一緒においで」

「・・・え？」

美緒の動きがピタリと止まる。

蓮は身体を離すと、少し屈んで美緒と視線を合わせた。

「ジュースも買ってあげる」

「・・・」

美緒の視線が彷徨う。

「そうだ、ケーキも好きかな？」

美緒が少し迷って、コクリと頷いた。

「じゃあケーキも買おう。家の近くに、美味しいケーキ屋さんがあるんだよ」

「ケーキ・・・」

「そう、ケーキ」

「・・・いっぱい買う？」

上目遣いで首を傾げる美緒に、蓮が微笑む。

「好きなだけ買ってあげる」

美緒が嬉しそうに笑った。

「行く！」

「いい子だね」

蓮は美緒の頭を撫でると、手を繋いだ。

その時、二人の後ろから声が聞こえた。

「・・・なんだか、誘拐の瞬間を目撃した気分ね」

二人が振り向くと、呆れ顔の愛が立っていた。

「美緒、佐倉の家に行くの？」

美緒は笑顔で元気よく答えた。

「うん！」

「私は一緒に行かないわよ。それでも行くの？」

「うん！ケーキ買ってもらうの！」

「・・・」

愛は溜息を吐いて、額に掌を当てて目を閉じた。

「・・・佐倉、ちよつとだけ美緒を借りるわよ」

愛は美緒の襟首を掴むと、引き摺るようにして自分の席へと連れて行った。

「な、何？愛ちゃん」

「一応、三好先生と約束したからね・・・」

キョトンとする美緒の首に、愛は自分の首に掛けていたネックレスのような物を掛けた。

美緒が不思議そうに首を傾げてそれを見る。

「防犯ブザー。危険を感じたら、先っぽを引っぱって逃げるのよ。

それと――」

愛はスカートのポケットから取出した物を、美緒の胸ポケットに入れる。

「防犯スプレー。嫌なことされたら佐倉の顔に吹き付けてやりなさい。それと――」

愛は鞆から袋を取出し、美緒の手に握らせた。

「スタンガン。これもあげるわ」

美緒は目を丸くして、愛を見た。

「愛ちゃん色々持ってるね」

「パパが、『悪い人間に捕獲されそうになったら使いなさい』ってくれたのよ。私はまだ他にも持ってるから、美緒にあげる」

愛は美緒の肩に手を置いて、真剣な表情をする。

「いい？自分の身は自分で守るのよ」

「あ、なんかそれ、前に誰かに言われたような気がする」

「気を付けていつてらっしゃい」

愛は美緒を反転させると、ポンと背中を押した。

「うん。愛ちゃんありがとー！」

元氣よく蓮のもとに走って行く美緒を見て、愛は溜息混じりに呟いた。

「大丈夫かしら、あの子・・・」

美緒は蓮と手を繋いで、『お菓子、ジュース、ケーキ！』と、歌いながら教室を出て行った。

番外編 「可愛い彼女にプレゼント」(前書き)

PV2万突破しました。ありがとうございます。
14話に出てきた首輪のお話、蓮視点です。

番外編 「可愛い彼女にプレゼント」

僕は今日、素晴らしい体験をした。

ついに、運命のヒトと巡り合ったのだ。

興奮のあまり少し強引な事をしてしまい、恥ずかしがり屋の彼女は走って行ってしまったけど、僕の手には彼女が置いていった鞆がある。

クラスメイトの大上美緒・・・、きっと彼女の飼い主に違いない。大上さんに頼んで、彼女を譲ってもらおう。

彼女だって僕と一緒に居たいと思っている筈だ。

高鳴る胸を押さえて歩いていると、ふと、今までは自分の趣味がバレルのが怖くて避けていた、ペットショップの看板が目についた。そうだ、彼女にプレゼントを買っていこう。可愛い首輪がいい。

僕はペットショップの店内へと足を踏み入れた。

入ってすぐ、ガラス越しに見える子犬達。

思わず走って行き、ガラスにビツタリくっついて見ていると、店員が声をかけてきた。

「あの・・・お客様・・・」

そこで僕はハッと気付いた。

彼女へのプレゼントを買いに来たのだと。

何となく浮気した気分になり、心の中で彼女に謝りながら、僕は店員に訊いた。

「首輪を買いたいのですが、どこにありますか？」

店員は何故かホツとした表情になり、笑顔で首輪の売り場まで案内してくれた。

「ワンちゃんですか？ネコちゃんですか？」

僕は首輪をいくつか手に取りながら答えた。

「彼女にです」

「・・・・・・・・」

僕は迷った末に、赤い、可愛い小さなリボンの付いた首輪を選んだ。

「これください」

「・・・・・・」

「これください！」

「———はい!？」

モタモタしている店員に痺れを切らし、財布からお金を出して握らせると、僕はペットショップを出た。

手に持った首輪を見ていると、顔がにやけてくる。

この首輪をはめた彼女と過ごす甘い日々を想像しながら、僕は家に帰った。

第21話

学校を出て、美緒の家とは反対方向に十分程歩いたところに、蓮の住むマンションはあった。

「どうぞ、上がって」

「邪魔しまーす」

蓮に促されて、美緒は靴を脱いで中へと入った。

「奥がりビング」

美緒が奥に進んでドアを開ける。

「・・・何これ？」

美緒はドアノブを持ったまま首を傾げた。

そこは、見事に何も無い部屋だった。

「ああ、ちよつと待ってて、テーブル持ってくるから」

蓮は玄関脇の部屋に入って行くと、中から小さな折り畳み式のテーブルを持ってきた。

「ごめんね。こっちの部屋はあんまり使わないから、何も無くて」

蓮は美緒の背中を軽く押して部屋の中央まで行くと、テーブルを置いた。

「座つて。ごめん、コップも無いから、ペットボトル直飲みになるよ」

美緒はキョロキョロと周りを見て、疑問を口にした。

「なんで、こんなに何も無いの？」

コンビニで買ってきたジュースをテーブルに置きながら、蓮が「しまった」と呟く。

「ごめん。皿はあるけどフォークが無い。ケーキ買ってきたのに・・・、どうしよう、割箸で食べる？」

蓮はキッチンへと行き、皿と割箸を持ってきた。

「一人暮らしだから、必要最低限のものしか置いてないんだ」

「一人暮らし？こんなに広いのに？」

美緒が驚きに目を瞪る。

「自分でも広すぎると思うよ。部屋四つもあるし」

蓮は皿の上にケーキをのせて、美緒の前に置いた。

「お家の人と一緒に住まないの？」

「実家からじゃ遠くて悠真には通えないから、一人暮らししてるんだ」

「へー。そこまでして悠真に通ってるんだ」

感心する美緒に、蓮は苦笑した。

「元々は実家の近くの高校に通ってたんだけど、急に両親に『悠真学園に転校してくれ』って土下座されて」

「へ？土下座？」

美緒が首を傾げる。

「僕が悠真に行かないと、会社が潰されるって・・・、ああ、うちの父は会社を経営しているんだ」

「へー！社長さんなんだ」

「何だかよく分からないんだけど、いつの間にかこんなマンションまで用意して、勝手に転校の手続きまでされてしまったんだ」

美緒は「ふーん、そうなんだー」と言いつつケーキを箸で食べようとしたが、ハツと何かに気付いて、蓮を見た。

「と、いうことは、二人きりで勉強を教えてもらう、これは『鬼畜家庭教師編』突入の予感！」

「・・・なにそれ？」

蓮が眉を寄せて自分の前にあるケーキを箸でつつく。

美緒は箸をグツと握りしめて身を乗り出した。

「鬼畜家庭教師は、女生徒を自分の膝に乗せて、色々口には出せないような事をしながら、勉強を教えるのです！」

「・・・・・・・・」

「問題が解けたら『ご褒美』と言ってイタズラし、解けなかったら『お仕置き』と言って、やっぱりイタズラするのです！」

「・・・・・・・・」

「そして必ず、女生徒の親にはウケがいい！『先生のおかげで成績が上がった』なんて感謝されるのです！」

「……」

「ああ、だけど、はじめはあんなに嫌だったのに、いつの間にか先生にされる事が快感になつてきて……！このままではいけない！私の身体、どうしちゃったの！？先生から離れなきゃいけない、でも離れられない！」

美緒は自分の肩を抱きしめた。

「私、どうすればいいの！？」

「……大丈夫だよ」

ペットボトルの蓋を開けて、蓮はジュースを飲んだ。

美緒が語っている間に、ケーキも食べ終わっていた。

「僕は人間の女性に興味無いから。犬にしか恋愛感情抱けないって知ってるよね。たとえ大上さんが裸でいても何の反応もしないから、安心していいよ」

「おお……、あっさりカミングアウト。まだ鬼畜家庭教師の悲しい過去を話してないのに」

美緒は座り直すと、ケーキに箸を付けた。

「美味しー！！」

「よかったね。残りのケーキは勉強が終わってから食べようね」

「えーっ！！」

膨れっ面の美緒を無視して、蓮は鞆から教科書とノートを取り出した。

第22話

外がすっかり暗くなった頃、美緒は勉強を終えて、帰り支度をしていた。

蓮の授業は、驚く程分かりやすかった。

「佐倉君、立派な先生になれるよ！」

うんうんと頷く美緒に、蓮が笑う。

「ありがとう。でも僕は父の会社を継ぐから、先生にはならないけどね」

「なるよ。ヨシヨシ先生が言ってたもん。『教員決定』って」

蓮は首を傾げたが、あまり深く考えずに腕時計に視線を落とした。「遅くなっただけど、家の人には怒られないかな？」

「んー、大丈夫。うちの両親仕事忙しくて、朝早くて夜遅いから。」

お母さんは今日休みだったけど、急な呼び出しで会社行っちゃって、愛ちゃんが言ってた」

「河内さんが？」

二人は立ち上がった、玄関へと向かう。

「うん。お母さんさら優牙の携帯にメールが送られて、更に優牙が愛ちゃんにそれを転送して、愛ちゃんが私に教えてくれたの」

「・・・大上さん、携帯持ってたないの？」

美緒はガクリと肩を落として、溜息を吐いた。

「昨日、佐倉君から逃走中に落としたでしゅ。私、何台も落としたり壊したりしてるから、お母さんが『もう美緒に携帯は必要ありません』って」

「・・・大上さんって、どんくさいよね。よく怪我してるし」

美緒はキツと蓮を睨み付けた。

「違います！どんくさくなんてありません——あう！」

靴を履こうとして躓いた美緒の腕を、蓮が掴んだ。

「・・・ありがとうでしゅ・・・」

蓮は安堵の溜息を吐いて、美緒を見た。

少し一緒に居ただけだが、美緒が驚く程ドジだということが、よく分かった。

数少ない皿が、既に二枚美緒の手により割られている。

意外なことに、勉強は飲み込みが早く、成績低迷の原因が単純に授業を聞いていないからだということが判明した。

集中力とやる気が無く、すぐに妄想の世界に旅立つのが、問題なのである。

それを今後、どのように修正していくかが、蓮の課題であった。

「邪魔しました」

無事靴を履き、ペコリと頭を下げる美緒を蓮は撫でて、自分も靴を履いた。

「家まで送るよ」

「え？一人で帰れるからいいよ。ってゆーか、家の場所探ろうとしてる？」

「・・・そういう勘は働くんだ」

蓮は美緒を玄関から押し出すと自分も出て、ドアに鍵を掛けた。

「こんなに暗いのに、一人で帰るの？怖いおじさんに攫われちゃうよ」

蓮の言葉に美緒が一瞬不安そうな顔をする。

「だ、大丈夫だもん！走って帰るから！」

蓮は屈んで美緒と視線を合わせると、少し首を傾げた。

「・・・そっか、残念だな。頑張ったご褒美にチョコレート買ってあげようと思ったけど、いらないんだ」

「・・・え？」

「チョコレートの専門店があるんだよ。とっても美味しいんだけど、いらないんだ」

美緒の視線が彷徨う。

「もうすぐ閉店の時間だけど、急げば間に合うよ」

「・・・行く！」

蓮はにっこり笑って、美緒の頭を撫でた。

「いい子だね」

マンションの廊下を「チョコレート！チョコレート！」と、歌いながらスキップする美緒を見て、蓮は呟いた。

「お馬鹿さん。よく今まで無事に過ごしてこれたな」

こうして美緒は危ないお兄さんに連れられて、家に帰ったのだった。

第23話

「ここが、大上さんのお家？」

「・・・はい、そうでしょう」

チョコレートを買った後ダッシュで逃げようとした美緒だったが、結局捕まり言いくるめられ、自宅の前まで蓮を連れて来てしまった。

「じゃ、じゃあ、送ってくれてありがとう。また明日」

美緒は手を振るが、蓮が立ち去る気配はない。

家をじっと見上げ、その身体はプルプルと小刻みに震えている。

「さ、佐倉君・・・？」

蓮の異常な様子に、美緒が後退る。

「やっと、やっと再会できる」

頬を流れる涙を拭うこともせず、蓮は両手を大きく広げた。

「今行くよ！ハニー！」

蓮が走る。

許可無く敷地内に入り、外壁に沿ってぐるりとまわり、玄関ドアの前に立つ。

「外には居ない！室内か！」

蓮がドアノブを引っ張ると、ドアには鍵が掛かっておらず、あっさりと開いてしまう。

「い、いや、ちょっと、待って、佐倉く——」

美緒の制止の声など、蓮にはまったく聞こえていなかった。

家の中に入る蓮の後を、美緒は慌てて追いかけた。

「どこだー！！僕の可愛いハニー！どこだーっ！！」

靴のまま上がろうとする蓮に驚き、美緒は咄嗟にその足にしがみついた。

「うわぁっ！！」

バランスを崩した蓮が転び、その上に折り重なるようにして、美緒が倒れる。

「離せ！邪魔をしないでくれ！」

「駄目です！土足厳禁！靴脱いでください」

「くそあ！僕とハニーの愛を妨害する気だな！負けないぞ！」

「さつきから思ってたけど、『ハニー』って呼ぶのやめてください！キモい。背中ゾクゾクでしゅ！」

「ウオオオオ！」

蓮は手をギュッと握りしめると、しがみつく美緒をそのままに、ほふく前進し始めた。

「ああ！だから靴！脱がないと怒られるのです」

「どこだハニー！迎えに来たよ！」

「止まってえー！ってゆーか、もう帰ってーっっ！！」

その時、急に蓮の動きが止まった。

美緒が漂う凶悪な気配にハッとして顔を上げると、エプロン姿の優牙が、怒りの形相で目の前に立っていた。

「佐倉蓮。テメーここで何やってんだコラ」

優牙は片足を上げると、蓮の頭を容赦無く踏みつけた。

「うぎゃあ！優牙！『ガゴッ！』って音がしなかった！？今、佐倉君の顔面から！砕いた？骨、砕いた！？」

「姉ちゃん、何でこいつがここにいる？」

優牙は美緒がしっかりと握りしめている小さな紙袋をひったくり、袋の中から綺麗に包装された箱を取出した。

「これは何だ？」

「え・・・？チョコレート」

「まさか佐倉蓮に買ってもらったわけじゃねーよな？」
「・・・」

「餌付けされてんじゃねーよ！」

優牙は美緒の襟首を掴んで蓮から引き剥がした。

「それと、何度言えば分かる？家に靴のまま上がるなって言ってるだろ？」

「うう・・・、だって佐倉君が・・・」

「言い訳するな！さつさと脱げ！」

美緒は泣きながら靴を脱いだ。

「俺はコレを捨ててくるから、その間に手を洗って、うがいして、着替えてこい。メシにする」

優牙はコレ呼ばわりした蓮の襟首を掴んで、持ち上げようとした。

しかしその時、蓮が突然ガバツと身を起こした。

その顔を見た美緒が目を見開く。

「うぎゃああああ！佐倉君、血、血」

蓮の鼻から血が流れ、頬から顎にかけてを赤く染めていた。

蓮は流れる鼻血を拭こうともせず、ゆっくりと顔を上げ、優牙を見た。

「・・・何たる試練。このような大きな壁が、僕とハニーの間に存在するとは。しかし、障害が大きければ大きい程、愛も盛り上がる。そうは思わないかい？弟君」

蓮の異常な様子に、優牙が眉を寄せる。

「何言ってるんだ？意味分かんねー」

蓮は優牙の胸ぐらを掴んで、グイと引っ張った。

「ハニーは何処だ？」

「ハニー？」

「茶色の、柴犬位の大きさの、僕の可愛いハニーだよ！」

「・・・・・・」

優牙は盛大な溜息を吐いて、蓮の手を引き剥がした。

「犬・・・ね。そんなもんうちには居ねーよ」

「嘘だ！」

「嘘じゃねーよ。『犬』は居ねー。納得出来ないなら、家ん中探ししてみれば？」

蓮と優牙が睨み合う。

「火花が・・・！見えない火花が散っている！うおお、熱い！」

優牙が美緒に拳骨を落とした。

「・・・ハニーを見付けたら、連れて帰る。いいな」

「好きにしろ。だがその前に――靴を脱ぎやがれ！」
優牙は思いきり力を込めて、蓮の足を蹴りつけた。

第24話

四つん這いの美緒が、泣きながら足跡と蓮の鼻血で汚れた床を、雑巾で拭く。

「さつさとやれ。そっちの隅がまだ汚れてるだろ？手を抜くな」

「はい、お姉様。ああ、私も綺麗なドレスを着て舞踏会に行きたー」

優牙が美緒の頭を踏み、床にグリグリと押しつけた。

「やめる。お前には魔法使いも王子も現れない。シンデレラに土下座で謝れ」

グリグリグリグリ。

「うう……。私のような者が、夢見てすみませんでした」

美緒は床を隅まで拭いて、ついでに血で汚れた蓮の顔も綺麗に拭いた。

「鼻血、止まった？」

蓮はティッシュをギュツと丸めて左右の鼻穴に詰め込んだ。

「ありがとう。大丈夫。さあ、搜索開始だ！」

蓮が勢いよく立ち上がる。

「……。雑巾で顔拭かれたのに、平気なのか？」

優牙が汚物を見る目を蓮に向けたが、犬の事しか考えていない蓮が、その事に気付く様子はまったくなかった。

蓮はまず、目の前のリビングに続くドアを開いた。

部屋を見回し、ソファの下やテレビの後ろまで見る。

「そんな狭いところに居るわけねーだろ。オラ、早く雑巾洗って干してこい」

後半は美緒に言っつて、優牙は腕を組み、壁に凭れた。

リビングに居ないと分かると、蓮はキッチンへと向かった。

棚を一つずつ開けて中を調べる。

「優牙、今日の夕飯は何？」

雑巾を干して戻ってきた美緒が、優牙に訊いた。

「チキンカレー」

「わーい！チキンカレー好きい」

大上家の夕飯は、いつも優牙の手作りである。

忙しい両親と役立たずの美緒の代わりに、炊事洗濯掃除を優牙がやっているのだ。

蓮はキツチンの棚の中をすべて見ると、和室に向かう。

押し入れを開けて、中に入っていた布団も引っぱり出した。

「おい！布団片付けろよ！」

バスルームやトイレも見て回り、一階には居ないと分かると、蓮は二階への階段を上る。

上がってすぐ目の前のドアを開けた。

ベッドと机があり、机の上には漫画が積まれている。

「あう！乙女の部屋まで見るのでしゅか？」

美緒の抗議は無視され、蓮は電気をつけて、ベッドの下を覗く。手を突っ込みベッドの下にある物を引っ張り出した。

「・・・あ」

出てきたのはブラジャーとパンツだった。

「洗濯物はきちんと出せ！」

優牙の拳が美緒の頭に振り下ろされた。

美緒の下着になど全く興味が無い蓮は、ベッドの下の搜索が終わると、クローゼットの中も調べ、隣の部屋に移った。

「俺の部屋。因みにこの隣は両親の部屋。捜すのはいいが、荒らすなよ」

蓮は残りの部屋も同じように捜し、ベランダも見たが、勿論犬など居ない。

「ほら、居ないだろ」

勝ち誇ったように言う優牙を蓮はチラリと見て、二階から更に上へと続く階段を指差した。

「この上は？三階？」

「いや、屋根裏。物置だ」

蓮が階段を上る。

屋根裏部屋の中には衣装ケースや工具類、電化製品それに何故か自転車までが、ぎゅうぎゅう詰めといった感じで押し込まれていた。蓮は荷物をかき分けながら、奥へと進む。

「もう諦めるよ。何も居ないって、分かっただろ？」

「……」

部屋の奥まで行くと、蓮は悔しげに唇を噛みしめた。

「さあ、メシにするぞ」

優牙が美緒の肩をポンと叩き、階段を降りようとする。

「——クソッ！」

蓮は苛立つ気持ちを抑える事が出来ず、足下にあつた黒い大きなゴミ袋を蹴った。

ボスッという音と共に、ゴミ袋が軽く浮き上がる。

それを見た美緒が目を見開いて叫んだ。

「ああっ！駄目！それは駄目！大事な物なんです！」

慌てて荷物をかき分け進んでくる美緒に、蓮は首を傾げ、足下のゴミ袋を見た。

「開けては駄目ですよ！」

「……」

特に気にしてはいなかったが、美緒の必死な様子に中身に興味が沸き、蓮は固く縛られたゴミ袋の口に手をかけた。

「ああ！駄目だったら！」

縛り目を解き、中を覗いた蓮は、己の目を疑った。

「……え？これは！？まさか！」

蓮は驚きに震える手を、ゴミ袋の中に差し入れた。

第25話

「こ、これは・・・！」

蓮はゴミ袋の中の物を、そつと掴んで出した。
指の間からサラサラと零れる上質な茶色の毛。

「これは・・・、ハニ―の毛だ！」

袋一杯に入った狼毛に、蓮が目を見開く。

「一体何故？こんな所に、こんなに沢山」

蓮から数歩離れた場所で、美緒がガクリと膝をつき、うなだれた。

「ああ・・・。駄目って言ったのに」

蓮はゴミ袋をギュツと抱き締め、美緒に厳しい視線を向けた。

「大上さん、これはどういうことかな？何故ハニ―の毛がこんなに？まさかと思うけど、ハニ―に何かよからぬ事をした訳では、ないだろうね」

その言葉に、美緒はキツと顔を上げ、蓮を睨み付けた。

「『よからぬ事』って何ですか！？それは私の物です！駄目って言ったのに乙女の秘密を暴くとは、なんと鬼畜な！市中引き回しの上、獄門を申し渡すです！」

「これは僕のものだ！毛一本たりとも絶対に渡さないぞ！」

激しく睨み合う二人。

蓮は袋の口を縛り直し、それを抱えて身構え、美緒は近くにあったモップを手に取り、柄を両手で握りしめ、振り上げた。

「おのれ佐倉蓮！成敗！成敗————って痛い痛い痛いー！！」

突然頭に走った痛み、美緒は涙目になりながら、後ろを振り仰ぐ。

「あう！優牙・・・！」

美緒の頭を鷲掴みにした優牙が、鬼の形相で立っていた。

優牙はギリギリと指に力を入れて、美緒の耳に口を近付けた。

「おいこら、あれは何だ？」

「え……？盗人？」

「佐倉蓮の事じゃねえ！」

優牙は更に指に力を入れた。

「あの毛は何だ？って訊いてんだよ」

「あの毛は私のです！」

美緒がモップを放り投げて、自分の頭を掴む優牙の手首を両手で握った。

「抜けた毛を、一生懸命拾い集めてたんだから！例え優牙でもあげないよ！」

「要るか！……で？お前はアレで何をしようとしていた？」

「え……。それは……」

美緒の視線が彷徨い、優牙は美緒と自分の額をコツンと合わせた。強制的に視線を合わされ、美緒が拗ねたように唇を尖らせた。

「……布団」

美緒が呟いた言葉に、優牙が眉を寄せる。

「だから、布団を作るの」

「……何だそりゃ？」

「羽毛や羊毛の布団があるんだから、狼毛布団があってもいいでしょ？『最高級狼毛布団』で大儲け————って痛いー！優牙痛いー！！」

優牙が指に思いきり力を込めた。

「お前は！何怪しい物作ろうとしてんだ、馬鹿が！誰が買うつてんだそんなモノ！」

「枕もあるよ！」

「要らねーよ！」

「それ買った！」

「うるせーぞ佐倉蓮！会話に入ってくるな！」

優牙は美緒を突飛ばし、蓮に向かって右手を差し出した。蓮が眉を寄せる。

「ん……？なんだい？」

「それを寄越せ。処分する」

蓮は目を見開いて、信じられないと言わんばかりに大きく首を振った。

「ハニーの毛を処分するだって！？何を言っているんだい弟君！」

「そうです！私の夢が！希望が！会社設立が！」

優牙は頬を引きつらせ、頭を掻き毟った。

「お前等と話していると、頭がおかしくなりそうだ」

「だいたい、肝心のハニーは何処に居るんだ？毛だけ見付かるなんて・・・！」

「・・・知らねーよ」

「嘘だ！怒らないから僕の目を見て答えろ！」

「・・・」

優牙は溜息を吐いて、美緒の襟首を掴んで階段へと向かった。

「腹減った。メシにするぞ」

「おおっ、優牙。現実逃避とは情けない」

優牙の拳が美緒の頭に落ちた。

第26話

「美味しい・・・！」

「でしょお。優牙は市販のカレールーを使わないんだよ。数種類のスパイスを合わせて作るの」

「へえ。そうなんだ」

「この味に辿り着くまでは、カレー専門店で食べ歩いて試行錯誤してたんだよ。暇人だよな」

隣合わせに座り、カレーを食べる美緒と蓮の間に、優牙がしゃもじを投げつけた。

「佐倉蓮！テメーがなんで食ってたコラ！」

美緒がスプーンをペロリと舐めて、眉を寄せる。

「いいじゃない。ケチくさいこと言わなくても」

「僕、いつもコンビ二弁当だから、こんな美味しいカレー食べる事が出来て嬉しいよ」

優牙がチツと舌打ちをして、もう一枚皿を出した。

「いつもコンビ二弁当って、お前のところも親が忙しいのか？」

優牙は美緒の向かいの席に座り、行儀よく手を合わせてからスプーンを手に持った。

「佐倉君は、無駄に広いマンションで一人暮らしなんだよ。それでフォークが無いの」

優牙が眉を寄せ、美緒をスプーンで指す。

「おいこら待て。姉ちゃんがなんでそんな事知ってた？まさかそいつの家に行ったんじゃない？だろーな」

美緒はキョトンとして首を傾げた。

「そうだけど？」

「危ねーだろ！男の一人暮らしの家に行くなんて！」

「そうかなあ？」

呑気な美緒に、優牙のこめかみがピクリと動く。

「姉ちゃんみたいな馬鹿は、上手く言いくるめられて、やりたい放題されるぞ。身も心もしゃぶり尽くされて、ボロボロになって捨てられるんだよ」

美緒が「えっ？」と驚いて隣を見ると、蓮は心外だと言わんばかりに眉を寄せた。

「弟君、僕は女性には全く興味が無いんだよ。犬が好きなんだ。だから安心していいよ」

「おお！そうだったのか。それなら安心————って、そんな訳あるかー！」

「優牙、見事なノリツツコミ！」

パチパチと手を叩いて喜ぶ美緒にスプーンを投げつけ、優牙はテーブルをドンツと拳で叩いた。

「女に興味の無い青少年なんて、いる訳ねーだろ！紳士振って、油断したところを食う積もりだな」

「疑い深いなあ。世の中にはいろんな人間がいるものだよ。おかわり」

皿を差し出す蓮に、優牙は口元を引きつらせる。

引つたくるように皿を奪い、乱暴にご飯とカレーをよそって蓮の前に置く。

「いや、本当に美味しいね。毎日こんな料理が食べられたら最高だね」

「うるせー。俺はそんなお世辞で誤魔化されねーぞ。姉ちゃんサラダもちゃんと食え」

結局、蓮は優牙に睨まれながらも、図々しく腹一杯食べた。

そして後片付けの段階になると、蓮は優牙を手伝い皿などを洗い、手伝うと逆に邪魔な美緒は、ソファーにだらしなく寝転びテレビを観ていた。

「弟君、お姉さんの使うお皿はプラスチック製なんだね」

「ああ、姉ちゃんにガラスや陶器は厳禁だ。すぐ割っちゃうからな」
「・・・成る程、確かに」

割られてしまった自宅の皿を思い出し、蓮は頷いた。

「・・・さて、そろそろ帰ろうかな」

蓮は捲っていた袖を元に戻しながらキッチンから出て、リビングの隅に置いてあった黒い大きなゴミ袋を抱えた。

「お邪魔しました。カレー、とても美味しかったよ」

「ああああ！ちょっと待ったー！！」

さりげなく毛を持って帰ろうとした蓮に気付いた美緒が、勢いよく走ってくる。

「おっと！危ない」

咄嗟に蓮は横に飛び退き、美緒が頭から壁に衝突して床に倒れる。蓮はゴミ袋を抱えたまま倒れた美緒を飛び越え、リビングのドアを開けた。

「姉ちゃん！おいこら待ちやがれ！」

キッチンから優牙が飛び出し追いかけたが、蓮は素早く靴を履いて逃走する。

優牙が家の外に出た時には、すでに何処にも姿が見当たらなかった。

「なんて速さだ。俺が追いつけないなんて・・・！」

悔しさに強く拳を握りしめ、誰もいない道を睨み付けていると、頭を両手で押さえよるめきながら、美緒が家から出てきた。

「うう・・・、痛い。優牙、私の毛は？」

「・・・逃げられた」

「ええ！？」

「ああ！？なんか不満があるのか！？」

優牙は美緒の両頬を掴むと思いきり引つ張った。

「抜け毛を拾い集めるなんて気持ち悪い事しやがって！そもそも佐倉蓮を家に連れてきたお前が悪いんだろ！そうだろ！？」

「いひゃいひゃい！ゆふきいひゃいー！」

美緒の絶叫が御近所に響き渡った。

第27話

朝、欠伸をしながらリビングのドアを開けた美緒は、いつもならとつくに学校に行っている優牙が、顰め面で昨夜の残りのカレーを食べているので驚いた。

「ええ？優牙、何でいるの？」

優牙はギロリと美緒を睨んで立ち上がり、キッチンに行った。

「居ちや悪いか？」

「そうじゃないけど、珍しいから」

椅子に座る美緒の前にカレーを置いて、優牙はドスンと自分も椅子に座った。

「・・・あんまり眠れなかったんだよ」

「何で？」

無邪気に訊いてくる美緒に舌打ちする。

「あいつの事が頭に浮かんで、眠れなかったんだよ」

「あいつ？」

「佐倉蓮だ！」

その言葉に美緒が大きく目と口を開けて驚愕の声を上げた。

「えええー！！佐倉君？頭に浮かんで眠れないって、それは恋！？」

「馬鹿が！！」

優牙はスプーンを美緒の額に投げつけた。

「あう！痛い！」

「あいつ、俺より速いなんて・・・！」

美緒は痛む額を押さえ、涙目で優牙を見上げた。

「優牙、悔しかったんだ」

「・・・」

優牙は床に落ちたスプーンを拾って、シンクに投げた。

「可哀想に。走りには自信があったのにね。狼なのに人間に負けちゃうなんて、優牙のプライドはズタズタ——！！」

優牙が美緒の頬を掴んで、思い切り引つ張った。

「いひやいー！いひやいー！！」

「・・・次は負けねーよ」

優牙は手を離すと、リビングから出て行こうとした。

「あれ？何処行くの？」

痛む頬を押さえて首を傾げる美緒を、優牙がチラリと見る。

「学校に決まってるんだろ？」

「ちよつと待って！」

「はあ？何でだよ？」

美緒は慌ててカレーを口に運ぶ。

「傷心の弟を、一人になんて出来ないよ。お姉ちゃんが一緒に登校してあげまぢゅからね」

「・・・！！」

優牙は美緒に近づくと、怒りでプルプルと震える拳を振り上げた。

第28話

「待つて優牙！待つてよ。あうう、靴紐が、靴紐がー！！」

「————チッ！」

優牙は舌打ちすると、玄関に座り込んで靴紐と格闘している美緒の前に跪いた。

形よく蝶々結びにしてやり、腕を掴んで立たせる。

「ありがと。優牙」

なんだかんだと言いながら、結局一緒に登校する為に、優牙は支度の遅い美緒を待つていたのだった。

「遅刻する。行くぞ」

優牙は勢いよく玄関のドアを開け、

「・・・・・・」

閉めた。

「あれ？どうしたの？」

後ろの美緒が不思議そうに首を傾げる。

優牙はギョツと目を瞑り目頭を揉んだ。

「幻覚・・・、じゃねえよな」

優牙が意を決し、もう一度勢いよく玄関ドアを開けると、そこには爽やかに笑う蓮が居た。

「おはよう！弟君。今日はいいい天気だね」

「てめー！なんでここに居やがる！」

「一緒に登校しようと思って、迎えに来たよ」

昨日あんな事があったのに、まるで何事も無かったかのような図々しい態度に、優牙は啞然となる。

「ああああー！！佐倉君！私の大切な毛を返して！」

後ろから顔を覗かせた美緒が、大声を上げる。

「ドロボー！ドロボー！泥棒が居るよー！お父さん、お母さん、逮捕してー！！」

「うるせー！ちょっと黙つてろ」

優牙は美緒の頭に拳を落とすと、蓮を睨み付けた。

「待ち伏せなんて、まるでストーカーだな」

「違うよ弟君。これは愛だ」

「その思い込みがストーカーなんだよ！」

優牙は美緒の腕を掴んで、蓮を突飛ばして歩きだした。

「弟君、鍵を掛け忘れてるよ」

「いいんだよ！鍵掛けたら姉ちゃんが家に入れなくなるだろ！」

「え？それはもしかして・・・」

蓮が優牙に引き摺られている美緒を見ると、美緒は『正解！』と
いうように二回頷いた。

「姉ちゃんが何度も鍵無くすから、うちは戸締まりするのやめたんだ」

「それは・・・凄いな。泥棒が入るんじゃないかい？」

蓮のもっともな意見を、美緒が肯定する。

「泥棒入るよ！でもお父さんとお母さんが、逮捕するからいいのでしゅー！」

「うちの両親警察官だからな。お前もストーカーの容疑で逮捕されちまえ」

いくら警察官だからといって家に鍵を掛けないなんて、普通はあり得ないだろう。

蓮は、美緒の両親も美緒同様変り者に違いないと、自分の事は棚に上げて思った。

そうして優牙が歩いていると、ふいに美緒がビクリと身体を強張らせた。

「あ？どうした？」

優牙は立ち止まり、美緒をしつかり立たせてやる。

すると美緒は、怯えた表情で優牙にしがみついた。

「コロの声がするでしゅ・・・」

優牙が前方を見ると、丁度石田さんの家から、小型犬が元気に飛

び出してきた。

美緒はコロが苦手だ。

コロは優牙の命令には従うが、それ以外の者の言葉には全く耳を貸さない。

特に美緒の事は完全に自分より格下と見なしているようで、会うと必ず馬鹿にした表情で、襲いかかってくるのだ。

飼い主である石田夫人はコロを溺愛していて、何をしてもニコニコ笑うばかりで、躰けようとする気配はない。

優牙は「ああ・・・」と溜息混じりに呟くと、呆れた表情で美緒を見た。

「狼が犬を怖がるな」

「だって・・・」

益々強くしがみつく美緒に溜息を吐いて、優牙はこちらに向かって走ってくるコロに、強く命じた。

「止まれ！」

するとコロがピタリと動きを止める。

「座れ。動くな」

命令通りお座りをしたコロの後ろから、石田夫人が「コロちゃん！」と叫びながら追いかけてきていた。

「まったく、ちょっとは躰けるよ。ほら、行くぞ」

優牙はしがみつく美緒をそのままに歩きだそうとする。

「——え？」

しかし、その横を猛烈な勢いで走り抜ける者がいた。

「さ、佐倉君！？」

蓮は美緒の声などまったく聞こえていない様子で、コロのもとに一直線に駆けていった。

第29話

美緒の横を風が駆け抜ける。

驚く美緒と優牙の目に映ったのは、少し離れた場所でお座りしているコロに、一直線に走っていく蓮の後ろ姿だった。

「はああああー!!」

蓮は気合いと共にアスファルトを蹴り、コロに向かってスライディングする。

危険な気配を感じたコロが、逃げようとしたが既に遅く、コロは蓮に強く身体を抱き締められた。

「可愛い、可愛い!コロちゃん、ハア、コロちゃん!」

蓮はコロを撫でまわし、顔をべろべろと舐めまくる。

「キヤインキヤインキヤインキヤキヤキヤキヤキヤッ!」

大きな目を更に見開き、コロが悲痛な叫びをあげる。

「きゃあー!!コロちゃん!コロちゃんー!!」

石田夫人も絶叫しながら、コロに駆け寄る。

「やめてー!何するのあなた!」

石田夫人が蓮の制服を掴んで引っ張り、ボタンが弾け飛び道路に散らばった。

「コロちゃん!可愛いコロちゃん!ハア、ハア、ハア!」

悲鳴をあげるコロと石田夫人。

それでもコロを舐めまくる蓮。

目の前に広がる地獄絵図に、優牙と美緒は呆然とした。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・おい」

「・・・・え?」

優牙はゆっくりと腕をあげ、蓮を指差した。

「あれは何だ?」

「え・・・つと、コロを激愛・・・？」

優牙は美緒の胸ぐらを掴んで、顔を触れる程近づけた。

「何なんだあいつは！すげー舐めてるぞ、気味悪い！」

「いや、私に言われても・・・」

「普通じゃねーよ、あいつ！ヤバいぞあれは！」

「優牙、そんなに引つ張ったら苦しい！」

優牙は手を離すと、美緒の肩を掴んだ。

「行くぞ。あいつには金輪際関わるな」

その時、コロが一層高い悲鳴をあげた。

ハッとして振り向いた優牙と美緒が見たのは、遠い目をしたコロ

と、泣き崩れる石田夫人と、輝く笑顔の蓮だった。

蓮はコロを抱き上げ、石田夫人に渡す。

「はい。ありがとうございます。可愛いですね、コロちゃん！あれ？どうしたんですか？そんなに泣いて」

蓮がポケットからハンカチを取り出して差し出したが、石田夫人はコロを抱き締め、泣きながら走り去った。

蓮は首を傾げてそれを見送り、ふと思い出したように美緒と優牙に視線を向けた。

「あれ？弟君もどうしたんだい？そんな怖い顔して」

蓮が二人に近付こうとする。

「寄るな！あっち行け！」

美緒を庇うようにして、強く嫌悪感を示す優牙に、蓮はハッと氣付いて、慌てて両手を振った。

「ああ！違うんだ！僕が愛してるのはハニーだけだよ！あれはちょっとした挨拶と言うか、コロちゃんとコミュニケーションを取っただけで、決して浮気とかじゃないんだ！大体コロちゃんは男の子だよ。僕にはそういった趣味は無いから！」

優牙が顔を顰めて後ろに一步退く。

「姉ちゃん、あいつは何を言っているんだ？」

「いや、だから私に訊かれても・・・」

優牙は美緒の肩を抱く手に力を込め、蓮から顔を背けて歩きだす。
「行くぞ。奴とは目を合わせるな」

優牙の早足に引き摺られ、美緒は小走りになる。

「ちよつと待つて大上さん。急に走つてどうしたんだい？」

乱れた服を整え、道路に落ちたボタンを拾いながら、蓮が二人を追いかける。

「寄るな変態！！」

優牙が歯を剥き出しにして威嚇する。

「おおう、佐倉君、『泥棒・ストーカー・変態』なんて、見事な三重苦」

「こら、話しかけるな。変態が伝染るぞ」

後ろを振り向いた美緒の頭を掴んで無理矢理前に向かせ、優牙は更に足を速めた。

「変態つて、伝染るの？」

美緒は走りながら、不思議そうに優牙を見上げる。

「姉ちゃん馬鹿だから、伝染る」

「えー。それはやだなー」

「おい、走るぞ」

「ええーっ！？」

美緒の抗議の声は無視され、学園まで三人は全速力で駆けつけたのだ。
つた。

番外編 「姉ちゃんと自転車」 前編（前書き）

PV5万突破しました。ありがとうございます。
24話に出てくる自転車のお話、優牙視点です。

番外編 「姉ちゃんと自転車」 前編

春休みのある朝、俺は目が覚めるとすぐ着替え、朝食を作る為に階段をおりた。

学校がある日は時間が無いので、前日の残りなどを朝食とするが、休みの日は作る事ができる。

洗面所で顔を洗い、今朝は何にしようか・・・と思いながら、リビングのドアを開け、俺は驚愕した。

「・・・あの馬鹿親父！」

リビングのど真ん中に置かれた不吉極まりないもの。

『自転車』だ。

ご丁寧ハンドルにリボンまで結んである。

高校生になった姉ちゃんが、自転車を欲しがって父さんに強請っていたのは知っている。

だが俺の猛反対で、その話は無くなった筈だ。

姉ちゃんに自転車なんて与えても、事故を起こすだけなのに。

だいたい父さんは姉ちゃんに甘すぎる。

そして、とばかりを受けるのは俺だ。

俺は自転車を外に運ぶ為、持ち上げる。

姉ちゃんに見つかる前に、リサイクルショップに売ってしまおう。

しかしその時、二階から物音が聞こえた。

休日は遅い時間にしか起きない姉ちゃんが、よりによって今日のような日に限り、早く目覚めたようだ。

自転車を売り払う計画は、諦めざるを得ない。

俺は思わず舌打ちした。

姉ちゃんが軽快に階段を降りる・・・と思ったら、ドカドカと派手な音。

絶対階段から落ちた。

しかも、漫画みたいにゴロゴロと転がり落ちた筈だ。

リビングから出てみると、思った通り、姉ちゃんは階段の下で丸くなって唸っていた。

「うう……、痛い」

ヨロヨロと立ち上がり、俺に気付く。

「優牙。おはよー」

「おはよう」

「今日の朝御飯は何かなー？」

慣れとは恐ろしい。

階段から落ちたぐらいでは、もうお互い何も感じなくなってしまった。

「……まだ何も作ってない」

「ええー!?」

俺は素早く姉ちゃんの頬を摘んで引っ張った。

「いひゃい、いひゃい！」

食う専門のくせに、文句言いやがって！

俺が手を離すと、姉ちゃんは涙目で頬を押さえた。

溜息を吐き、嫌々ながらリビングに入る俺に、姉ちゃんも続く。

「おおおおー!?」

ああ、予想通り。

姉ちゃんは歓声をあげながら、自転車に触りまくる。

無邪気にサドルに頬擦りまでしている。

「優牙！優牙！乗ってみたい!!」

「まず着替えて顔を洗え。練習はメシを食ってからだ」

「えー！」

頬を膨らませ、不満気な表情の姉ちゃんを睨む。

すると、渋々服を脱ぎ始めた。

「ここで脱ぐな！」

羞恥心って言葉を知らないのか！

姉ちゃんを廊下に蹴り飛ばし、俺は朝食を作る為に腕まくりをした。

番外編 「姉ちゃんと自転車」 中編

「うぎゃあ！痛い！」

少し前までピカピカだった自転車は、もう既にボロボロになっている。

勿体ねー。

意外にも、乗ることは簡単に出来た。

ただ、止まらない。

壁や電柱にぶつかりまくっている。

・・・何故だ？

「もつとはやく、ブレーキをかけろ」

「うう・・・、やってるんだけど・・・」

やってねーだろ！

ああもう、付き合ってらんねー。

俺は姉ちゃんの襟首を掴むと、しっかり目を合わせ、言い聞かせた。

「いいか、よく聞け。俺は家の中に入る。練習するのはいいが、絶対に遠くには行くな」

「ええ！？優牙帰っちゃうの？」

姉ちゃんの縫るような視線を無視し、念押しした。

「遊んでいいのは、家の前だけだ。分かったな」

「・・・はい」

俺は姉ちゃんから手を離すと、家の中に入った。

まだ掃除が済んでいないのだ。

俺は掃除機を掛け、拭き掃除もした。

そうだ、ついでに窓ガラスも拭くか。

内側を拭いて、次に外側を掃除する為、外に出る。

「・・・？」

そこで俺は異変に気付いた。

やけに静かじゃないか？

まさかと思いつつ、家の前の道に出て、辺りを捜す。

・・・居ねえじゃねーか！！

信じらんねー。あれだけ言ったのに。

どこ行きやがったんだ？

俺は窓掃除を諦め、姉ちゃんの搜索をする事にした。

変身すれば、嗅覚や聴覚が鋭くなり、見つけるのは容易くなるが、そこまでする必要はないだろう。

それに犬の姿では、自転車と姉ちゃんを、担いで帰る事が出来なくなる。

先ずは学校方面から捜すか。

そう思つて足を踏み出した時、シャレにならない音が聞こえた。

——キキキキーツ！！ドカンツ！

「・・・・・・・・」

姉ちゃんだ。

確認した訳ではないが、確信した。

事故りやがった。

俺は急いで音のした方に向かった。

そして、家から少し離れた大通りで、姉ちゃんを見付けた。

「だ、大丈夫ですかー！？」

運悪く姉ちゃんを轢いたと思われる男性が、慌てふためいている。

当の姉ちゃんは、パツクリ割れた頭から多量の血を流し、気絶しているようだ。

俺は姉ちゃんのもとに行くと、その身体を無造作に左肩に担ぎ上げた。

男性や見物人が、啞然としたり、悲鳴をあげたりしている。

「ちよ、ちよつと君、何を——」

我にかえつた男性が、俺を止めようとした。

まあ、普通はそうだよな。

「俺はこいつの弟です。これぐらいの怪我、いつものことなんで、大丈夫です」

それだけ言うと、俺は壊れた自転車を抱えて、素早くその場から立ち去った。

家に戻ると、自転車は庭に置き、二階への階段をのぼる。

姉ちゃんの部屋のドアを開けると、ベッドに姉ちゃんを放り投げ、一階からタオルとガムテープを持ってきた。

傷口を見てみると、

「・・・・・・・・」

うげっ、中身見えてるぞ。気持ち悪い。

パッキリ割れた頭にタオルをあて、ガムテープでぐるぐる巻きにする。

実は姉ちゃんは、自己治癒力が異常に高い。

しかもそれは、命の危険を伴うような、大きな怪我であればある程発揮される。

その代わりなのか、嗅覚・聴覚・その他諸々は人間並で、変身のコントロールも出来ないが・・・。

おそらく三日もすれば、起き上がれるようになるだろう。それより血で汚れた身体が気持ち悪い。

俺はシャワーを浴びる為、姉ちゃんの部屋を後にした。

番外編 「姉ちゃんと自転車」 後編

「ああー！私の自転車がー！！」

たった一晩で、完全復活しやがった・・・！

壊れた自転車を擦りながら、涙を流している姉ちゃん。

治癒力はラスボス級だな。

『選ばれし勇者』じゃないと、もう倒せないに違いない。

「うつ・・・。お父さん、もう一台買ってくれるかな」

「ふざけるな！」

まったく懲りてない様子の姉ちゃんの頭を、鷲掴みにする。

「痛い痛い痛いー！！」

ああ、腹が立つ！

そうして姉ちゃんの頭をブンブン振り回していると、家の前で車が急停止した。

・・・なんだ？

車から出てきた男性・・・昨日姉ちゃん轢いた奴じゃねーか。

男性は姉ちゃんを見て、驚愕している。

そりゃそーだ。

あれだけの怪我して、翌日には元気なんて、人間じゃあり得ねーもんな。

「げ、元氣そうで・・・良かった・・・です」

この男性、姉ちゃんの事が気になって、捜し回っていたらしい。

病院に問い合わせても、手掛かりが得られず、現場周辺で『血まみれの女の子を担いだ男の子』で聞き込んで、うちに辿り着いたとホッとした様子で語っていた。

「良くないでしゅ！私の自転車弁償して下さい！」

「お前は！自業自得だろう！」

姉ちゃんの頬を摘んで思い切り引っ張る。

「痛い痛い痛いー！」

人様に迷惑掛けやがって！

「わ、分かりました」

・・・え？

俺が振り向いた時には、男性は既に車に乗り込み、行ってしまった。

おいおい、要らねーぞ、自転車。

しかし、暫くすると、トランクに無理矢理自転車を載せた車が帰ってきた。

ありがた迷惑だ！

「わーい！自転車！自転車！！」

喜ぶ姉ちゃんの姿に安堵して、男性は何度も頭を下げて帰って行った。

「優牙！優牙！乗ってみたい！！」

「・・・お前はホント馬鹿だな」

俺は自転車を持ち上げると、玄関のドアを開けた。

「え！？優牙、何するの？」

「没収」

「ええー！？」

喚く姉ちゃんを無視し、俺は自転車を屋根裏部屋に運んだ。

リサイクルショップに売るのは、買ってくれた男性に悪いような気がするし、かといって庭に置いておけば、駄目だと言っても姉ちゃんは絶対に乗る。

これ以上よい解決法が、俺には思いつかなかった。

結局、その後数年間自転車は放置され、『勇者』の手に渡った。

勇者・・・？いや、間違えた。

あいつは『変態』だ！！

第30話

足をふらつかせ、息も絶え絶えに教室に入ってきた美緒に、愛が眉を寄せる。

「なんだか、今日は一段と激しいわね」

「ううう……。泥棒がストーカーから変態に超進化」

「何それ？」

愛は首を傾げながら、制服のポケットから振動している携帯を取り出した。

「優牙からメール。『変態に気を付けろ』……。って何これ？姉弟揃って意味不明。あんた達ってこういう所、そっくり——、おはよう。佐倉」

愛の言葉に、美緒が振り向く。

「ヒイイ！あっち行けでしゅ！」

「そんな酷い……。おはよう。河内さん」

蓮は警戒する美緒に苦笑して、愛に挨拶を返した。

「はい、どうぞ」

蓮が美緒の目の前に、ジュースを差し出す。

「走ったから、喉渴いたよね」

爽やかに笑う蓮。

美緒は一瞬手を出そうとするが、ハッと気づき、慌ててそれを引っ込めた。

「駄目でしゅ！『変態は接触感染する』って、優牙が言ってたのです！」

ブンブンと激しく首を振って、美緒は両手を身体の後ろに隠した。

「へえ。『変態』って佐倉の事なの？」

興味津々といった感じで顔を覗き込む愛に、蓮は首を横に振った。

「違うよ。僕は自分に正直に生きているだけだよ」

「正直……。ね」

顎に人差し指を当てじつと見てくる愛に蓮は笑って、美緒に向き直った。

「それより大上さん、このジュース、飲まないなら僕が飲んじゃうよ」

蓮が、美緒の目の前でジュースを左右に揺らす。

それに合わせて、美緒の顔も左右に揺れる。

「うっ・・・」

「いいのかな？」

「うっ・・・」

美緒はひつたくるように蓮からジュースを取ると、キャップを開けて勢いよく飲み始めた。

「よしよし。いい子だね。弟君は冗談を言ったただだよ。ほら、触ってるけどなんともないだろう？」

蓮が美緒の頭を撫でながら、優しく言う。

「う・・・、うん」

「君はハニーへと繋がる大切な糸だよ。切れたら困るんだ」

「うん??」

「さあ、席に着こうね」

「うん」

蓮に連れられ席へと向かう美緒に、愛は呆れてしまう。

「お馬鹿・・・」

愛は呟いて、美緒と蓮を暫く見ていたが、やがて溜息を吐いて、テスト勉強をする為にノートを開いた。

そんなふちに、食べ物を与えられたり、怒られたり、誉められたり・・・を繰り返されながら、美緒は放課後蓮の家に行き、帰りは自宅まで送ってもらった。

「だから！何でそいつを連れて来るんだよ！！」

「あうっ！痛い！！」

優牙は持っていたお玉を、美緒の顔面に投げつけた。

第31話

「なんで連れて来るんだよ！朝のおぞましい出来事を忘れたのか？俺の忠告をちゃんと聞け。いつかお前もコロみたいに、全身舐められまくるぞ」

優牙が美緒を説教している隙に、蓮は素早く家に上がりこみ、中を見てまわる。

「・・・居ない」

しかし当然『ハニー』の姿は無く、蓮は肩を落としてソファーに身を投げ出した。

「おいこら変態。何勝手に寛いでやがる？帰れ」

優牙が蓮を踏みつけようとする。

しかし蓮は軽く身を捻り、それをかわした。

「・・・そう言えば、君たちの両親は、警察官なんだよね。もしかして、ハニーは警察犬なのかい？」

「ああ？そんなわけねーだろ。馬鹿は警察犬になんてなれねーよ」

「僕のハニーを侮辱する気か！？」

激昂した蓮が優牙に掴み掛かろうとする。

優牙は舌打ちしながら蓮の手を払いのけ、キッチンへ行き、菜箸で鍋の中身をぐるぐるかき回す。

「ハニーは特殊任務中で、僕に会う事が出来ないのでは？」

「何だそりゃ。刑事ドラマじゃねーんだから・・・」

「警察犬は、うちの両親だよ」

「・・・」

「・・・は？」

テレビのリモコンを握りしめ、あれこれチャンネルを替えている美緒を、蓮が理解不能といった感じで見る。

観たい番組が無かったのか、リモコンをセンターテーブルに投げ、美緒は蓮の方を向いた。

「いや、だから、特殊任務専門の警察犬、ってゆーか警察オオカ―
―うぎゃあ!」

飛んで来た優牙が、熱々のじゃが芋を、美緒の口の中に放り込む。
美緒はあまりの熱さに、床の上をのた打ち回った。
蓮が不思議そうに首を傾げる。

「両親が警察犬・・・? トレーナーということかい?」

「・・・まあ、そんなようなもんだ」

優牙は美緒の襟首を掴みキッチンに連れて行き、口の中に氷を詰め込む。

「うっ、口の中の皮がべロベロ・・・」

涙目の美緒を睨み付けながら、優牙は小声で忠告する。

「喋り過ぎだ。あの変態が、人外に害を及ぼすような奴だったらどうする? 俺達の正体バラすのは、まだ早すぎる。分かったか?」

「はい・・・」

「お前、警戒心がどんどん薄れていつてるぞ。気を付けろ」

「はい・・・」

優牙は溜息を吐くと、美緒をキッチンから追い出した。

「・・・メシにするぞ」

「はい・・・」

ノロノロと椅子に座る美緒の横に、蓮が座る。

「今日のおかずは何かな?」

「食ってくのかよ!!」

怒鳴りつつ、優牙は茶碗をもう一客、食器棚から出した。

第32話

「じゃあ、また月曜日」

「・・・え？」

帰り際、蓮が発した言葉に、美緒は首を傾げた。

「土日はやる事があるから会えないけど、ちゃんと勉強するんだよ」

「え、あ？」

「さっさと帰れ」

優牙が冷たく言い放ち、蓮は帰って行っただ。

「ふん、やっとゆつくり出来るな」

リビングへと戻る優牙に美緒も続く。

その後二人はテレビを観ていたのだが、突然美緒が立ち上がり、叫んだ。

「あああああーっ!!」

「うるせー！何だよ！」

「今日は金曜日だ!!」

「今頃気付いたのかよ！」

美緒はクッションを抱き締めて、床をゴロゴロと転がった。

「おお。久しぶりに、のんびり出来るー」

「お前はいつも、のんびりだろうが。まあでも、今週は濃かった。疲れた」

「うんうん！」

翌土曜日、美緒はテレビを観たり漫画を読んだりして、ダラダラと過ごした。

「ちよつとは勉強しろよ」

「はいはい」

優牙の忠告などまったく聞く気配はなく、久しぶりの自由を満喫していた。

そして日曜日、優牙が朝リビングに行くと、服を着た狼がソファ

ーで丸くなり寝ていた。

「おい、姉ちゃん」

優牙が蹴ると、美緒が唸りながら目を開ける。

「んー？おはよー、優牙」

「『おはよー』じゃねーよ。こんな所で寝るな。変身しちまつてるぞ」

美緒は目をパチパチさせて、自分の手足を見た。

「おお、本当だ。いつの間に？」

優牙は呆れて、美緒の頬を引っ張った。

「気を付けろよ。変態が居なくて良かったな」

優牙はキッチンに行き、炊飯器の蓋を開けて、おにぎりを作り始めた。

出来上がったおにぎりを持って、美緒のもとに行く。

「おら、口開ける」

「あーん」

優牙は美緒の口におにぎりを放り込み、溜息を吐く。

「いい加減、変身コントロール出来るようになれよ。不便だろう」

狼の美緒は食べるのが下手だ。

一人で食事させると、食べかすが散らばり、掃除が大変なのだ。

「優牙、トイレ行きたい」

「.....」

優牙が美緒の服を脱がせてやる。

「優牙、喉乾いた」

飲み物を口に運んでやる。

「優牙、テレビのチャンネル替えて」

「優牙、漫画読みたい」

「優牙、背中が痒い」

「優牙、お昼ご飯まだー？」

「優牙——」

優牙は美緒の耳を、思い切り引っ張った。

「うぎゃあー！痛い痛い！虐待ー！虐待ー！動物虐待ー！一年以下の懲役又は、百万円以下の罰金ー！！」
「うるせー！！」

この日、夜まで美緒は人間の姿に戻らなかった。

第33話

月曜日

美緒が朝、リビングに行くと、ソファで蓮が寛いでいた。

「おはよう。弟君、先に学校行っちゃったよ。早くしないと遅刻だよ」

「・・・なんで家の中に居るんですか」

「玄関の鍵が開いてるから」

「あうう、成る程」

蓮が朝迎えに来て、放課後は蓮の家に行き、帰ってきたら、夕飯を美緒・蓮・優牙の三人で食べる。

それが当たり前のように繰り返され、次の週末には蓮は朝から美緒宅を訪れ、勉強を教えた。

「まだ捜査は終わらないのかい？いつになったら八二一に会えるんだ。君たちの両親も、いつも居ないね」

蓮の中で、『ハニー』はすっかり警察犬になっていた。

「知らねーよ。うちの両親は出張だ。暫く帰ってこねーよ」

「え？そうなの？そう言えば、最近会ってなかったな」

のんきな美緒に、優牙が呆れる。

「……知らなかったのかよ」

蓮は溜息を吐いて、テーブルに突っ伏した。

「・・・八二一に会いたい」

蓮はテーブルに頬をつけたまま、ノートにペンを走らせる。

会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会
 いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会
 いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会
 いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会

い会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい

「おいしい！あいつヤバイぞ！」

ノートに小さな字で『会いたい』と書き続ける蓮を見て、優牙は美緒の襟首を掴んで揺さ振る。

「佐倉君、ストレス溜まつてるんだね。優牙、変身してあげたら？」
「絶対嫌だ」

先日 の事件以降、コロはすっかり大人しい犬となった。

美緒を見ても、襲うことがない。

まるで別犬のようになってしまったコロに、美緒でさえ同情する程である。結局ノートが無くなるまで蓮は書き続け、溜息を吐きながら、夜帰って行った。

「・・・寝るか」

優牙はまたもや蓮の異常行動を見てしまい、疲れ果てた表情で二階へと上がった。

「そだね。明日からテストだし」

「お前、よく平気だな。変態に耐性がついたんじゃないか？」

「えー？そんなこと無いよ。おやすみ」

「・・・おやすみ」

美緒が自室へと入る。

優牙も自分の部屋に入り、ベッドに身体を投げ出す。

「・・・あいつ、ただの犬好きじゃ、絶対ねーよ。三好め・・・、なに企んでやる？」

すぐに眠った美緒とは対照的に、優牙はなかなか寝付けず、何度も寝返りを打ったのだった。

第34話

学年末テスト初日。

「いいかい？教えた事を思い出して、落ち着いてやれば、必ずいい点が取れるからね」

「うん」

「君はやれば出来る子だ。学年十位以内に入ったら、お菓子を好きなだけ買ってあげるよ」

「うんうん」

蓮が美緒の頭を撫でて離れ、三好がテストを配る。

「はい、テスト始め」

三好の合図で生徒が一斉に問題を解き始めた。
教室にはカリカリとペンを走らせる音だけが響く。

「おおおおー！！」

「！！！！」

「！！！！」

皆が集中しているなか、突然美緒が大声をあげて立ち上がる。

生徒達は身体をビクリと震わせ、驚いて美緒を見た。

「うるさいぞ！大上！」

三好が飛んで来て、美緒のおでこを軽く叩いたが、当の美緒は大きく口を開けて、テスト用紙を見つめていて反応を返さない。

「おい、大上・・・」

「分かる！分かるのです！すごい！今までテストなんて、勘で答えを書いたことしか無いのに」

「分かったから座れ」

「素晴らしい！努力は実るものなのです。問い三の答えは――
――むぐつ」

三好は美緒の口を手で塞ぐと、教室の外へと引き摺り出した。
「ううう……」

苦しそうにする美緒に、三好は厳しい表情で告げた。
「いいか、大上。努力してるのは、お前だけではない。他人の迷惑になるような行為はやめる。テスト中、もしまた奇声を発したり、立ち上がったたりしたら、すべての教科0点にするぞ」

美緒が驚愕して三好を見る。

三好は美緒の口から手を離し、頭を撫でた。

「うう……。0点は嫌」

「頑張ったんだよな。偉いぞ。先生、こんなにやる気がある大上見るの初めてだ。十位以内に入って、佐倉にお菓子買ってもらえ」

菓子という言葉に、パツと顔を輝かせる美緒を、三好が笑う。

「うん！買ってもらう」

「じゃあ静かにテスト受けろ」

「うん！」

「佐倉が好きか？」

「うん！」

「よし、行け」

「うん！」

教室に戻っていく美緒を見ながら、三好は苦笑した。
椅子に座りテストに集中する美緒を、蓮が心配そうにチラリと見る。

そんな二人を愛が見ている。

「うーん。青春だね」

不意に後ろから聞こえた声に、三好が片眉を上げた。
「来ていたのですか。珍しい」

三好の後ろに立つ背の高い青年、一見生徒のようだが、実はこの学園の理事長である。

理事長は赤い唇を少し上げ、目を細めて蓮を見た。

「ああ、やはりあの子は教師に向いているな」

「そのようですね。あの大上を、やる気にさせるくらいですから」
「楽しみだな」

踵をかえす理事長に、三好が振り向いて訊く。

「もう帰るのですか？」

「いや、生徒達を見て回るよ。若い子が頑張る姿は、何百年見えていても、飽きないな」

ヒラヒラと手を振り去っていく理事長を見送り、三好も教室の中へと戻った。

第35話

すべてのテストが終わり、美緒はホッと息を吐き、机に突っ伏した。

「あうう、終わった」

「お疲れさま。頑張ったね」

蓮の声にガバツと顔を上げ、美緒は笑った。

「うん！」

「お菓子とジュースを用意したから、うちに行こう」

「うん！」

蓮が席に戻り、三好が生徒に連絡事項等を伝え、解散となった。

「じゃあ、行こうか」

「うん！」

鞆を持って蓮に付いて行こうとした美緒が、ふと愛の方を見た。

「あ、そうだ」

美緒は愛のもとに行くと、その腕にしがみついた。

「愛ちゃんも佐倉君の家に行こうよ。お菓子とジュースがあるんだって」

愛はチラリと蓮を見て、美緒の身体を引き剥がす。

「行かない」

「ええー！？なんでー？」

「行かないけど・・・、佐倉、ちよつと美緒を借りるわよ」

蓮の答えも聞かず、愛は美緒の腕を掴んで歩きだした。

「え？なに？どこ行くの？」

愛が美緒を連れて入ったのは、使用されていない教室だった。

「ほら、座りなさい」

美緒の肩を掴んで椅子に座らせると、愛もその正面に座った。

「なあに？愛ちゃん」

不思議そうに首を傾げる美緒。

「二人の事、ちゃんと聞いておこうかと思って」

「二人？」

「美緒と佐倉の事。変身した姿を見られたのよね？」

「うん」

「それで？」

愛は長年の付き合いからコツを掴んでいるのか、すぐ脱線したり支離滅裂になりがちな美緒から、上手く話を聞きだした。

それを頭の中でまとめ、愛は大きく頷く。

「成る程ね・・・」

「なにが？」

「ん？無類の犬好きが、変身した美緒と出逢い、ペロペロハニーで変態」

「・・・何ですか？それ」

愛は笑って美緒の頭を小突いた。

「美緒が言ったんでしょ」

「ええ？」

愛は髪を掻き上げ、机に肘をつく。

「ねえ、佐倉の事、好き？」

美緒はキョトンとして、答える。

「うん。お菓子買ってくれるから、好き」

「そうじゃなくて・・・」

愛は苦笑して、美緒の頭を撫でた。

「異性として、好き？前はちよつといいなっと思ってたでしょ？」

「・・・え？」

予想外の質問に、美緒が驚く。

美緒は腕組みしてうーんと考え込むが、少ししてから首を横に振った。

「分かんない」

美緒の答えを聞いた愛は、頷いて立ち上がった。

「さあ、佐倉が待ってるから、行きなさい」

「はい??」

訳が分からずポカンとする美緒の腕を、愛は掴んで立たせる。
美緒は愛に背中を押され、廊下に放り出された。

「じゃあね、美緒」

「う、うん」

首を傾げながら蓮の待つ教室へと戻る美緒を見送って、愛は後ろを振り向いた。

「随分いいタイミングで現れるんですね、三好先生。まるで監視力メラで見えていたみたい」

三好は苦笑して、愛の隣に立った。

「何が『無類の犬好き』ですか。立派な変態じゃないの」

「あれは佐倉の『個性』だ」

「ものは言いよう、ね」

ケラケラと笑う愛の頭に、三好は掌をのせた。

「寂しいか？」

「そうね、少し。前は、ずっとまとわりついて離れなかったのに。
新しい飼い主のもとに行っちゃった。それと・・・、ちよつと羨ましい」

三好は愛の頭をグリグリと撫でて、微笑んだ。

「お前にもいい出逢いがあるさ。見た目じゃないぞ、人も人外も」
「分かってるわよ」

愛は三好の手を振り払うと、髪を掻き上げて整えた。

「パパだっけ見た目はアレだけど、中身は最高の男なんだから」
「そうだったな」

三好は笑って、もう一度愛の頭に手をのせた。

愛は三好を睨み付けたが、その手を振り払う事はしなかった。

第36話

蓮のマンションには、沢山のお菓子とジュースが用意してあった。
「うわーい！食べ放題！」

次々に頬張る美緒を蓮が笑う。

「大上さんは、本当にお菓子が好きだね」

「うん」

「ケーキもあるよ」

「食べるー！」

蓮は冷蔵庫からケーキを出して、皿にのせて美緒に渡した。

いつの間にか、蓮の家には食器が増えた。

しかもそれらのほとんどは、美緒が落としても大丈夫のように、プラスチック製である。

それだけではなく、勉強する為のセンターテーブルや、テレビ、ソファ等も揃えられ、初めて美緒が訪れた時とはまるで別の、生活感溢れる部屋になっていた。

「美味しいねー」

「そうだね」

「一仕事終えた後のケーキは格別だね。やっと勉強から解放されるよ」

「・・・ん？」

蓮が首を傾げる。

「あれだけ出来れば、三年生も一組確実だね」

「うんうんと頷く美緒に、蓮は眉を寄せた。

「・・・もしかして、もう勉強しなくてもいいと思ってる？」

「へ！？」

キョトンとする美緒を、蓮が軽く睨んだ。

「大上さんは、意外と理解力はあるけど忘れっぽいんだから、繰り返し勉強しないといけないよ。もうすぐ受験生になるんだから」

「受験生・・・？」

「大学受験！同じ学園と言えど、推薦入試に合格しなければ進学出来ないんだよ。まさか知らなかった訳じゃ無いよね。高校進学の時もそうだっただろう？」

美緒は「えーっと・・・」と思い出そうとしたが、まったく記憶に無い。

「しっかり勉強しないと、希望する学部に入れないよ。大上さんにだって、将来になりたい職業があるんじゃないのかい？」

「ええ？そんな先の事——」

「考えて無いって？駄目だよ、そんなんじゃない。だいたい君は・・・」
蓮はテーブルを叩きながら、話し続ける。

「うう・・・。説教じじい」

「何だって!？」

「うひゃあ!!」

目を吊り上げて笑う蓮に美緒が恐怖で固まった時、テーブルの上に置いてあった携帯電話が震えた。

「さ、佐倉くん、電話だよ」

蓮は携帯の画面を見ながら舌打ちする。

「ちよつとごめん」

電話に出ながら立ち上がった。

「ああ、元気」

美緒に気を使ったのか、話ながらベランダへ行く。

「うう・・・。助かった」

美緒は、テーブルに突っ伏しホッと安堵して、テレビでも見ようかとリモコンを手にする。

チャンネルをあれこれ替えながら、ソファーに寝転がろうとしたが、そのまま動きを止めた。

——来る！

「うぎゃ！マズい！」

美緒は慌ててリモコンを置いて立ち上がり、鞆を掴んだ。蓮を見ると、こちらに背を向けた形で、まだ電話をしていた。

「い、今のうちに逃げるでしゅ・・・！」

そつとりビングを出て玄関迄行ったが、そこで既に足が変身し始めている事に気付いた。

「靴が履けない・・・！」

もう間に合わない。

焦った美緒は、ちょうど目の前にある玄関入ってすぐの部屋のドアノブを掴む。

「ろ、籠城、籠城！！！」

取り敢えずこの部屋に籠もろうと考え、ドアを開けたのだが・・・。

「わ、私が居るーっっ！！？」

驚愕のあまり、美緒は腰を抜かした。

第37話

「わ、私が居るーっ!？」

美緒は驚きのあまり、ペタンと床に座り込んだ。
部屋の中に、狼に変身した自分が居る。

「な、何で私が二人!？」

しかし、もう一人の自分のところ迄ソロソロと這っていき、気付いた。

「あれ・・・?これって・・・」

動かない。視線が合わない。

つまり、生きてはいない。

「に、人形!？」

自分そっくりに作られた、等身大人形。

しかも、毛にそつと触れると、間違いなく自分と同じ感触。

美緒はハツと思い出した。

蓮に盗まれた毛・・・。

「嘘・・・!？」

人形の毛を掻き分けると、一本一本丁寧に、ボンドで貼り付けられた後があった。

「た、匠の技・・・?何という事でしょう」

啞然とする美緒だったが、その間にも変身は進む。

「うう・・・!と、取り敢えず籠城」

ドアを閉め、運良く鍵付きだったので、しっかりと鍵を掛ける。
ホッと息を吐いた時、蓮の声が聞こえた。

「大上さん?どこ？」

リビング側から、ドアを順に開け閉めする音が近付いてくる。
そして遂に、美緒が居る部屋のドアを、蓮が開けようとする。

「あれ?鍵・・・?」

ドキドキしながらドアを見ていると、突然ドンツと大きなノック

の音がして、美緒は飛び上がった。

「大上さん、まさか僕のハニー人形に、イタズラしている訳では無いだろうね」

低い低い、唸るような声音に、美緒は恐怖に震えた。

「大上さん・・・？」

美緒は思わず後退りする。

「や、ヤバいでしゅ。もの凄くヤバい気配がするでしゅ」
どうしようかとキョロキョロと見回して、窓に気付く。

「あ・・・！そうだ！あそこから・・・」
変身して窓から逃走しよう。

美緒は急いで制服を脱ぎ始めた。

「逃げ逃げ」

そして最後の一枚、ブラジャーを脱ぎ捨てた時、事件は起きる。

ビーーーーッ！

「えええ！？」

突然鳴り響く音。

美緒はその発生源である、自分の胸元を見る。

「防犯ブザー！！」

愛に貰った防犯ブザーを、美緒は言い付け通り、首に掛けていたのだ。

「何でこんな時に・・・！これどうやって止めるの！？」

止め方が分からずパニック状態の美緒に、更に不幸が続く。

カチャ――。

「え！？」

鍵が開いた！

既に下半身は狼になってしまっている。

咄嗟に目の前にあるベッドの中に潜り込んだ。

「大上さん！」

頭からすっぽり布団をかぶり震える美緒の耳に、ドアが開く音が聞こえる。

「よかった。ハニー人形は無事か」

蓮が呟きながら美緒に近付き、背中を布団越しにポンポンと叩いた。

「大上さん、何やってるんだい？近所迷惑だから、このうるさい音も止めてくれないか」

「……はい？」

「大上さん！」

蓮が布団を引っ張る。

「ああ！駄目！」

ギョツと布団を握りしめたが、力かなう筈も無く、美緒の上半身は剥き出し状態になった。

「……！！」

「あうう……」

蓮が目を見開き、美緒が俯く。

「……」

「……」

蓮は美緒の胸元に手を伸ばし、防犯ブザーを止めて、深く溜息を吐いた。

「ごめん……」

「え……？」

顔を上げた美緒を、蓮が強く抱き締めた。

「大上さんの事は、好きだよ。でも、こういうのでは無いんだ」

「……はい？」

「僕にはハニーが居る。君の想いには応えられない」

「ええと……」

「本当に、ごめん」

「……………」

激しく誤解されている。

しかも、抱き締められて身動き出来ない。

「佐倉くん、離し——、ああ!」

上半身が縮む感覚。

「え!?!」

蓮が目を見開く。

「ああああ——っ!!!」

絶望的な悲鳴が響き、美緒は蓮の目の前で、口が尖り、毛が生え・
・。

——
狼になる。

「……………」

「……………」

もう、どう足掻いても、隠し方が無い。

呆然とする蓮を、美緒は首を傾げて上目遣いで見た。

「わ……、わん?」

美緒は蓮の目を見つめ、可愛らしく吠えた。

第38話

「わ．．．、わん？」

「．．．．．」

「なんちゃって！じゃあ、私、帰るね。ごちそうさまでした」
ベッドから飛び降りようとする美緒を、蓮がガツシリと掴む。

「うぎゃあー！手品、手品、トリック！種も仕掛けもあるのでしゅ
！今から人間に戻ってみせますので、暫し時間をください！」

叫ぶ美緒をベッドに押し倒し、蓮は涙を流す。

「そうか！そうだったのか．．．！」

「何が！？」

「こんなに近くに居たのに、僕は馬鹿だ」

蓮は美緒の額に唇を押し付け、頬擦りをする。

「愛する僕に会いたいが為に、人間に変身していたのだね」

「あう！逆！」

「『正体がバレたからには、もうここには居られません』って言う
のだろう？」

「それって『恩返し』的なやつ！？違うでしゅ！布は織りましえん
！」

「離さないよ！」

「いやあー！離してー！」

蓮がベロベロと美緒の顔を舐める。

美緒の背筋に悪寒が走った。

「嫌！嫌！嫌いー！！」

「――！！」

蓮がハッと目を見開き、動きを止める。

「嫌い．．．？」

「嫌いでしゅ！」

「・・・！！」

蓮は美緒から手を離し、ヨロヨロとしながらベッドを降りてへたり込んだ。

「そんな！やめてくれ！嘘だろハニー！」

美緒はホツと安堵して、蓮を睨み付けた。

「許可無くペロペロする人は嫌いでしゅ！話を聞かない人も嫌いでしゅ！」

「・・・！！」

ガクリと肩を落とし、蓮は頭を下げた。

「ごめん。そうだよ。僕、再びハニーに会えた事が嬉しくて・・・ハニーの気持ち考えて無かった」

蓮が顔を上げる。

「ペロペロしても、いいかい？」

「駄目でしゅ！」

美緒は枕をくわえ、蓮に投げつけた。

「ハニー・・・」

「ハニーじゃありません。美緒です！それに犬でもありません！」

「え・・・！？」

目を見開く蓮に、美緒は鼻息荒く言う。

「私は狼！狼女でしゅ！！」

「ええ！？・・・って、狼も犬も一緒じゃないか」

「違います！」

「どっちでもいいよ。僕は君が好きなんだ」

「何ですか？その曖昧さは！犬にしか恋愛感情抱けないって言うてたくせに！」

性懲りも無く伸びてきた手を、美緒はガブリと咬んだ。

「うっ・・・！痛くないぞ・・・！」

蓮は、咬まれている手はそのままに、もう一方の手で、美緒を抱き締める。

「ウーッ！」

唸る美緒の身体を撫で回した。

「愛してる！愛してるんだ・・・！」

蓮がまたもや美緒を舐めようとした時――。

「あ・・・」

第39話

「あ……………」

美緒の手足が伸びていき、体毛が薄くなる。

口が縮み、耳の位置が変わる……。

「え……………!？」

人間の姿に戻っていく美緒を、蓮は呆然と見つめていた。

やがて完全に人間になると、蓮は美緒の顔を撫でながら、涙した。

「何故……?人間の姿なんかに……………」

「さつきは『どっちでもいい』って言った癖に!」

「犬と狼はどっちでもいいけど、人間と狼はどっちでもよくない!戻ってくれ!」

「無理でしゅ!変身はコントロール出来ないものなのです!次はいつ変身するか分かりません!」

「ええ……………!？」

蓮は、目と口を大きく開けて、ベッドに倒れ込んだ。

「そんな…………。何とかならないのかい……………」

「何ともありません!」

「……………」

蓮は美緒を恨みがましい目で見て、溜息を吐いた。

「…………仕方ない。じゃあ、取り敢えず人間の姿の君に言うよ。僕と付き合って下さい」

「嫌でしゅ!」

「何故!？」

蓮はガバツと身体を起こし、美緒の肩を掴んだ。

「ペロペロは嫌!」

「しない!ちゃんと清い交際をする!」

美緒が首を振る。

「変身した姿しか興味が無い人は嫌！」

「それは我慢してくれ」

「ええ！？」

美緒は啞然として蓮の手を振り払った。

「何で私が我慢しなくちゃいけないんですか！？」

「お菓子もケーキも、好きなだけ買ってあげるから！」

「う．．．！．．．でも、今回は駄目でしゅ！」

美緒は散らばっている制服と下着を掻き集める。

「あ．．．！」

しかし、それらを蓮が素早く奪い取った。

「何するんですか！」

「付き合ってくれなきゃ返さない。全裸で帰れるものなら帰ってみる！」

「うう．．．！卑怯者！」

いくら美緒でも、全裸で外を走る勇氣は無い。

唇を噛み締めた時、更に蓮が部屋の隅に置いてある勉強机の引き出しから、ライターを取り出した。

「十秒以内に返事をしないと、燃やす」

「ヒイイ．．．！何でそんな所にライターが！」

「十、九、八」

取り返そうと飛び掛かってくる美緒を軽く躲して、蓮は続ける。

「七、六、五」

「返してー！！」

「四、三、二．．．」

蓮がライターに火をつける。

「一．．．」

「あああー！ーっ！！」

美緒のパンツが燃えた。

「僕は本気だ！次は制服を燃やすぞ！！」

「ううう・・・！」

「さあ！どうする！？」

「ああああーっ！！！！」

美緒は制服にしがみつき、懇願した。

「それだけは、それだけはやめて！！」

「じゃあ僕と付き合うか！？」

「・・・！！」

ギョツと目を閉じ、震えながら美緒は頷いた。

「よし。今日から君は僕の彼女だ」

蓮はライターを放り投げ、泣き崩れる美緒の頭を撫でる。

「ほら、立って。スカート穿くよ」

「うう・・・。ノーパンにミニスカート・・・！」

「パンツなら、僕のを貸してあげるから」

こうして二人は、恋人同士となったのだった。

番外編 神秘の宇宙（前書き）

PV10万突破しました。ありがとうございます。
第29話の夜のお話です。

番外編 神秘の宇宙

真夜中――。

眠っている私の耳に、コンコンと小さな音が聞こえた。
目を開けて窓際に行き、カーテンを少し開けると、そこに狼が立っていた。

「優牙様・・・」

「コロ、出て来れるか？」

私は頷き、玄関脇にある私専用の出入口から庭に出た。

「コロ・・・」

優牙様はいたわるように、私の頭に前足で触れる。

「今日は、その・・・、大変だったな」

朝の出来事を言っているのだろう。

私は首を振り、微笑んだ。

「いいえ・・・」

「身体は洗ってもらったか？」

「はい。美也子様が洗ってくださいました」

すると優牙様は、何故か大きく目を見開いて、私を見つめた。

「どうされました？」

「コ、コロ。お前、今なんて・・・」

どうされたのだろう。

私は首を傾げ、もう一度同じ事を言った

「美也子様が――」

「美也子様!？」

優牙様は大きな声で私の飼い主の名を言ったまま動かなくなった。

「優牙様？優牙様!」

優牙様はハッと気付いて、私の身体を揺さ振った。

「どうしたコロ!」

「何がですか？」

「美也子『様』だなんて！おまけにその言葉遣いは……！お前、どうしちゃったんだ！」

ああ……。

私は首を振り、空を見上げた。

輝く無数の星に、笑みを浮かべる。

「宇宙を……見たのです」

見知らぬ男に襲われたあの後、目を覚ました私は驚いた。

真つ暗な場所に、私の身体は浮いていた。

周りには、キラキラと輝く光り。

そして遠くに見える、一際美しい青い星――。

私は理解した。

ここは宇宙なのだと。

「以前の私は、なんと小さな犬だったのでしょうか。なんでも思い通りなると粹がついていたあの頃、今考えると、恥ずかしい限りです」

「コロ！」

「この大宇宙で、私の存在など塵に等しい」

「おいコロ！」

「生きている事、それだけで奇跡。すべてに感謝です」

「コロ！意味が分かんねーぞ！しっかりしろ！」

それはあなたが、まだ見ていないから。

「いつか、優牙様も見ることが出来るといいですね。あの神秘的な宇宙の姿を」

「コロ……！」

優牙様は、私の頬に自分の頬を押し付けて、身体を震わせた。

「俺がいつか、必ず仇を取ってやるからな」

なんの話なのだろう？

「仇……？やめて下さい。乱暴な事は」

「コロ……」

優牙様は悲しい顔をして、私の頬を舐めて帰って行った。

私は専用の出入口から家の中に戻り、一つ欠伸をして、目を閉じ

た。

。 瞼の裏に、あの時見たのと同じ、神秘的な宇宙の姿が見えた・・・

第40話

朝、目が覚めると、目の前に顔があった。

「うぎゃあ！」

思わず叫んだ美緒に、顔を覗き込んでいた蓮が眉を寄せる。

「うるさいよ、美緒」

「うつ……！呼び捨て！」

美緒は目を擦りながら、身体を起こした。

「何勝手に、乙女の部屋に入ってるんですか」

「弟君、帰ってないよ」

「ああ……」

昨日、あれから美緒は蓮と大上家に帰って来たのだが、そこに優牙の姿は無く、代わりにダイニングテーブルの上に二人分の食事の用意と『出掛ける』と一言書かれた置き手紙を見つけたのだった。

「たま〜にあるんだよ。出掛けたまま帰って来ないこと」

「ふーん。ほら、遅刻するよ。早く着替えて」

蓮は美緒を立たせ、パジャマを脱がす。

制服を着せられながら、美緒は溜息を吐いた。

「優牙にバレたら、怒られるんだろうな」

ビクビクしながら帰った昨日、優牙が居なくて正直ホッとしたのだ。

貴重な狼女である自分が人間の彼女になったなど、家族、特に父親に知られたら大問題だ。

下手すれば、狼男と強制結婚させられる可能性もある。

「話せば分かってくれるよ。愛し合う一人と一匹を引き離す事など、誰にも出来ないさ」

「……愛してしまえん」

うなだれる美緒の手を握り、蓮は部屋を出て一階へと降りて行く。

「顔洗って、齒磨きして」

「はいい・・・」

準備を整え、美緒はテーブルの上のパンを手を持つ。
それを齧りながら家を出た。

学校に着き、蓮に手を引かれて教室に入ると、二人に気付いた愛が片眉を上げた。

「おはよう。手を繋いで登校なんて、仲がいいのね」

「うう、愛ちゃん助けて・・・」

「僕達、交際する事にしたんだ」

「・・・」

愛はチラリと美緒を見て、口角を上げる。

「そう、おめでとう」

「ありがとう」

「大変よ。色々と・・・ね」

蓮が目細める。

「色々と・・・、ねえ。まさか君もお仲間かい？」

髪を掻き上げ、愛は笑う。

「フフ・・・。さあ？狼では無いわ」

「ふーん。じゃあ興味無いな」

蓮は肩を竦め、美緒を引き摺って席に向かった。

「愛ちゃん・・・！」

綻るような目の美緒を、愛は優しく見つめた。

「お似合いよ」

「・・・！！」

衝撃の一言を浴びせられ、美緒の身体から力が抜ける。

「美緒、ほら座って。教科書ノート出して」

「・・・・・・」

美緒は椅子に座り、机に突っ伏す。

「美緒！」

「捨てられた。愛ちゃんに捨てられた・・・！」

そんな二人を見ながら、生徒達がコソコソと話す。

そして、『実は身体だけの関係だった二人が、正式に付き合いだした』という噂が、学園中を駆け巡った。

第41話

昼休み――。

「あうう……。久し振りに、視線が痛い」

グッタリと机に突っ伏す美緒の頭を、蓮が教科書でポンポンと叩く。

「お昼食べに行こう。今日は学食でいいよね」

「……。売店でパンでも買って、人気の無い所で食べたい」

「行くよ。立って」

「……。私の意見は無視？」

ノロノロと立ち上がる美緒の手を、蓮が握る。

その時、大きな音を立てて、教室のドアが開いた。

「姉ちゃん!!!」

教室にいた全ての者が驚いて、一斉にドアの方を見る。

「ゆ、優牙っ!」

突然現れた弟に美緒は驚き、思わず蓮に縋り付いた。

「……。姉ちゃん、どういう事だ？」

優牙は美緒の元までまでゆっくり歩いて来ると、襟首を掴もうとした。

パシッ――!

しかしその手を、蓮に掴まれる。

「佐倉蓮……。!」

睨み付けてくる優牙に、蓮が笑う。

蓮は優牙の耳元に唇を寄せ、囁いた。

「弟君も、変身出来るんだよね? 可愛いんだろうね。見てみたいな

あ
」

「……………!!」

優牙の背中に寒気が走る。

コロの悲劇が頭をよぎり、優牙は蓮を突飛ばした。

「姉ちゃん！この変態と正式に付き合い出したって、すげー噂にな
ってんぞ！それに、……バラしたな」

美緒はブンブンと首を振る。

「違うでしゅ！……バレたのでしゅ」

「どっちも一緒だ！！」

優牙は美緒の襟首を掴み、振り回した。

「この馬鹿が！俺がたった一日留守にしている間に、やらかしやがつ
て！」

「ゆ、優牙！苦しい……！」

「しかも『付き合い出した』だあ？人間とか？お前、自分の立場分
かってんのか！？」

「ヒ、ヒイイイ！」

優牙は舌打ちして、蓮を睨み付けた。

「姉ちゃんをやる訳にはいかねえ。諦めろ」

蓮は笑って手を伸ばし、美緒の腕を掴む。

「無理。もう美緒はもらった」

「何だとコラ。——愛！」

優牙に呼ばれて、教室の隅で成り行きを見ていた愛が、眉を上げ
る。

「何？」

「『何？』じゃねーだろ！呑気に見てんじゃねーよ」

愛は微笑んで、髪を掻き上げた。

「そうね。注目され過ぎだし、場所を替えましょう。行くわよ」

「……命令するな」

愛が歩きだし、その後に美緒を引き摺った優牙が付いて行く。
その後ろを蓮が付いて歩く。

「・・・おい、佐倉蓮」

「なんだい？」

優牙は振り向いて、蓮を睨み付けた。

「何でお前が付いて来る？」

「場所を移動するんだろう？」

「お前は付いて来るな！」

「・・・」

蓮はチラリと美緒を見て、フツと息を吐く。

「まあ、いいか。今更逃げられないだろうし。じゃあ教室で待つて
るから、なるべく早く帰って来て。ね、美緒」

「・・・はい」

興味津々の生徒達に見送られ、三人は出て行く。

一人残った蓮は、周りの視線など全く気にせず、ノートを開いて
勉強を始めた。

第42話

愛は三好の研究室のドアをノックし、中に入った。
美緒の襟首を掴んだ優牙が続く。

「来たか」

「『来たか』じゃねーよ。どうしてくれるんだ」

優牙は三好を睨み付け、美緒をソファーに投げた。

「うぎゃあ！」

三好は苦笑して椅子から立ち上がり、涙ぐむ美緒の頭を撫でた。

「佐倉に人外が存在を教える。予定通りだろう？」

「どこがだよ！二人が付き合い始めるなんて、予定に無かっただろーが！」

「恋愛は個人の自由だ」

「・・・！！」

優牙は腰に手を当てて、美緒を睨み付けた。

「姉ちゃん、あの変態が好きなのか？」

「ヒイイ・・・！」

美緒は恐怖のあまり、三好にしがみついた。

「答える！」

美緒がビクリと震えて、しどろもどろになりながら答えた。

「違、佐倉君、パンツ・・・」

「何の話をしている！！」

優牙が腕を振り上げる。

しかし、その腕を愛が掴んだ。

「いいじゃない。この先美緒にまともな恋愛が出来る訳無いんだから、確実に愛してくれる人と結ばれた方が、幸せよ」

「愛・・・！」

「そつだぞ、大上弟。以前はやる気のまったく無かった大上を、こんなに変えたのは佐倉だ」

「三好・・・！」

優牙は愛の手を振り払い、歯ぎしりした。

「・・・姉ちゃんは貴重な狼女なんだぞ」

愛が鼻を鳴らす。

「だから、好きでもない相手と結婚して、子供を産めって？美緒の意志は無視して。馬鹿じゃない？」

「お前みたいな混血に、純血の大切さは分かんねえんだよ！」

声を荒げる優牙に、愛は頷く。

「そうね、分らないわ」

愛は自分の頭にそつと手を触れ、優牙を真つ直ぐ見た。

「でも私は、自分の血も、この身体も、種族を越えて愛し合う両親も、誇りに思っているわ」

「・・・え！」

睨み合う二人――。

「・・・」

先に視線を逸らしたのは、優牙だった。

そんな優牙の肩に、三好が手を置く。

「佐倉はいい男だ。あつさり人外 of 存在を受け入れた懐の深さも、素晴らしいよな。多少変わった性癖があっても、それで大上が幸せになるならいいじゃないか」

ポンポンと、三好が優牙の肩を叩く。

「・・・」

優牙は唇を噛みしめて俯いた。

「え・・・？皆、私の意志は？無視？」

美緒の呟きに答える者はいない。

が、優牙は不意にある事に気付き、三好の胸ぐらを掴んだ。

「ちよつと待て。『性癖』って何だ？」

「・・・え？」

三好が慌てて首を振った。

「いや、間違えた。性格だ性格」

「・・・・・・・・」

優牙は目を細め、美緒に視線を移した。

「し、知らないでしゅ！」

美緒は必死に手を振る。

更に愛に視線を移すと、愛は静かに目を逸らした。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

優牙は三好から手を離し顎に手を当て俯く。

「無類の犬好き、コロ舐めまくり、変態、パンツ・・・」

「待て待て、大上弟。ちよっと落ち着いて茶でも飲もうか」

優牙がハツと目を見開き、美緒に駆け寄ってその髪を掴んだ。

「痛い痛い痛い！優牙！」

「そういう事なのか！？なあ、そうなのか！？」

「『そういう事』って、どういう事でしゅか！？」

「・・・・・・・・」

優牙は美緒から手を離し、ヨロヨロと後ろに下がった。

「信じられねー。まさか、本当にそんな人間が存在するなんて・・・

！」

両手で頭を掻き篁り、優牙は歯を剥き出しにして、三好を睨んだ。

「知ってて黙っていたな！三好も姉ちゃんも愛も！俺だけ何も知ら

ずに・・・！許さねえ、あの変態！！」

突然、優牙が走りだす。

「こら待て！大上弟！」

三好の制止をを振り切り、優牙は駆ける。

舌打ちをして、三好が優牙を追い掛ける。

「あの馬鹿・・・！美緒！行くわよ！」

「え・・・。どうなってんの・・・？」

愛が美緒の腕を掴み、引き摺るようにして走りだした。

第43話

廊下に悲鳴が響く――。

愛がもたつく美緒を、懸命に引っ張った。

「あ、愛ちゃん！ちよつと休憩しよ」

「ダーリンの危機よ。頑張りなさい！」

「うう・・・！違うのに！」

息を切らし辿り着いた教室では、机や椅子がめちゃくちやに倒れ、生徒達が悲鳴をあげたり啞然としたりしていた。

その教室の真ん中で、三好が優牙を羽交い締めにし、蓮が床に倒れていた。

「ヒイイ！校内暴力事件勃発・・・！」

美緒の声に気付いた蓮が、顔を上げる。

その頬が腫れていた。

「美緒、お帰り。遅かったね」

蓮は立ち上がると、制服に付いた埃をはたき落とす。

そして、乱れた机を整頓し始めた。

「参ったな。弟君、本気になると強いんだね。でも、何も言わずにいきなり殴ってくるのはどうかなあ」

蓮は全ての机を元に戻すと、優牙に笑顔を向けた。

「さて、じゃあ、周りの迷惑にならない場所に、移動しようか」

「おい、佐倉・・・」

眉を寄せる三好に、蓮は首を振る。

「すみません、先生。でも僕も人生が掛かっているのです、退けません。行こう、弟君」

蓮は美緒に微笑み、横を通り過ぎる。

優牙が三好の拘束を振り払い、その後に続いた。

「さて、どこに行こう。三好先生、いい場所知りませんか？」

「知ってても教えん」

二人の後ろを歩く三好が、眉を寄せる。

「校内じゃ三好先生に迷惑になるから、美緒の家にすれば？」

三好の後ろを美緒の腕を引きながら歩く愛が、提案した。

「うーん、そうだね・・・」

蓮が顎に手を当てた時、沢山の見物人の影から一人の生徒が現れ、集団の前に立ちはだかった。

「何？僕達忙しいんだけど」

眉を寄せる蓮の目の前に、その生徒は何かをちらつかせた。

「鍵・・・？」

生徒はニツコリと笑う。

「こつちだよ」

そして、歩きだした。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

蓮と優牙はチラリと視線を合わせ、その生徒の後に付いて行く。

「え・・・？誰あれ。謎の転校生？」

ポカンとする美緒と、眉を寄せる愛。

三好は額に手を当て、溜息を吐いた。

「何を考えているんだ。あのヒトは・・・」

三人の姿は見えなくなったが、まるで行き先が分かっているように再び歩きだした三好に、愛と美緒も付いて行く。

広い校舎をあっちこつちと歩き、立ち入り禁止と書かれた張り紙のある階段を上り、着いたのは屋上だった。

「うおお！高い」

景色を楽しむ美緒の頬を、愛がつねった。

「ほら、あそこ」

愛の指差す方向に、蓮と優牙の姿があった。

「行くぞ」

三好が美緒の頭をポンと叩き、三人は蓮と優牙の元へと向かった。

第44話

「屋上での決闘・・・！まるで一昔前の青春映画みたい！」

歓声をあげる美緒の頬を、愛がつねる。

「馬鹿」

「痛い痛い愛ちゃん！」

美緒は頬を擦りながら、「そういえば・・・」と、周りをキョロキョロと見た。

「謎の転校生は？」

先程の生徒が居なくなっている。

三好は溜息を吐いて、美緒の頭を撫でた。

「何処か別の場所で見ているのだろう。まったく、制服まで着て本当に『謎の転校生』になる気じゃないだろうな」

うんざりといった様子の三好に、愛が訊く。

「ねえ、あの方はどなた？」

「・・・分かってるだろう」

愛は目を細める。

「へえ、やっぱりそうなの」

三好は愛の頭も撫でる。

「え？何？誰？」

一人だけ分かっていない美緒を愛は笑い、蓮と優牙の方を指差した。

「ほら、始まるわよ」

準備体操を終えた蓮と優牙が対峙する。

「覚悟はいいか！？変態！うちの大事な姉ちゃん傷物にしゃがって！許さねえからな！」

「傷物・・・？なんの事かな？」

「分かってんだぞ！お前が変身した姉ちゃんに、あれこれしたって！」

優牙が蓮に殴りかかる。

蓮がそれを紙一重で避けて、反撃する。

「……え？『あれこれ』って……何？え？何か、もの凄い勘違い？」

啞然とする美緒に、愛が言う。

「ペロペロされたんでしょ。似たようなものじゃない」

「これから『あれこれ』するんだろ。似たようなものだな」

「ええ！？ヨシヨシ先生まで……。もしかして私、変身したらヤバイ！？」

美緒が溢れる涙を拭う。

その間にも、蓮と優牙の対決は続いた。

「美緒は僕のものだ！ちゃんと餌もやるし、散歩にも連れて行く！お菓子だってあげる！」

「ふざけんな！姉ちゃんはずっとペットじゃねえんだよ！鎖で繋いで飼うつもりか！？」

「その何がいけないんだ！可愛い首輪だって用意してあるんだ！蓮の拳を避けた優牙が、蹴りを繰り返す。

それを蓮は後ろに跳んで避けた。

「うわ、凄いわね。堂々のペット宣言。可愛がってはもらえそうだけど」

「うう……。嫌。鎖で繋がれるのは嫌……。！」

「よしよし。先生が後で怒ってやるから泣くな」

美緒達はそうして二人の激しい攻防を見ていたが、暫くして、三好が腕時計に視線をやり、眉を寄せた。

「午後の授業が始まる時間だぞ」

「ええ！？お昼ご飯食べてない！お腹空いた！！」

縋りつき訴える美緒の頭を、困った表情で三好は撫でる。

「そう言われてもなあ」

「愛ちゃん！売店行こ！早く！」

「ええ！？対決は始まったばかりよ」

「河内、この二人の事だから、決着がつくまでは長くかかるだろう。」

先生、お前達まで授業をサボるのは許さんぞ」

「愛ちゃん！早く」

美緒が愛の腕を引っ張る。

愛は未練がましく蓮と優牙を見ていたが、フツと溜息を吐いた。

「・・・仕方ないわね」

殴り合う蓮と優牙を置いて、三人は屋上から立ち去ったのだった。

第45話（おバカ狼、変人に捕獲される編 終了）

放課後、再び屋上に行った美緒、愛、三好の三人は、そこにヨレヨレの制服姿で寝転がる蓮と優牙を見付けた。

「『お前、なかなかやるじゃないか』『お前も、な』そうして二人は互いの力を認め、堅く抱き合ったのだった。完」

「勝手に終わらせるんじゃないよ！」

優牙が素早く立ち上がり、美緒の頭を拳で叩いた。

「うわーん！優牙が叩いたー！」

頭を押さえて騒ぐ美緒を、三好が撫でる。

「姉ちゃん！本当にこんな変態の事が好きなのか！？全裸で『恋人にして』って迫ったって本当か！？」

「ええ！？」

「あら、大胆ね」

事実が相当ねじ曲げられている。

慌てて否定しようとする美緒を、蓮がギュッと抱き締めた。

「僕達は愛し合っているんだ。引き離すことなんて、出来ないよ」

「え、いや、違・・・」

優牙はチツと舌打ちをして、制服に付いた汚れをはたいた。

「もついい。好きにしろ。純血は俺が守っていく。それより腹減った。帰ってメシにするぞ」

蓮が頷く。

「そうだね。お昼食べ損なっただし。優牙君、今日の夕飯は何かな？」

「肉が食いたいな。愛も来いよ」

愛は両手を上げて、大袈裟に驚いた。

「珍しい！優牙が私を誘うなんて！」

「・・・うるせー」

プイと横を向き、優牙は歩きだす。

その後を、愛が続く。

「さあ、僕達も行こう」

美緒を引き摺るようにして、蓮も歩きだす。

「え、えええ？ちよっと、待って、何この急展開！なんで丸くおさまってんの？何がどーしてこーなるの！？ヨシヨシ先生！助けて・・！」

しかし三好は、優しい笑顔で美緒に手を振った。

「良かったな大上。幸せになれよ。この先待ち受ける困難も、二人ならきつと乗り越えられるぞ」

「ええっ！？」

美緒は驚き、大きく目を見開いた。

その夜、大上家では、優牙が腕に縋りをかけて作った料理が並び、美緒と蓮を祝福する大宴会が夜遅くまで続いた。

「早く変身しないかなあ。いっぱい可愛がってあげるのに。ね、美緒」

「うう・・・。嫌。なんでこんな事になったんだろう・・・！」

優牙の手作りケーキをやけ食いしながら、美緒は涙を流し続けた。

番外編 「好き勝手に生きるヒト」 (前書き)

第40話、帰って来なかった時の優牙のお話です。

番外編 「好き勝手に生きるヒト」

鼻を上に向けると、オレンジ色の月が目飛び込む。

ああ、すっかり夜になっちまった。

帰る頃には、朝になつてゐるかな。

あいつら、今日こそ許さねえ。

鼻から息を吸うと、空中に微かに残る、匂い。

あっちか・・・。

俺は走りだす。

「あ！ワンちゃんだあ！」

途中、すれ違った酔っぱらいが、俺を指差して言う。

誰が『ワンちゃん』だよ！俺は狼だ！

クソッ！だから人目がある時間帯に、変身するのは嫌なんだ。

何度か立ち止まり匂いを確かめながら進むと、港にたどり着いた。

おいおい。何故港？

これはなんだかヤバい雰囲気だな。

警戒しながら進むと、前方の倉庫から、あいつらの匂いがする。

あそこか・・・。

壁の上部にある小さな窓が開いているな。

静かに近付き、窓に飛び乗り覗くと、・・・やっぱり居やがった。

縄で縛られて、ビービー泣いてやがる。

そしてその側には、あきらかに普通じゃない人間。

さて、どうするか。

俺では助けだすのは無理だな。

一度離れて連絡を・・・と思った時、嗅ぎ慣れた匂いがこちらに近付いて来る事に気付いた。

凄いタイミングだな。電話しようと思っていた相手が来たじゃね

「か。」

窓から下りて待っていると、ああ、見えた。

「母さん」

囁くような小さな声でも、変身した状態なら聞こえる筈だ。

母さんは俺の前まで来ると、顔を顰めた。

「優牙、こんな所で何やってるの？」

「それが久し振りに会った息子への第一声かよ。ヒト捜しだよ。この倉庫の中で、ヤバそうな奴に捕まってるけどな」

すると母さんは「ああ」と頷き、溜息を吐いた。

「この匂い・・・、あの子達ね。また面倒を起こして」

母さんは俺と同じようにヒラリと窓に飛び乗り、すぐに下りた。

「捕まってるわね。売人に」

「売人？」

「そう。私達はいづらを追ってたの」

「ふーん、成る程」

複数の人間の匂いが近付く。

母さんが言う『私達』、仕事仲間だな。

母さん達が追ってた奴が、偶然にも俺が捜してた奴等を攫ったのか。

「じゃあ、後は頼んだ」

俺は軽く尻尾を振って、踵を返す。

しかし、そんな俺の首筋を、母さんは甘咬みした。

「優牙、ちよつと手伝いなさい」

「はあ？何言ってるんだよ。ここからは警察の仕事だろ？一般人巻き込むなよ」

「母さんが引き付けるから、うまく仕留めて」

そう言って母さんは、再び窓に飛び乗る。

「早くしなさい」

「待てよ、母さん！」

俺の制止を無視して、母さんは倉庫の中に消える。

直後、売人の怒声が聞こえた。

クソッ。我が母ながら、なんて自分勝手なんだ。

窓に飛び乗ると、走り回る母さんと、何かを手に持ち構える売人。パンツ、パンツと軽い音がする。

おい！アレは関わってはいけない物ではないか！！

『ちよつと手伝う』ってレベルじゃねーじゃねーかよ！

母さんがこちらをチラリと見る。

・・・はやくやれって事か？

息子を危険に晒すって、どういう神経してんだよ。

俺は倉庫の中に下り、売人に向かって走った。

銃を構えるその腕に咬み付くと、母さんに集中していた売人は突然の痛みに驚き、悲鳴を上げて暴れた。

そこに母さんが飛び掛かり、男にとつての弱点をガッツリ咬む。

ヒイツ！えげつない！

売人は短い悲鳴を上げて、白目を剥いて倒れた。

「ふん」

母さんは床にペツと唾を吐き俺を睨み付ける。

「仕留めろって言ったでしょう？中途半端な攻撃は命取りになるよ」

「・・・頑張った息子を、ちよつとは褒めろよ」

俺の言葉に母さんは鼻を鳴らし、顎をしゃくって歩きだす。

溜息を吐いて、母さんが示した方を見ると、震える子供が三人。

俺が捜していた奴等だ。

「ゆ、優牙兄ちゃん・・・」

子供達が縛られている縄を牙で咬み切り、ついでに頭突きを食らわせる。

「うわーん！！」

「うるせえ！泣くな！」

心配させやがって！

「子供達だけで外に出るなって、何回言ったら分かるんだよ！くそガキ共が！」

「ごめんなさいー！」

子供達は、一つだけある大きな目から、ボロボロと涙を流す。そう、こいつらはいわゆる『一つ目小僧』ってやつだ。いたずら好きで、しょっちゅう行方不明になる問題児。因みに三つ子の兄弟だ。

昔偶然、迷子になってたところを保護してやってから、こいつらの親は、何かあるたびに俺に連絡を寄越しやる。

「ほら、もう泣くな。帰るぞ」

顔を舐めてやり、俺は後ろを振り向く。

母さんが仲間を引き連れて、戻って来ていた。

「母さん、こいつらを――」

「はいはい。家に送るんだね。でもその前に訊きたい事があるから、小僧達、そこのおじさんに付いて行きな」

近くにいたおっさんが、子供達を連れて行く。

俺は大きく息を吐いて、それを見送った。

「じゃあ、俺も帰るから。母さんもたまには家に帰って来てくれよ。今、姉ちゃんが大変なんだよ」

「大変？」

母さんは俺を見て、ニヤリと笑った。

「あの変わった人間の事？」

・・・はあ？

「知ってたのかよ！父さんもか！？」

「いや、父さんは二ブイからねえ。気付いてないよ」

そうか。じゃあまだ良かった。

「早く何とかしねーと、取り返しをつかない事になるぞ」
しかし、母さんはあっさりと言いやがった。

「いいんじゃないの？」

「はあああ！？」

なんだって？

「あの野郎、変態だぞ！」

「それが何か？」

「……おいおい。」

「優牙も父さんも、『血』にこだわりすぎよ。好きに生きればいいの。美緒も優牙も」

母さんは尻尾を振りながら、去って行く。

「ああ、そうだ。母さんまだまだ忙しいから、当分家には帰らないよ。美緒の面倒よろしく」

「……」

まさに、好き勝手生きてるな。

母さんは、昔からそうだ。

はあ……、疲れたな。

俺は溜息を吐いて、家に帰る為に歩きだした。

第46話

「はぁ．．．．．」

楽しい食事の時間．．．の筈が、先程から何度も聞こえる溜息に、食卓にはどんよりと重い空気が漂っていた。

「はぁ．．．．．」

「いい加減にしやがれ!!」

キッチンから飛んできたお玉を軽く避け、蓮はまた溜息を吐く。

優牙は舌打ちをして、蓮の横に座る美緒を睨んだ。

「おいこら、何とかしろ」

「そんな事言われても．．．」

飛んできたしゃもじが、美緒の額に直撃する。

「うぎゃあ!!」

「お前の男だろう!」

美緒と蓮は三年生、優牙は二年生に無事進級した。

最初は何かと抵抗していた美緒も、ある日『もう疲れた．．．』

と小さく呟き、それからは蓮を彼氏として受け入れていた。

二人の交際は至って順調だったのだが、何故か近頃蓮の元気が無い。

優牙はイライラとしながら食卓の椅子に座り、蓮を睨み付けた。

「なんだ?『悩みがあるなら相談しろよ』とか言って欲しいのか?」

蓮はチラリと優牙を見て、美緒に視線を移した。

「相談．．．しても、どうにもならない事なのだろう?」

「なにがだよ」

「．．．．．」

蓮はスツと立ち上がり、美緒に手を伸ばす。

「ヒイイ！」

本能的に逃げようとする美緒を、蓮は捕まえた。

「うぎゃあああ！やめて下さいでしゅ！」

蓮の右手は美緒の服の中へと侵入し、脇腹を撫でて胸を掴み、左手はスカートの中、更にパンツの中にまで入って尻を撫でた。

「おい。多感な少年の前で、いやらしい行為に耽るな」

眉を寄せる優牙を無視して蓮は美緒の身体を撫で回し、そして溜息と共に、ポイと床の上に転がした。

「うう……。弄ばれて、捨てられて」

ずれた下着を整えながら、美緒は涙をそっと拭った。

一方、再び椅子に座った蓮は、テーブルに突っ伏して深く息を吐く。

「アレじゃない……。僕の求める身体は」

「酷い言い草でしゅ」

「会いたいよ……。ハニー……。どうして変身しないんだ、美緒」

少しだけ顔を上げて恨みがましい視線を向けてくる蓮に、美緒は口を尖らせた。

「だから、何度も言っているように、変身はコントロール出来ないものなのでしゅ。いつ変身するかは私にも分からないの！」

「付き合い始めてから、一度も変身していないじゃないか」

「それは仕方がないのです！」

美緒は頬を膨らまして立ち上がり、椅子に座った。

「変身してくれ」

「無理でしゅ！」

蓮が美緒の手首をガシツと掴む。

「美緒、変身」

「無理！」

「変身」

「無理」

「変身」

「無理」

「変し――」

「してるぞ」

「――え!？」

蓮がカバツと顔を上げ、美緒がビクツと身体を揺らした。
腕を組んだ優牙が顎をしゃくる。

「姉ちゃん、変身してるぞ」

「なんだって……?」

目を見開く蓮を、優牙は鼻で笑った。

「姉ちゃんの中の僅かな本能が、お前の前では変身しないように働いているのかもな。お前が帰った途端に狼になるから」

「……」

「いやらしい事するから、嫌われたんじゃないのか?」

「……」

蓮は逃げようとする美緒を引き寄せ、顔を近付けた。

「美緒……」

「ヒイ!」

怯える美緒の顎を掴み、常に無い低い声で蓮は訊く。

「変身……、してる?」

「いやあ、そんな、まさか」

「美緒、僕の目を見てごらん」

「あなたの存在が、私には眩しすぎて……」

「美緒!」

「いひゃい!いひゃい!」

ふざけるなど言わんばかりに、手に力を込める蓮。

美緒は蓮から逃れようと、手足を振り回した。

「おい!暴れるなら外に行け!誰が掃除すると思ってるんだ」

優牙の言葉に蓮は舌打ちをして、美緒を離れた。

「それにしても、いつ変身するか分からないなんて、狼人間は不便

だな」

頬杖について溜息を吐く蓮に、優牙は「ああ・・・」と呟き口角を上げる。

「コントロール出来ないような馬鹿は、姉ちゃんぐらいだよ」

「え・・・？」

「ヒイイ！優牙、何故！？」

ひた隠しにしていた事実をあつさりバラされ、美緒は涙目で優牙を見、そこから恐る恐る視線を蓮に移した。

「ひぎゃあ！怒り最大級？」

そこには光り輝く笑顔の蓮が居た。

「美緒・・・」

「はい！？」

蓮は美緒の頭に手を置いて、視線を合わせる。

「何故、嘘を吐いていた？」

「コ、コントロール出来ないのは、本当でしゅ！」

「うん。そう。美緒だけ？」

美緒はゆつくりと首を傾げ、上目遣いで蓮を見た。

「・・・」

「・・・」

ふう・・・と息を吐き、蓮は優牙に視線を向ける。

「こつち向くな。恐ええぞ、その笑顔」

眉を寄せる優牙に、蓮は尋ねる。

「変身をコントロール出来るようになれば、いつでもハニーに会えるのかい？」

優牙が頷く。

「まあ、そうだな」

「頑張れば、美緒もコントロール出来るようになるかい？」

「・・・死ぬ気でやれば、あるいは・・・、な」

「・・・」

蓮は美緒に向き直り、恐怖に震える美緒の頭を、優しく優しく撫

でた。

「美緒、死ぬ気で頑張ってみようか」

美緒の目から、涙が滝のように流れた。

第47話

「そもそも、優牙君はどうやって、変身をコントロール出来るようになったんだい？」

食後のコーヒーを飲みながら、蓮が優牙に訊く。

「ああ、狼人間は通常狼の姿で生まれ、そこから変身を繰り返しながらコントロールする事を覚える。俺の場合は、ハイハイする頃には完璧にコントロールしていたらしいぞ」

「・・・ハイハイ？」

蓮は軽く目を見開き、それから美緒に視線を移した。

「ヒイイ！」

逃げ出そうとする美緒の襟首を掴み、蓮は更に優牙に訊く。

「ハイハイの赤ん坊が出来る事が、どうして美緒には出来ないんだ？」

優牙が眉を寄せ、美緒を見る。

「本人にコントロールしようという意志があまり無いから・・・だろうな。力が無い訳ではないと思う。自己治癒力は異常に高いしな・・・つまり、やる気が無いという事か」

蓮は溜息を吐いて、美緒を引き寄せた。

「さて、どうするか・・・」

「うう・・・。キツいとか辛いとか痛いとは、やめて下さいでしゅ」

蓮の腕の中で、美緒が泣くむ。

「・・・根性を叩きなおすところからか？」

スツと目を細め、蓮は美緒の頭を撫でる。

「そもそも、美緒は甘やかされすぎだよな。こうやって優牙君が何でもやってくれるから、自分でやろうという気にならないのはいかな」

「おい、何だつて？」

蓮の言葉に優牙の口元が引きつる。

「お前は分かかってない。こいつの真の恐ろしさを。試してみるか？」
優牙は立ち上がり、美緒にコーヒークップを差し出す。

「おら、片付けてみる」

「ええ！？私が？」

「嫌そうな顔、するんじゃないよ！」

優牙にカップを押し付けられ、美緒は渋々それを手に持つ・・・
と同時に落とす。

床に落ちて割れた破片を、美緒は困った顔で見つめた。

「拾え」

「はい・・・」

しゃがんで破片を拾い、美緒はそれをキッチンに持って行く・・・
途中でこける。

「うぎゃあ！痛い！」

顔面に破片が刺さり、血が流れる。

「美緒！」

蓮が慌てて美緒の腕を掴んで顔をハンカチで押さえ、優牙が舌打ちして近くにあったガムテープを手にとった。

「退け」

優牙は蓮を押し退け、美緒の顔にガムテープをペタペタ貼りつける。

「姉ちゃんの怪我はガムテープで治る。内臓が見えてようが脳ミソが見えてようが、ガムテープを巻いて暫く放置して置けば治る。覚えておけ」

「ガムテープ・・・」

さすがに啞然とする蓮に口角を上げ、優牙は美緒の治療を終えた。
「次は料理でもやらせてみるか？」

「いや・・・」

蓮は首を振り、美緒のガムテープだらけの顔に手を触れる。

「うう・・・痛いでしゅ・・・」

溢れる涙を指で拭ってやりながら、蓮は溜息を吐いた。

「急に高度な事をやろうとしても無理だと分かった。まずは簡単なところから始め、徐々に鍛えていこう」

「鍛える……。嫌いな言葉でしゅ」

美緒は両手で顔を覆い、嗚咽した。

第48話

「なに、やってるの？」

朝、教室に入った愛は、開口一番眉を寄せて言った。
机の上に置かれた菓子――。

美緒がそれを凝視し、更にその美緒を腕組みした蓮が見ていた。
「特訓」

蓮は美緒から視線を外す事無く答える。

「特訓？これが？」

愛は美緒に近付き、机の上に置かれた菓子を一つ指先で摘んだ。

「ああ！私のお菓子です！」

慌てて取り戻そうとする美緒の頭に蓮の拳骨が軽く当たる。

「美緒！待て！」

「ううー……」

厳しい表情の蓮と涙目の美緒を交互に見て、愛は成る程と納得した。

「ああ、駄。頑張つてトップブリーダーになつてね佐倉」

愛は美緒の目の前で菓子を開けて、なおかつそれを口に入れて笑った。

「ふぎゃあー！酷いでしゅ愛ちゃん！」

愛はそのまま自分の席に行き、美緒の頬には涙が一筋流れた。

「ああ、どうしてこんな事をしなければならないのか。ドS共に天の裁きを与えたまえ」

「意味不明な事言つてないで続けるよ。待て！」

「はい……」

美緒はじつと菓子を見つめる。

口の中に溜まる唾液を飲み込み、気を抜けば菓子へと伸びる右手を必死に左手で押さえた。

永遠とも思える長い時間を美緒は耐える。そして。

「よし」

頭上から降ってくる天の声。

美緒はたちまちパアツと笑顔になり、菓子を次々と口に入れた。

「よしよし！頑張ったぞ美緒。いい子だいい子だ」

蓮が美緒の頭を抱えてグリグリと撫で回し褒めまくる。

異様な雰囲気醸し出している二人をクラスメイト達が離れた場所から眉をひそめて観察し、愛は口元に笑みを浮かべて呟いた。

「馬鹿じゃない」

「本当になあ」

斜め後ろから聞こえた声に、愛は眉を上げて振り向く。

「おはようございます、先生」

「はいはいおはよう。何をやっているんだあいつらは」

「特訓らしいですよ」

三好は溜息を吐いて蓮の元へと向かう。

「おい、佐倉」

美緒の頭を抱えた蓮が満面の笑みで振り向いた。

「おはようございます先生。見て下さい、美緒が『待て』出来たんです」

「あーそうかそうか。ところで自分達が受験生だと覚えているか？」
「勿論です」

三好はうーんと唸り、持っていた出席簿で蓮の頭を叩いた。

「周りの迷惑だ。教室で怪しい行動はするな。もう去年までとは違うんだぞ。皆真面目に勉強しなければならんだ」

不満げな顔の蓮をもう一度叩いて三好は念を押す。

「いいか、分かったな。皆必死なんだ。教室では静かに。はい、出

席とるぞー！座れ」

最後はクラス全体に言い、三好は前に向かって歩く。

「ふーん、まあ確かにそうだな」

蓮は三好を睨み付けながら、菓子を貪り食う美緒の身体を撫でた。

第49話

三好は眉を寄せ、頬杖をついた。

「お前達、先生はこれから昼飯を食べるのだが」

「どうぞ」

「『どうぞ』ってなあ」

昼休みの研究室は異様な雰囲気にも包まれていた。

テーブルに置かれた優牙手製の弁当をじっと見つめる美緒。

その口からは今にもヨダレが垂れてきそうだ。

「落ち着かないから出て行ってくれ」

「嫌です」

即答する蓮。

三好はこめかみを押さえる。

「先生が教室でやるなというから、仕方なくここに来たんですよ」

「ここでもやるな」

蓮は首を横に振り、微動だにしない美緒の頭を撫でた。

「先生見て下さい。美緒は頑張っていますよね。頑張っている生徒を応援するのが？」

「教師の役目——か？」

「その通り。素晴らしい」

パンツパンツと手を叩き、蓮は美緒の調教に戻ってしまう。

「まあ確かに頑張っているがなあ。それはちよつと——」

「先生静かにして下さい。美緒が集中出来ません」

「……」

三好は諦めて自分の弁当を机の上に広げた。

「美緒、待てだ」

卵焼きを掌に載せ、美緒の目の前で左右に揺らしながら蓮が言う。

「うう……ううう……」

つられて左右に揺れる美緒の様子に、思わず三好は箸を止めて「

憐れだ」と呟いた。

「よし！」

蓮の合図と同時に、美緒は卵焼きに嚙り付く。

「どうです先生。たった一日でこれだけ馴染が出来たんですよ」

「自慢気に言うな、やりすぎだ。俺でさえ同情するぞ。ほら大上こつち来い。唐揚げをやるう」

三好が箸で唐揚げを摘んで見せると、美緒が歓声を上げて立ち上がった。

「うわあい！ヨシヨシ先生大好き」

「甘やかさないで下さい」

渋い顔の蓮を尻目に、三好は美緒の口の中に唐揚げを放り込む。

「美味しー！ヨシヨシ先生、これ優牙の唐揚げより美味しいよ！」

無邪気に笑う美緒に、三好は破顔した。

「そうだろう。唐揚げは嫁さんの得意料理だからな」

「嫁さん・・・？」

美緒がキョトンとする。

「あれ？ヨシヨシ先生って結婚してたんだ。奥さんってどんな人？」
美緒の質問に少し考え、そうだな・・・と三好は窓の外に視線を移す。

「素晴らしい女性だ。ろくでなしだった俺がまっとうな道に戻れたのは、彼女のおかげだな」

「へえー。ヨシヨシ先生ろくでなしだったんでしゅか」

三好は美緒に視線を戻し笑った。

「ろくでなしだったんでしゅよ。頑張れば人はいくらでも変わる事が出来る。嫁はそれを教えてくれた」

「いい話でしゅねえ」

美緒は頷きながら、三好の弁当の中の唐揚げを手掴みで食べた。

「いい話ですね。ところで奥様は人間ですか？」

「ふえ？」

後ろから聞こえた言葉に、美緒は驚いて振り向いた。

「え？え？」

厳しい表情の蓮と苦笑する三好を交互に見て、美緒は首を傾げる。

「ヨシヨシ先生の奥さんって——」

「昼休み終わるぞ。早く食べて教室に戻れ」

美緒の言葉を遮って、三好は弁当に箸をつける。

蓮は軽く肩をすくめて美緒の襟首を掴み、優牙の作った弁当の前に戻った。

「待て」

「え・・・、まだやるの？それよりヨシヨシ先生の奥さんの話を——」

「——」

「待て」

「うう・・・。無視でしゅか」

美緒は浮かんだ涙を指で拭いながら弁当を見つめた。

第50話

「メシだぞ」

優牙はセンターテーブルで勉強をしている美緒と蓮にキッチンから声をかけた。

「うわぁい！ご飯何かなー？」

「手を洗って来い」

「はい」

素直に手を洗いに行きすぐに戻って来た美緒は、ダイニングテーブルの椅子に座りながら歓声をあげた。

「コロッケー！いただきまーす！」

「待て」

コロッケに箸をつけようとしていた美緒が、ピタリと止まる。

同じく手を洗ってきた蓮が、椅子に座りながら自慢気に笑う。

「ほら、凄いだろっ」

「あーそうだな」

チラリと美緒を見て、優牙はサラダをテーブルに置いて座った。

「もつと感動したらどうだい？」

「感動？」

優牙は鼻を鳴らし、手を伸ばして美緒のコロッケを箸で摘む。

「ああ！駄目！」

美緒が慌ててそのコロッケに齧り付いた。

「美緒おー！」

蓮の怒声がりびングに響き、美緒はビクリと身体を震わせた。

「駄目じゃねーか。まだまだだな」

口角を上げて笑う優牙を蓮は悔しげに睨み付け、続けて美緒に視線を移した。

「ヒイ！短気はいけまちな！長い目、長い目で見て下ちやい！」

「おいおい、赤ちゃん返りしてねえか？大丈夫かこれは」

優牙はコロツケを美緒の皿に戻し、箸を置いて頼杖をついた。

「結構期待してんだからな。上手くいけば俺の負担が減る。しくじってくれるなよ」

「上手くやるさ。優牙君の為ではないけどね」

蓮と優牙が睨み合う。

「そうだ。優牙君手伝ってくれないか？実際に变身するところを見せて、イメージトレーニングをさせたいんだけど」

「――！？」

優牙は目を見開き、ブルブルと首を振った。

「絶対嫌だ！お前の目の前でだけは絶対变身しない！ってゆーか、变身させて俺に何する気だ変態！」

「何って、だからイメージトレーニング」

「嘘つけ！」

勢いよく立ち上がった優牙が、ビシツと蓮を指差した。

「コロの悲劇を俺は忘れない！我が儘で生意気で馬鹿だが、あれでも可愛いところがあったんだ。でもお前に舐められまくって、今じゃあいつの心は宇宙を漂う星となっている！」

「宇宙を漂う星？随分ロマンチックな表現だね」

「うるせー！反省しろ！とにかく俺はお前の目の前では变身しない」

優牙は呼吸を整え、椅子に座り直して食事を始めた。

「うーん残念」

ニヤリと笑いながら、蓮は隣に座る美緒の頭を撫でる。

「仕方ないから別の方法でいこうか、美緒」

「・・・それよりご飯食べていいでしゅか？」

唇を突き出し上目遣いで自分を見る美緒に、蓮が爽やかに笑う。

「待て」

「あうう・・・まだやるのですか」

肩を落として涙目になる美緒に、更に蓮は冷たい言葉を投げ掛けた。

「さっき待てが出来なかったから、食後のデザートは半分しかあげ

ないよ」

「えええーっ!!」

「待て」

「・・・・・・」

美緒はグツと唇を噛みしめて優牙に目で訴える。

「頑張れ」

「う！優牙までも・・・・！貴様は最早敵であ——」

ガコッ！

箸置きが額に命中し、美緒の目から涙が一粒流れた。

第51話

土曜日――。

目覚まし時計の音で起きた美緒は、欠伸をしながら立ち上がり、リビングへと向かった。

「おはよう美緒」

「・・・おはよう。早いでしゅね」

そこには既に蓮が居て、朝食を作る優牙の手伝いをしていた。

美緒はソファーに座り、テレビのリモコンを手に取る。

「珍しいじゃねーか。休日にこんなに早く起きるなんて」

「謎の男の正体があきらかに」

「ああ」

美緒が言っているのは今から放送される子供向けアニメの内容である。

いつもは録画してあるものを昼間に観るのだが、謎の男の正体になり美緒は、普段使わない目覚まし時計をセットしてまで早起きしたのだ。

「そういう時だけ頑張るんだな」

鼻で笑う優牙を振り向く事無く、美緒はテレビに集中する。

「優牙君、終わったよ」

蓮の声に振り向いた優牙は、綺麗に切って盛り付けられた卵焼きを見て溜息を吐いた。

「なんだい？上手く出来たと思ったけど、どこか悪いのか？」

「・・・いや、上出来だ。ただ姉ちゃんにもこれだけやる気があればと思っただけだ。まあ以前よりだいぶマシにはなったけどな」

優牙は皿に載った卵焼きを一切れ摘んで口に入れる。

自分が作ったものとまったく同じ味がした。

たった数回教えただけでこの味と焼き加減をマスターしたのではないだろう。

おそらく蓮は自宅で練習している。

「料理も意外に楽しいものだね。このまま料理人になるのもいいかもしれないな」

蓮の余裕の発言に優牙は口角を上げた。

「へえ。でも料理人になるなら、まず『煙』をやめた方がいいぞ」

「……」

「健康にも良くないしな」

「……なんの事だか分からないな」

「狼人間の嗅覚舐めんなよ」

蓮は無言で皿を手に持ち、ダイニングテーブルに向かった。

「美緒、ご飯だよ」

「隊長！二年前行方不明になった隊長！！」

「はいはい」

皿をテーブルに置いた蓮はそのままソファールに行くと、テレビに

釘付けの美緒をヒョイと抱き上げた。

「『俺はもうただの人間ではない』だって。私と一緒にだね」

「そうだね」

蓮の首に腕を回して身体を固定し、美緒はまだテレビに夢中だ。

優牙はそんな二人の姿を見て思わず呟いた。

「確かに……お似合いかもな」

朝食を食べ終えた美緒は、蓮のマンションへと連れて来られた。

「さて、今日から新しい修行、イメージトレーニングの始まりだ」

「……え」

玄関で蓮はそう告げて、目の前にある自室のドアを開けた。

「早くおいで」

「……何だか嫌な予感がするので帰ってもいいでしゅか？」

「駄目」

肩を落として仕方なく美緒は蓮の部屋に入る。

「この部屋はあまりいい記憶が無いので嫌いでしゅ・・・」

忌まわしき『パンツ焼失事件』の舞台である場所に立ち、美緒の
テンションは下がりまくった。

その上目の前には変身した自分そっくりの人形。

「気持ち悪い」

呟いた美緒を蓮は軽く睨んだ。

「僕のハニー人形に暴言は許さないよ」

「・・・はい」

蓮は美緒の腕を引いてハニー人形の前に座らせた。

「まさか、これを見てイメージトレーニングしろと？」

「その通り。良く分かったね、美緒」

頭を撫でられても嬉しくないと不貞腐れる美緒に蓮は訊いた。

「普段変身する時はどんな感じなのかな」

「ふえ？変身する時・・・？『来る』って感じ」

「来る・・・？」

頷く美緒に蓮は首を傾げる。

「それから他には？」

「うーん・・・」

眉を顰め顎に指を当てて唸る美緒だが、暫くすると蓮を上目遣い
に見て首を横に振った。

「分かんない」

「・・・」

意識して変身した事が無いから自分でも良く分かっていないのだ
ろうか。

ならば具体的にそれを示してやれば・・・。

蓮は以前この部屋で見た美緒の変身する瞬間を思い出した。

「身体が縮んでいき口が尖る。手足が短くなって全身に茶色の毛が
勢いよく生えた。人間の耳が消えて頭の上に狼の耳が現れると同時

に尻尾も生える。そして――」

ハニー人形をそつと撫でて、蓮は美緒の目をしっかりと見つめた。

「この姿になる」

「……」

「さあ、イメージして」

渋い表情をしている美緒の両手を握り、繰り返す。

「身体が縮んで――」

「何だか洗脳されている気分だしゅ」

「集中して」

「はい」

美緒は溜息を吐いてうなだれた。

第52話

「・・・姉ちゃん、それはなんだ？」

「手のりハニー人形」

「・・・」

土曜日の夜、蓮が帰った後にぐったりとソファーに横たわっていた美緒が、不意に立ち上がり鞆から取り出したモノに優牙は唖然とした。

「・・・これ本物の毛だよな」

「本物だよ」

「・・・すげーそっくりなんだけど」

「蓮君のお家には、等身大のハニー人形があるよ」

優牙は思い出した。

以前蓮が美緒の毛を盗んで逃走した事を。

「あれで作ったのか？信じられない変態ぶりだな」

美緒が掌にちよこんと載る人形をテーブルの上に置き、じっと見つめる。

「・・・何やってんだ？」

「イメージトレーニング」

「・・・」

優牙はそっと美緒から離れた。

「何それ？」

「手のりハニー人形」

「・・・」

月曜日の朝、美緒と蓮に挨拶をしようとした愛は、机の上に置か

れたモノに啞然とした。

愛は蓮に視線を移す。

「佐倉が作ったの？」

「ああ、そうだよ」

「・・・愛されてるわね美緒」

静かに愛は自分の席に行き、美緒はイメージトレーニングを再開する。

暫くすると三好が教室にやって来て、優牙や愛と同じように美緒に訊いた。

「・・・大上、それはなんだ？」

「手のりハニー人形」

「・・・学校生活に必要な物を持って来ないように。分かったな、佐倉」

三好が人差し指でこめかみを押さえる。

「はい。すみません」

その場は大人しく人形を片付けた蓮だったが、昼休みに美緒を連れて三好の研究室に行き、またもや人形を取り出した。

「おい・・・」

「教室ではやりません」

「・・・」

三好は溜息を吐いて、弁当に入っていた焼き鳥を箸で摘んだ。

「ほら大上、焼き鳥をやろう」

パツと顔を上げる美緒を蓮が制する。

「先生、むやみに餌を与えないで下さい」

「・・・」

美緒と蓮をくっ付けた事は間違いではない。

間違いではないが、少しだけ後悔する三好だった。

第53話

放課後、蓮は美緒を自分のマンションに連れて帰った。

イメージトレーニングを始めてから数週間、まったく変化のない美緒の様子に蓮は少々焦っていた。

別の方法を考えた方が良いのかもしれない――。

じつとハニー人形を見つめる美緒の肩に蓮は手を置いた。

「休憩しよう」

「わあい、休憩！ジュースとケーキ！」

「用意するから待ってて」

微笑み立ち去る蓮にヒラヒラと手を振り、美緒はベッドに寝転がる。

「疲れたでしゅ」

毎日の修行は美緒にとっては負担だった。

勉強、調教、イメージトレーニングのハードな毎日。

特にイメージトレーニングはまったく成果が得られないので、疲れも倍増する気がした。

蓮の言う通りイメージしてはみるものの、頭の中の自分はもう少しで変身するという所でポンと弾ける。

「何か足りない・・・んー、違う足りないんじゃないって、こう・・・」

言葉に出来ないもどかしさ。

コントロール出来るようになれば美緒としても都合が良いので、一応頑張っているつもりなのだが・・・。

「うーん・・・」

ゴロゴロとベッドの上を転がり、美緒はそのまま床に落ちた。

「うぎゃー！イタタタ」

打ち付けた腰を擦りながら身体を起こそうとした時、ふとベッドの下に何かがある事に気付いた。

「DVD?」

積まれたそれはDVDケースのようだった。

そういえばテレビを観る蓮の姿を自分は見たことがない。

どんなものを観ているのかと軽い気持ちで手を伸ばす。

そしてベッドの下から出て来たDVDのパッケージ見て、美緒は目を見開いた。

『うちの子一番』

少し首を傾げた茶色い犬の写真が載っている。

「――!」

美緒はベッドの下に再び手を伸ばし、そこにあったDVDをすべて出した。

『肉球百連発』、『ハッピー母さんは大忙し』、『可愛い赤ちゃん大集合』、『世界名犬劇場』……。

「な、な・・・!」

プルプルと美緒の身体が震える。

ちょうどそこに、ケーキとジューズを載せたお盆を手に持った蓮が部屋に帰って来た。

「え・・・」

蓮はベッドの下にあった筈のDVDが床に散乱している状況に驚く。

二人の視線がゆっくりと合った・・・。

「なんですかこれはーっ!」

美緒の投げたDVDがお盆を直撃し、ジュースとケーキはお盆ごと床に落ちた。

「美緒・・・、いや、これは・・・」

視線を泳がす蓮に、美緒は次々とDVDを投げた。

「何これは！　いったいなんなの！？　素人ものにマニアもの、人妻、ロリ、感動もの！？　これでいったい何をしてたの？　いやらしい、最低！」

「美緒！　待つて、話を聞いて！」

「私というものがありませんが・・・、最低男！　馬鹿！　変態！！」

蓮は小さく舌打ちすると、飛んでくるDVDを叩き落として美緒に躍り掛かり、暴れる身体を組み敷いた。

「美緒！」

「・・・・・・・・」

「その・・・、これはあくまで単なる映像で、愛しているのは君だけだ」

プイと横向く美緒に、蓮は溜息を吐く。

「仕方ないだろう。僕だって男なんだから、そういう・・・欲望が溜まる時もあるんだ」

「・・・私がいるのに」

「だって変身出来ないだろう？」

「・・・・・・・・！」

美緒の身体がカツと熱くなる。

それは確かにそうだが、でも、そうじゃなくて・・・！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

大人しくなった美緒の身体から蓮が離れた。

「ケーキ、駄目になったな。新しいの用意するから――」

「いい」

美緒が身体を起こす。

「美緒？」

「要らない。帰る」

美緒は鞆を持つと、足下のDVDを避けて部屋から出て行く。

「美緒！」

慌てて追い掛けた蓮が玄関で美緒の腕を掴んだ。

「美——」

蓮はハッとした。

美緒の頬を流れるのは、間違いなく……。

蓮の手を振り払い、美緒はドアを開けて出て行った。

第54話

いつもより早く、しかも一人で帰って来た美緒に、キッチンで料理中だった優牙は眉を寄せた。

「どうした、姉ちゃん」

「・・・」

ドサリとソファに倒れこみ返事をしない美緒。

優牙は包丁を置いて、美緒の傍に行った。

「で？どうした。喧嘩したか？」

背中をポンポンと叩かれ、美緒が少し顔を上げる。

「・・・どうして彼女がいるのにエッチなDVDを観るの？」

「・・・は？」

予想外の言葉が返ってきて一瞬驚いた優牙だったが、すぐに呆れた表情で美緒の尻を叩いた。

「なんだ、変態野郎がエロDVDを持ってたのか」

美緒が頷いたのを見て、優牙は少し笑う。

「しょーがねえ奴だな。でもまあ許してやれよ。何と言つか・・・あれとこれとは別物なんだよ」

「そんなの分かんない」

「だいたい姉ちゃんだって、いかがわしい小説読んだりしてるじゃねーか」

「今は私の話じゃなくて蓮君の話をしてるの！」

優牙は舌打ちして「これだから女は・・・」と小さく呟いた。

「しかし、あいつ人間の女にもちゃんと興味があつたんだな。俺はてつきり・・・」

「犬のDVD！」

「・・・あー、犬のエロDVD？すげーマニアック。やつは変態だ」

優牙は頭をバリバリ搔いて溜息を吐いた。

「許してやれよ」

美緒が顔を伏せて首を振る。

「厳しいな」

美緒がもう一度首を振る。

「違う。そうだけどそうじゃなくて・・・」

「何だ？」

「分かんない。上手く言えない」

「・・・」

優牙がクシャクシャと美緒の頭を撫でた時、玄関の方から物音が聞こえた。

美緒がビクリと肩を震わせ、優牙が顔を上げる。

「よお、よくも俺の大事な姉ちゃん泣かしてくれたな」

ばつの悪い表情を見せ、蓮は二人の傍まで行った。

「美緒・・・」

優牙は溜息を吐いて、蓮の肩を叩いた。

「俺は醤油を買いに行く」

「ああ」

優牙が部屋から出て行くと、蓮は美緒の傍らに座り、その髪を手で梳いた。

「美緒、ごめん。僕が悪かったよ。DVDは処分する」

「・・・」

動かない美緒の髪を蓮は一房掴む。

「僕は・・・、うん、今はまだすべてに応えられないけど、でも――」

蓮の指が美緒の頬に触れ、涙を拭った。

「美緒が好きだよ」

「・・・」

体当たりするように、美緒が蓮の胸に飛び込む。

蓮は美緒を抱きしめて、二人はギュッと抱き合った。

「美緒・・・」

「DVDは浮気です。他の犬を見るのも浮気です」

「他の犬も人間も見ない。両方美緒だけだから」

「・・・うん」

美緒の身体から力が抜けていく。

「あ・・・」

来る。

しかしそれは今までと違い、はつきりと変化が感じられる。

口が尖り・・・次は毛が生え・・・そう、最後に耳と尻尾。

美緒の思った通りに変わっていく身体。

やがて変身が完了すると、美緒は肉球で目を見開く蓮の頬に触れた。

「変身・・・コントロール出来そうです」

服を着た狼が笑う。

「美緒」

蓮はもう一度強く美緒を抱きしめ、美緒が舌を伸ばして蓮の頬を舐めた。

「愛してるよ、美緒」

二人は見つめ合い、ゆっくりと唇を触れ合わせた。

第55話（涙の変身修行編 終了）

「愛ちゃん聞いて下さい！変身がコントロール出来るようになったのです！」

「そう。良かったね」

「あう。もっと褒めて・・・」

朝、学校に行った美緒は一番に愛の元に向かい、変身がコントロール出来るようになった事を報告した。

「はいはい。よく頑張った、偉いね、凄いわ」

愛はグリグリと美緒の頭を撫でながら、無表情で台詞を棒読みするように言う。

「感情！感情どこに忘れてきましたか！？」

わっ！と大袈裟に泣き真似をしながら美緒は後ろを振り向き、そこに立っていた蓮の胸に顔を埋めた。

「蓮君、愛ちゃんが冷たいのです」

「ああ、可哀想に」

蓮がギュツと美緒を抱き締める。

「・・・あれだけ嫌がっていたのに、仲いいじゃない」

「あれ？河内さん、焼きもちかい？」

からかう口調に眉を寄せ、愛がシッシと手を振った。

「さっさと席に戻りなさい」

「愛ちゃんが焼きもち・・・、私、モテモテでしゅ」

「早く行きなさい！」

「あ！今夜お祝いするからうちに来てね」

美緒と蓮は席に戻り、もうすっかり習慣となった予習を始める。

「次のテストもバッチリだね」

「油断しちゃ駄目だよ。美緒は単純な計算間違いとかが多いんだから」

「うん」

そうして暫く予習をしていると、三好が教室にやって来た。

「おはよう。席に着けー」

「ヨシヨシ先生！私、変身が——うぎゃあ！」

飛んできた出席簿が美緒の頭を直撃する。

「ううー！痛いでしゅ、痛いでしゅ！」

美緒が頭を抱え、蓮が立ち上がって床に落ちた出席簿を拾い、二人の元までやってきた三好に渡した。

「佐倉、駄がなつてないぞ」

「すみません。今日は少し浮かれていて」

苦笑する蓮の頭を出席簿で軽く叩き、三好は机に突っ伏す美緒の耳に口を近付ける。

「先生、大上はやれば出来る子だって信じてたぞ」

パツと美緒が顔を上げる。

「ヨシヨシ先生ー！」

首に抱きついてくる美緒の背中をポンポンと叩き、三好は黒板の前に戻った。

「エヘヘヘ、褒められちゃった」

「良かったね、美緒」

二人は微笑み合い、そのあまりのイチャつきぶりとはしゃぎぶりに、周りの生徒達がイラつとした。

番外編 「美緒と佐倉とそして・・・」 (前書き)

55話の夜の出来事。愛視点。

番外編 「美緒と佐倉とそして・・・」

「皆様、本日はワタクシの為に集まり下さりありがとうございます！この度―――」

「『皆様』って程の人数？」

「姉ちゃんいいからメシにするぞ」

私と優牙に言われた美緒は、シユンと肩を落とした。

遮らなければ五分も十分も話し続けただろうから、これでいい。

佐倉が苦笑しながら美緒の頭を撫でた。

急に仲良くなっちゃって。

まあいいわ、その方が。

美緒にはあれぐらいの男がお似合いだから。

「おい、愛。手伝えよ」

「言われなくても手伝うわよ」

優牙が作った料理を私がテーブルに並べる。

相変わらず料理上手な男。

家庭環境から仕方なくとはいえ、これだけのものを作られると女としての自分の立場がないと言いか・・・とにかくあまり面白い。

私と優牙ははっきり言って仲が良いとは言いがたい。

悪いとまではいいかないのだけど、そう、『価値観が違う』とでも

言うのかしら？

「おい、早くしろよ。腹減ってんだよ」

お腹が空いているのは誰？

このシスコン！

大きなステーキを美緒の前に置く。

「きゃあー！おっきい。美味しそう！」

子供のようにはしゃぐ美緒。
はいはい、良かったわね。

「ではでは、かんぱーい！」

美緒が高くグラスを持ち上げ、めんどくさいけどカチンと合わせる。

「なんでか肉が無性に食べたくて……。本能の目覚めって言う感じなのかなあ」

美緒がガツガツと肉を貪る。

食べ方が汚ない……。野性的になり過ぎでしょう？

ポケットからハンカチを取り出そうとしたら、それより先に佐倉がハンカチで美緒の顔を拭き始めた。

そうね、もう私がやってやる必要は無かったわね。

ふと視線を横にずらすと、ティッシュを持った優牙と目が合う。

「……………」

「……………」

優牙はティッシュで汚れてもないテーブルを拭いて丸めてゴミ箱に投げ、でも上手く入らなかったのでイライラとした顔で立ち上がってきちんとゴミ箱の中に入れて戻ってきた。

「優牙、肉！肉もつと！」

「もう食っちまったのか。しょうがねえな」

優牙は唐揚げや豚カツを美緒の前に置いてキッチンに行くと、すき焼き鍋を持って帰って来た。

「野菜も食えよ」

歓声を上げて肉だけをこそつと皿に取る美緒。

全然話を聞いてないじゃない。

「甘やかし過ぎじゃないの？」

優牙は私を見て片眉を上げる。

「仕方ないらしい」

「仕方ない？」

「母さんが言うには、狼女は恋をすると肉が食べたくて我慢出来なくなるらしい。思い切り食べさせて満足させてやれば落ち着くんだってよ」

恋・・・・・・・・。

美緒は変わった。

周りに流されダラダラと生きていた美緒が頑張る姿なんて、以前は想像もつかなかったな。

「早く食わねえと無くなっちまうぞ」

優牙の声が聞こえて、私は目の前にあった料理に箸をつける。

そして数十分後、テーブルの上に野菜だけが残っている状態になった時、美緒が不意に立ち上がった。

「えーとそれではメインイベント、華麗なる『変身』を皆様に披露いたしますです！」

そう言つて勢いよく服を脱ぎ始めた美緒に私は慌てた。

「待ちなさい馬鹿！」

既に上半身下着姿の美緒を引き摺って廊下に出る。

「なんですか愛ちゃん！これからがいいところだったのに！」

何が『いいところ』よ！

「恥じらいを持ちなさい！」

「えー？だって今更・・・」

「簡単に脱ぐ女は簡単に飽きられるわよ！」

服を着せながら言つと、美緒は「え！？」と目を見開いた。

「そうなんでしゅか？」

たぶんね、と心の中で付け足し、美緒の耳を引っ張って部屋に戻

る。

「痛い痛い痛い！愛ちゃん！」

そのまま佐倉の前に行くと、美緒を突き飛ばした。

「うっ、蓮くん。愛ちゃんが乱暴したでしゅ」

佐倉が美緒を膝の上に乗せて頭を撫でる。

「河内さん、優しく・・・ね」

ニッコリと胡散臭い笑顔を見せる佐倉。

でも・・・『白』より『黒』の方が美緒には合っている。

「優牙、デザートあるんでしょ？出しなさい」

「命令するなよ」

優牙が立ち上がりキッチンに行く。

手伝う為に私も行くと、優牙は大きなケーキを冷蔵庫から出した。

街の妖精のケーキ、それも特注っぽい。

本当に、このシスコンは・・・。

美緒が結婚すると言いだした時にはどうなるのかしら？

「優牙も早く彼女を見つけなさい」

思わず言っと、優牙が眉を顰めて私を見る。

「お前もな」

お互いそれが難しい事は良く分かっている。

優牙は将来、純血の狼女と見合い結婚するつもりなのだろう。

そして私は・・・。

「ほら、皿とフォーク持って行け」

渡された食器を持ってテーブルに行く。

ベッタリ引っ付く美緒と佐倉の前に、私は皿を置いた。

第56話

「どうするんだ、進路希望」

三年生半ばにして未だ進路希望調査用紙を一度も提出していない美緒は、放課後三好の研究室に呼び出された。

二人はソファーに向かい合って座り、話し合う。

「何をしたい、何になりたい。夢は無いのか？」

美緒が溜息を吐き、眉を寄せて額に指を当てた。

「うーん・・・夢？ 楽にこなせて尚且つ高収入の仕事に就き笑いが止まらないような毎日を送りたい——痛いでしゅ」

美緒の頭を三好が片手で鷲掴みにする。

「ちよつとは賢くなつたと思つたのは、先生の勘違いか？ ちゃんと真面目に考える。あと1週間待つてやる」

「え？ 人生がかかった選択に与えられるのがたつた1週間？ って、うおおー！ 揺れるー！ 揺れるー！」

三好が美緒の頭を振り回す。

「みんなもつと早くから考えているんだ！」

「うう・・・暴力教師。分かつたでしゅ。一週間後の返事を乞うご期待」

美緒は涙を拭う振りをしながら立ち上がり、三好の研究室を逃げるように出て蓮の待つ教室へと向かった。

「はあ・・・」

教室に入るなり溜息を吐いた美緒に、机に座って勉強していた蓮が片眉を上げる。

「どうしたんだい？」

「1週間以内に進路を考えると言われたでしゅ」

「ふーん」

蓮は立ち上がり、鞆に教科書とノートを片付けた。

「帰ろうか」

「ん」

蓮が差し出した手をギュツと握り、美緒は笑う。

堂々と手を繋いで校内を歩く二人の姿は今や見慣れた光景となっていて、すれ違う生徒達もまったく気にする様子は無い。

昇降口を出て家までの道をゆっくりと歩きながら、美緒は自分より少し高い位置にある蓮の顔をチラリと見て気になっていた事を訊いた。

「蓮君は悠真の大学に行くんだよね。教育学部？」

「・・・・・・」

蓮が美緒の顔を見つめる。

「何故悠真大学の教育学部って思うのかな？」

「え？だって・・・」

「違うよ」

美緒は立ち止まり、目を見開いた。

「えええ！？蓮君は先生になるんでしょ！」

「だから何で僕が教師になるって勝手に決め付けてるんだい。僕は父の会社を継ぐ予定なんだから」

「・・・・・・！」

そういえば以前そんな事を言っていたような気もするが、それより三好が教師候補だと言っていた印象の方が強く、蓮は悠真大学の教育学部に進学すると美緒は勝手に決め付けていた。

「じゃあ何処！？」

「秘密」

「何故！？」

蓮が眉を寄せて美緒の手を引っ張り歩く。

「僕の進路を知ってどうする気だい？」

「それは当然——」

「僕は大学に学びに行くのであって、遊びに行くのではない。美緒だつてそつだよな？」

美緒が「うつ」と言葉に詰まる。

それはつまり、一緒の大学に行くつもりが無いという意味なのだろうか？

蓮の真意が分からず戸惑う美緒。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

蓮は美緒を引つ張り黙々と歩く。

美緒は何となく気まずい雰囲気に声が出せないでいた。

一緒の大学、一緒の学部ならば、これまで同様の関係だつて保てる。

自分に執着している筈の蓮が、ここに来て何故突き放そうとするのか。

「浮気!？」

「・・・・誰が？」

「ごめんなさい」

心の底まで凍える冷たい声に、美緒は即座に謝る。

可愛いメス犬と出逢つた訳では無さそうだ。

ならばどうして・・・・。

美緒がうーうー唸る。

石田さんの家が見えてもうすぐ家に着く所まで来た。

庭先に居たコロが蓮に服従するように伏せる。

蓮が握る手に少しだけ力を込めた。

「結婚しようか」

不意に聞こえた言葉。

「・・・は？」

美緒がポカンと口を開けて蓮の顔を見る。

今、何か凄い事を言われた気がするが・・・？

蓮は真っ直ぐ前を見つめている。

空耳だったのかと美緒が思った時、蓮が振り向いた。

「高校卒業したら結婚しよう。住む家はあるし、二人の生活費は僕が頑張つてバイトでも何でもして稼ぐから」

蓮の表情は決してふざけてなどいない、真剣そのものだ。

「・・・はい！？」

「家事も僕がやるよ。料理も上手くなつたからね。美緒は家でんびりしていればいい」

「え、え？」

「無理して大学に行く必要があるのかな？それより僕の傍にずっと居て欲しい」

「・・・！！」

これは・・・まさかの！？

「プロポーズ！？」

「うん」

「いや、そんなあつさり！待ちたまえ若人よ！」

蓮が不満げに首を傾げる。

「僕と結婚するのが嫌なのかい？」

ブンブンと首が飛んで行きそうな勢いで美緒は首を横に振る。

「嫌じゃない！」

「じゃあ結婚しよう」

「え！ええと・・・！」

美緒が激しく狼狽える間に、二人は家の前に着いていた。
手が離れる。

「じゃあね」

「え？寄ってかないの？」

「うん。返事はゆっくりでいいから。今言った事、よく考えて」
蓮は軽く手を上げて去って行く。

その後ろ姿を美緒は呆然と見つめた。

第57話

家の前で蓮の背中を呆然と見送っていた美緒は、その姿が見えなくなると、ハッとして叫んだ。

「うおー！団地妻へ一直線！？近所トラブルにご注意ー！！」

「うるせえ！！」

頭に走る衝撃。

蹲り振り向くと、二階の窓から怒りの形相で自分を見下す優牙がいた。

「うう……。優牙、ペットボトルをポイ捨てするとは我が弟ながら非常識」

「早く入ってこい」

「はいい……」

美緒は中身がまだ一口も飲まれていないペットボトルを拾い、家の中へ入る。

「手洗いうがいをしゃがれ」

二階から降りてきた優牙がペットボトルを受け取りながら指示する。

「はいい」

「それが終わったら着替えやがれ」

「はいい」

「早くしろ」

「はいい」

制服から私服に着替えた美緒はソファに座り、その前に腕組みした優牙が立った。

「で？珍しくメシも食わずにヤローが帰ったみたいだが、どうした？」

「プロポーズされたでしゅ」

「……………」

美緒と優牙が見つめ合う。

「珍しくメシも食わずにヤローが帰ったが、どうした？」

「だからプロポーズされ——うぎゃあ——！」

「んな訳あるか——！」

優牙は美緒の頬を摘んで思い切り引つ張った。

「妄想してんじゃねーぞコラ！まだ高校生だろうが！それとも結婚せざるを得ない事情でもあるのか！？」

「うぎー！うぎー！いひゃいー！」

暴れる美緒を舌打ちと共に突飛ばし、優牙は行儀悪くセンターテブルに腰掛ける。

美緒は溢れる涙を指先で拭い訴えた。

「だって本当なんだよう。プロポーズされたんでしゅよ」

「……………」

「高校卒業したら結婚しようって。ちなみに『やむを得ない事情により』ではないでしゅ。今時には珍しい、清い交際なもので」

優牙は眉を寄せてじつと美緒を見つめ、それからフウ……と溜息を吐いた。

「嘔吐け何が『清い交際』だ。しかしさすが変態、考えが常人と異なる。で？どうするんだ」

美緒が首を傾げてうーんと唸る。

「三食昼寝におやつ付き。だらけた生活を送れるというのはものすごい魅力でしゅ」

「……おいおい、まずは一生を共に出来る相手かどうかだろう」
呆れる優牙に美緒は爽やかに笑った。

「そこら辺は大丈夫。万一駄目なら離婚という手があるからね」

「……結婚する前から離婚の事考えるのかよ。女って怖ええな」
嫌悪感をあらわにする優牙を美緒は鼻で笑う。

「優牙ってばもしかして、運命の出会いを求めちゃってる？『一生

を共に』って、可愛いでちゅね！——ぐえ！」

蹴られた腹を押さえて美緒がのた打ち回った。

「調子に乗るな」

吐き捨てるように言い、優牙は胡坐をかいて頼杖をつく。

ソファアの上で美緒が慣れた様子で土下座した。

「うう……。すみませんでした」

「で、姉ちゃんはどうしたい」

こめかみに人差し指を当てて美緒は考える。

「うーん。どうしよう」

優牙が首を振って髪を掻き上げた。

「まあよく考える。人外と人間の結婚は色々大変だからな。特に父さんは確実に暴れると思うぞ」

「う……。それはめんどくさい」

暴れる父親の姿を想像し、美緒のテンションが一気に下がる。

純血にこだわりの狼男との見合い結婚を当然だと思っている父親を説得するのは容易ではないだろう。

「そうすると駆け落ちになるかなあ。人間との禁断の愛に燃え逃避行……。それも魅力的でしゅ」

「馬鹿。そんな簡単な問題じゃねーだろ」

優牙が美緒の頭を拳で軽く殴る。

「そつだ、愛に相談してみろ。人外と人間の夫婦についてとその間に生まれる子の苦労なんかも教えてもらえ」

美緒は目を瞑り、うんうんと頷いた。

「そつだねえ。じゃあそうしようかな。ところで今日の夕飯は何かな？」

「……………！！」

真面目な話をしているのに、どうして美緒はこうなのか。

優牙の怒りの鉄拳が美緒の脳天を直撃した。

第58話

朝、揺すられて美緒は目を覚ました。

「おはよう美緒。起きないと遅刻するよ」

「・・・おはよー」

「ほら着替えて」

「はい」

蓮が美緒のパジャマを脱がせ、ブラジャーを着けて制服を着せる。

「はい、下に行くよ」

「はい」

「顔洗って」

「はい」

「朝ごはん食べるよ」

「はい」

「学校行くよ」

「はい」

家を出て学校に向かいながら、美緒は大きく口を開けて欠伸をした。

そんな美緒を見た蓮が片眉を上げる。

「昨日遅くまで起きてた？」

「うーん、そうでしゅねえ」

「ふーん」

「・・・」

「・・・」

会話が弾まない。

学校に着いてからもそれは変わらず、ろくに話さず帰りになった。ショートホームルームが終わり三好が教室から出て行くと、美緒

が立ち上がる。

そして蓮に何も言わずに愛のところへと行った。

「愛ちゃん、お話があるです」

愛が鞆を持つて頷く。

「優牙から聞いている。美緒の家でいい？」

「うん」

そこで美緒はやっと振り向いて蓮を見た。

「蓮君、今日は愛ちゃんとお話するから一緒に帰れないです」

「そう。じゃあね」

蓮は少しだけ笑みを見せ、片手を上げて教室から出て行く。

「おう……。あっさりだ」

「ほら、帰るわよ」

「はい」

愛に引き摺られるようにして、美緒は家に帰った。

「で？何が聞きたいの？」

美緒の家のリビングで、ソファーに座って長い足を組んだ愛が訊く。

「うーん。何でしょう？」

グリグリグリグリ。

「うう……。こめかみグリグリしちゃイヤン」

「早く話なさい」

美緒がコクコクと頷いたので愛は美緒から手を離れた。

「結婚しようかと思うんだけど、どうかなあ」

「どうかなあって。そうね、うちは幸せそうよ」

「凄いやね愛ちゃんママ。アレと結婚するには勇気がある・・・」

グリグリグリグリ。

「すみませんでした」

「結婚はママの方が積極的だったのよ」

美緒が「え！」と目を見開く。

「そうなの？益々凄いやね愛ちゃんママ。人外と結婚してなんか苦労はないのかな？」

「パパが外出する時なんかは捕獲されるんじゃないかって不安は多少あるみたいよ」

「ふーん。成る程確かに」

美緒は愛の父親の姿を頭に思い描いて当然だと納得した。

「ただ――」

「ただ？」

「やっぱり一番心配だったのは子供の事だって。人外ハーフはどんな容姿や能力を持って生まれてくるか予想が付かないから。それに子供が将来多少なりとも苦労する事は分かっているのに作っているのかって葛藤はあったらしいわ」

美緒の眉間に皺が寄る。

「うーん。そうかあ」

「まあ結局その自分達が沢山の愛情を注いで育てようって結論に達したらしいけど」

「ほおほお。実際愛ちゃんの苦労は？」

髪を掻き上げ愛はニヤリと笑う。

「馬鹿な狼女に絡まれて大変」

「う。それって私？」

「後はやっぱり人外だってバレルんじゃないかって不安はある。それは美緒も同じでしょ？」

「うーん、まあバレたらヤバイなあってのは思ってるよ。実際蓮君

にはバレたし」

お馬鹿な美緒でさえ、そこには気を付けていた。

愛の母親や学校の先生、両親の同僚など人外に理解を示し協力してくれる人間もいる。

しかし自分達と同じではない人外を排除しようとしたり、闇で売りさばいたりしようとする者も確かにいるのだ。

「参考になった？」

「うーん、微妙」

「・・・そこは嘘でも『参考になりました、ありがとうございます』って言いなさい。でもいいの？」

美緒が首を傾げる。

「何が？」

「もつと色々やりたい事とかあるんじゃないの？」

「ない」

即答する美緒。

愛は腕を組んで片眉を上げた。

「そう？でも迷ってるんでしょ？」

「うん。なんでだろ？ちなみに愛ちゃんは悠真大学行くよね」

「内・緒」

美緒が溜息を吐いて恨みがましい目で愛を見る。

「愛ちゃんまで秘密にするのでしゅか。私達の友情は？」

愛は美緒の言葉に首を傾げた。

「友情・・・？」

「おおう、心に突き刺さる」

泣き真似する美緒の額を指で弾き、愛が微笑む。

「次は先生に相談してみたら？」

「うーん。じゃあそうする」

愛の助言を受け、翌日の放課後美緒は三好の研究室へと行った。

第59話

「という事なんですヨシヨシ先生」

「……」

「どうすればいいですか？」

「……」

放課後研究室に押し掛けしてきた美緒は、三好の都合などお構い無しに自分の身に起こっている事を身振り手振りを交えて大袈裟に語ってみせた。

三好の答えをドキドキしながら待つ美緒。

三好はフウッと息を吐いてそんな美緒の目をしっかりと見つめた。

「取り敢えず言えるのは」

「言えるのは？」

「学生結婚甘くみるな。大変なんだぞ」

美緒が首を傾げる。

「でも蓮君は大丈夫だって……」

「経験者が言うんだから間違い無い！」

「へ？経験者？」

驚く美緒に三好が頷いた。

「俺は学生結婚だったからな」

「へえー！先生はなんで結婚したの？」

興味深げに身を乗り出す美緒を押し戻し、三好は苦々しい顔で視線を逸らした。

「……ガキが出来たからだ」

「あれ？先生子供いるんですか？」

「……まあな」

三好は美緒に視線を戻して自嘲するように笑う。

「子供が生まれたのはお前と同じ歳の時だ」

「高校生！？破廉恥な！」

「破廉恥・・・、まあその頃の俺は荒れていたからな。後先考えずにあれこれやってしまっていた」

美緒が右手で口を押さえて上目遣いで三好を見た。

「あれこれヤツてたなんて、年頃の女の子に向かって生々しい」

「・・・何を想像しているんだ」

真面目に聞けと睨み付け、三好は話を続ける。

「嫁さんの両親は俺達の結婚に反対だったし、俺の両親は音信不通だったから援助してもらえなかった。理事長が助けてくれなかったら親子3人生きて行けなかったな。俺は自分の勉強と子供の世話と生活費を稼ぐのと毎日ヘトヘトだった。」

美緒はうんうんと頷いて眉を寄せる。

「そうでしゅかあ。それは涙なしには語れない物語でしゅね。じゃあ蓮君も苦勞するかも？」

どうしようかな・・・と呟く美緒に、三好は腕組みして訊いた。

「お前の両親はこの事知ってるのか？」

美緒が首を横に振る。

「ん？言っていないよ。だって滅多に帰ってこないし」

最近会ったのはいつだったのか・・・。

両親の存在など忘れる程会っていない。

「出来れば祝福された状態で結婚しろ。そうしないと関係修復に時間がかかるからな」

「おおう、経験者は語る。うーん、なんだか結婚もめんどくさいでしゅね」

三好は苦笑して美緒の頭を撫でた。

「めんどくさいな。それでも一緒にいたいなら結婚すればいい。・・・でも大上はそれでいいのか？」

「ふえ？」

「先生、お前の最近の頑張りは評価してるぞ。これからさらに伸びるところで成長を放棄してしまっているのか？」

美緒が唸って腕組みをする。

「将来を有望視している若者をここで逃すのは惜しいと・・・？」

「そこまでは言っていない」

「うーきっぱり。傷付いた」

ソファーに突っ伏して泣き真似する美緒に向かって三好はポケットから飴を出して投げる。

「うわーい！いちごミルク味ー！」

途端に上機嫌になって飴を頬張る美緒。

三好は溜息を吐いて背もたれに身体を預けた。

「だからといって、ただ何となく大学進学つても違うと思うぞ」
美緒が首を傾げて右手を差し出す。

その手の上に三好は新しい飴をのせた。

「なんですかそれは。先生は結局どうしろって言っんですか。言ってる事が曖昧で実に分かりにくい。それでよく教師が勤まりますね」
「・・・」

三好が引きつった表情で美緒の鼻を摘む。

「ふんぎゃー！やへてくだはい！！」

「それは自分で考えろ！」

最後にギョツと摘まれ解放された美緒は、鼻を押さえて立ち上がった。

「うっー！暴力教師め！訴えてやる！次は法廷でお会いしましょう」
「！」

「どんな脅し文句だ」

部屋から飛び出していく美緒を見送り、三好は疲れきった表情で目頭を押さえた。

第60話

「どうしようかなあ。うーんうーん」

「邪魔だ。退け」

「いやん、冷たい」

夕食後の満たされた腹を踏みつけられ、美緒はキッチンでのたうち回った。

「うぎゃあ！ 出る！ チキンソテーが上のお口と下のお口から出る！」

「うるせー！ そして汚ねーこと言うな！」

優牙の蹴りが美緒の尻に炸裂する。

「ヒイ！ 痛い！」

「足下でゴロゴロすんじゃないよ。猫かお前は」

優牙は美緒の襟首を掴んでリビングにポイと捨てた。勢いよく転がった美緒がソファーにぶつかり止まる。

「ううー。だつて……」

恨みがましい視線で自分を見る美緒を無視し、優牙は後片付けを再開した。

「冷たいー。姉がこんなに悩んでるのに冷たいー。思いやりの心が足りない——うぎゃあ！」

飛んできたしゃもじが額に当たる。

「うう……。しゃもじを武器にするとは料理人の風上にも置けない鬼畜な所業。きつと天罰が下るであろう」

「次は包丁がいいか？」

「ごめんなさい」

あっさり謝り、美緒はテレビのリモコン指してズルズルと這いずっていく。

「あー、悩むなあ」

そしてテーブルの上に手を伸ばしてリモコンを取ろうとした時、『バン!』と大きな音が聞こえた。

「え？ 敵襲？」

振り向いた美緒は、リビングの入口にいる予想外の人物に驚く。優牙と同じ顔の女――。

「お母さん!？」

美緒と優牙の母、冴江^{さえ}である。

先程の音は冴江がリビングのドアを乱暴に開けた音だった。

「ただいま」

「珍しい！ お帰り。お父さんは？」

「今日は母さんだけ帰ってきたの。優牙、ご飯ご飯！」

冴江は優牙に向かって言いながらダイニングの椅子に座る。

「分かったって、うるさい。帰ってくるなら電話ぐらいしろよ」

文句を言いつつ、優牙は冷蔵庫の中を覗き、食材を選ぶ。

冴江が美緒を見て首を傾げた。

「で？ 『悩む』って何を？」

「おおう、聞こえてた？ ――プロポーズされたでしゅ」

「ああ、あの人間に」

美緒は驚き、目と口を大きく開ける。

「知ってるの!？」

「まあ、一応ね。佐倉蓮でしょ？」

美緒は頷き唸った。

「仕事で家庭を顧みない駄目親と思いきや、まさか娘の彼氏
存在を把握しているとは……」

ニヤリと笑って冴江が訊く。

「どうするの？」

「どうしよう」

「別にいいんじゃない、結婚しても」

でも……と眉を寄せる美緒に冴江は肩をすくめる。

「あら、美緒にしては慎重じゃない。意外となんとかなるもんよ、問題無し」

「問題ありすぎだろ！ この状況！」

キッチンからフライパン片手に優牙が怒鳴る。

「子供って放っておいても立派に成長するものなのねえ」

「俺がどれだけ苦労したと思ってんだ？ あ？ 母さんの言う事はあてになんねえよ！」

言い合いを始める優牙と冴江を尻目に、美緒は俯いて唸り続けた。

「おはよう」

目の前数センチのところから声を掛けられ、美緒は目覚めた。

「……おはよう、蓮君」

「起きて」

「はい」

「着替えて」

「はい」

「ご飯食べに行くよ」

「はい」

二人は一階に行く。

キッチンで朝食を作っている優牙が顔を上げた。

「優牙、おはよう」

「おはよう、顔洗ってこい」

「はい」

美緒が顔を洗って戻ってくると、食卓には三人分の朝食が並べられていた。

「いただきます」

三人が手を合わせて食事を始める。
すると『バン!』と大きな音が聞こえた。

「あ、お母さん。おはよー」

振り向いた美緒が挨拶をする。

「あら？ 驚かないんだ。残念」

冴江が蓮の前の席に座る。

「おはよう。佐倉蓮君」

蓮は爽やかな笑顔でそれに応える。

「おはようございます。いえ、驚きました。はじめまして、佐倉蓮です。美緒さんとお付き合いですせていただいております」

冴江の前に優牙が朝食を置いた。

「結婚するんだって？」

「まあ、美緒さんの返事待ちですが」

「ふーん。考えたんだけど……」

「はい」

冴江がニツコリと笑う。

「若いお婆ちゃんっていいよね」

「……………」

蓮はじつと冴江を見て、同じようにニツコリと笑った。

「そうですね」

「気が合いそうねえ」

「そうですね、お義母さん」

「ホホホホ」

「アハハハ」

笑う二人を交互に見て、美緒が首を傾げて優牙に訊く。

「優牙、なんか変な二人」

優牙はアジの干物をつつきながら呟いた。

「俺は関わり合いにならねえ」

「へ？」

そんな優牙を冴江が抱きしめ、頭を撫で回す。

「またあ、そんな事言つて」

「優牙君、遠慮しないでいいんだよ」

「そうそう。アハハハハ」

眉を顰めて舌打ちする優牙。

「うーん、和気あいあい？」

美緒が益々首を傾げた。

第61話

放課後、三好の研究室の冷蔵庫前にしゃがんで、美緒はプリンを食べていた。

「うーん。どうしようかな」

「呼んでもいないのに勝手に来て勝手に人のプリンを食べるな」

三好が美緒の頭を書類の束で叩く。

「決めたのか？」

「まだでしゅ」

「……何しに来たんだ」

溜息を吐いて三好は椅子に座って足を組んだ。

「もうすぐ締め切りだぞ」

「そのことなんでしゅけどねえ……」

美緒がスプーンをくわえたまま振り向く。

「延長をお願いします」

「駄目だ」

「おお、世知辛い。人情って何処に行ったんでしょね」

冷蔵庫を開け、更にもう一つプリンを取り出そうとする美緒の手
に消しゴムが当たる。

「そうかそうか。俺は人情忘れた冷たい人間だからプリンはやらん」

「あう。ごめんなさい」

謝りながらプリンとジュースを取り出した美緒に溜息を吐き、三

好はペンでソファアを指した。

「行儀が悪いぞ。座って食え」

「はい」

言われた通りソファアに座り、美緒はさっそくプリンの蓋を開け
食べる。

「うーん、美味」

やれやれと肩をすくめ、机の上に書類を投げるように置きながら、

三好がふと思い出したように訊いた。

「そういえば、佐倉はどうした？」

「ん？ ああ。なんか朝下駄箱に手紙が入っていて、『放課後校舎裏に来てください』って書いてあったんでしゅよ。それでちょっと行ってくるから待っててって」

「ふーん、ラブレターか」

三好の言葉に美緒の動きがピタリと止まる。

「……ラブレター？」

「ラブレターだろ。他に何がある」

ギギギ……と音のしそうな程ぎこちなく、美緒が顔を上げた。

「果たし状」

三好が呆れた表情で首を緩く振り、こめかみに指を当てる。

「う……、だって彼女がいるんでしゅよ。ラブレターって……略奪する気満々でしゅか？ 泥棒猫でしゅか？ 猫のくせに狼の獲物を横取りでしゅか？」

「『獲物』なあ」

「ううー。でも人間の小娘ごときに蓮君が惑わされることないでしゅよね？」

その時、ノックの音がして素晴らしいタイミングで蓮が現れた。

「美緒、帰ろうか」

「この浮気者ー！」

飛んできたプリンの容器を蓮が咄嗟に避ける。

「うむ！ おぬしなかなかやるな！」

「何なんだい？」

蓮は床に落ちた容器を拾い、研究室の中に入った。

「泥棒猫が略奪愛で浮気な獲物がランデブー！」

「そんな訳ないだろ？ ちゃんと断ったよ」

三好が感心したように片眉を上げる。

「よく今ので分かるな」

「慣れですよ」

蓮はニツコリ笑ってゴミ箱に容器を捨てた。

「うう。そう言いながらも若い女をつまみ食い？」

「僕はフサフサの耳と尻尾がない生き物には興味無いよ」

「若いメスをつまみ食い？」

「信用出来ないかなあ。僕には君一匹だけだよ」

美緒の頭を撫でる蓮に三好が訊く。

「プロポーズしたんだってな」

「そうですか？」

「……………」

三好はじつと蓮を見つめ、背もたれに身体を預けた。

「後悔しない選択をしるよ、二人共」

「もちろんですよ」

蓮が口角を上げて美緒を立たせる。

「帰るよ。今日はうちにおいで」

「おお。何だかちよっぴり強引。ヨシヨシ先生さようなら」

蓮に引き摺られながら手を振る美緒に、三好は苦笑しながら手を振り返した。

蓮のマンションに来た美緒は、お菓子とジュースを食べながらテレビを観ていた。

「心ここにあらず」

「ふえ？」

振り向いた美緒に蓮は笑う。

「肉でも食べる？」

「うーん……今はいいでしゅ」

美緒は視線をテレビに戻した。

そんな美緒を蓮が後ろから抱きしめ自分の膝に乗せる。

「悩んでる？」

「……うん。どうして急にプロポーズしたの？」

「好きな人と一緒に暮らせたなら幸せだろ？」

「……うーん」

美緒の身体が縮み、あつという間に狼になった。

蓮は軽く目を睨り、それから嬉しそうに腕に力を込める。

「久し振りに見た」

「あれ？ そうだっけ？」

全身に頬擦りされながら、美緒は成る程と頷き蓮の膝に顎を乗せた。

「まあ確かに、これは幸せであるねえ」

顔を上げた美緒は蓮の唇にチュッとキスをする。

「美緒！」

「うぎゃあ！」

喜び過ぎた蓮に押さえつけられ舐められながら、美緒は小さな声で呟いた。

「でも、いまいちスツキリしないのは何でかな？」

第62話

蓮と共に自宅に帰った美緒は、リビングに入った途端、目を見開いて叫んだ。

「おおお！？ 何この子達！ 眉毛無い！」

「驚きポイントはそこか？」

優牙が呆れたように言い、ソファーに座っている子供の頭を撫でる。

今日はいつもと違い、何故か優牙の他に三人の小学校低学年らしき子供がリビングで寛いでいた。

「一つ目小僧か。本当にいたんだな」

蓮は呟いて、リビングにいる三人の子供を順に見た。

普通は二つある目が一つ――。

しかし大きな一つ目以外は人間の子供と変わりはない。

初めて見る一つ目小僧に驚いている様子の蓮に、ソファーの前に立っていた一番身体の高い子供が鼻を鳴らして言う。

「狼人間がいるんだから一つ目小僧ぐらいいて当たり前だろ。兄ちゃん馬鹿？」

そんな子供の頭を優牙が叩いた。

「やめるクソガキ。喧嘩売っていい相手と悪い相手がいる事を覚えろ」

優牙はニコニコと笑う蓮を指差し眉を寄せる。

「いいか、ああいう心と表情が違う奴が一番危ないんだぞ」

「おやおや、酷いなあ」

心外だと片眉を上げる蓮を押し退けるようにして、美緒が興味津々という様子で子供の一人に近付いた。

「おお、つぶらな瞳。なんでうちにいるの？ 養子縁組？ 弟が

増える？」

「優牙兄ちゃん、この姉ちゃん馬鹿？」

「そうだ。こいつは間違いない馬鹿だ」

優牙が美緒の襟首を掴んで子供から引き離す。

「こいつらの両親が親戚の結婚式から帰る明日まで、預かる約束したんだよ」

美緒は首を傾げて優牙を見上げた。

「一つ目の親戚？ 三つ目とか？ 額に第三の目があつて、それが開くと秘められた力が覚醒するとか？」

「漫画の読みすぎだ」

「じゃあ百目」

「急に多くなりすぎだ。まあいい。大きい奴から順に大悟、忠太、翔哉だ。俺は大小中つて呼んでいる」

「ほうほう、実に覚えやすい」

頷く美緒の肩をポンと叩き、優牙はキッチンへと向かう。

「メシ用意するからその間こいつらの面倒見とけ」

「……え？ 私が？ 蓮く——」

「美緒、頑張れ」

助けを求めようとしたが、蓮も優牙の後に続きキッチンへと行ってしまった。

「あう。押し付けられた？」

子供と遊んだ経験がなく戸惑う美緒の手を忠太が握る。

「お姉ちゃん、かくれんぼしよう」

「は？」

「じゃあ鬼やってね。百数えたら捜してよ」

言い終わると同時にワーツと声を上げて、子供達はあつという間に居なくなった。

「おおお！？」

美緒がキョロキョロと周りを見回す。

「かくれんぼ？ 今どきの子供のくせに！ でいーえすやれでいー

えす！」

「早く捜してこい！」

キッチンから飛んできたお玉が頭に直撃し、美緒は洪々子供達を捜しに行った。

「うう……。行方不明の子供達を捜す為、いつ戻れるか分からぬ旅へ。しかし必ずや再びこの地に私は降り立つ」

しかし十分二十分と時間が過ぎても、一人も見付けることが出来ない。

「み、見付からない……。！ 決して広いといえないこの家で、何故「早くしろよ」。もうすぐメシが出来るぞ」

「神隠しじゃー！ 小僧共は龍神様の贄となったのじゃー！」
飛んできた片手鍋が美緒の頭を直撃する。

「ううう。龍神様の祟りじゃあ……」
床に倒れた美緒を、キッチンから来た蓮が苦笑しながら抱き起こした。

「ほら頑張つて。簡単なはずだよ、美緒なら」
「へ？」

キョトンとする美緒の鼻を蓮が触る。
首を傾げて暫く考え、美緒はパツと明るい表情になって声を上げた。
「そうか！」

美緒の身体がみるみる狼に変わっていく。

そして鼻を上に向けて息を吸い込み、二階へと駆けて行った。

「……甘いな」

呟く優牙に口角を上げて蓮はキッチンへと戻る。

「見付けたー！」

タンスの中と天井裏、そして最後はキッチンの米櫃の中で子供を見付けた。

「変身なんてズリィーよ!」

頬を膨らます子供達に人型に戻った美緒は勝ち誇って言う。

「大人はズルい生き物なのです!」

ちょうどその時、優牙の「メシだぞ」という声が聞こえ、美緒と子供達が振り向いた。

「あ! お子様ランチ!」

子供達が歓声を上げる。

優牙がリビングのテーブルに運んできたのは、レストランにあるようなお子様ランチだった。

タコさんウインナーにハンバーグ、エビフライに卵焼き、フライドポテト、丸く盛られたチキンライスの上には旗も立っている。

「あれ? 優牙、私のお子様ランチは?」

「お子様ランチは十二歳以下にしか提供されねーんだよ」

「うおう! ズルい!」

子供のように地団駄を踏む美緒に蓮が笑いながら声を掛けた。

「ほら、美緒」

「ん?」

振り向いた美緒は、目の前に差し出された料理に驚く。

「美緒の分は僕が作ったから」

子供達と同じお子様ランチを蓮がテーブルに置いた。

「うひょー! 私のお子様ランチ! 蓮君……好き!」

美緒が蓮に飛び付き、勢い余って二人はソファに倒れこむ。ギョツと抱き合う美緒と蓮に子供達がどよめいた。

「ラブシーンだ!」

「うわぁ」

「チュウして! チュウ!」

優牙が慌てて美緒と蓮を引き離す。

「やめろ！ 恥ずかしい」

蓮を蹴り飛ばし美緒の頭を叩いて、優牙は子供達に座るように指示して自分も座った。

「ほらメシだ」

「はい」

美緒が座りその隣に苦笑しながら蓮が座る。

「いただきます！」

みんなで手と声を合わせて言い、夕食が始まった。

第63話

「美味いー!」

「美味しいー!」

「美味すぎるー!」

「まるで味の宝石箱やー!」

「うるせー! 静かに食べ!」

優牙の怒鳴り声も騒ぐ四人には効かず、信じられないうるさに優牙は眉を顰める。

「おら! うるせーつつてんだ——」

その時、蓮が美緒と大悟の皿を取り上げた。

「何すんだよ!」

怒鳴る大悟にニコニコと笑いながら、蓮はきっぱりと言う。

「没収。騒ぐ子にはあげないよ。だけどいい子で食べるなら食後にデザートをあげる」

「う……」

悔しげな顔をして、しかし子供達は静かに食べ始めた。

「ところで……、君たちは悠真に通ってるのかな?」

蓮が訊くと大悟が頷く。

「うん。俺は三年十組」

「十組……ね。その十組には君たちみたいな人外の子が沢山いるのかな?」

「兄ちゃん知らないの? 人外じゃないよ」

「……成る程」

口角を上げて蓮はハンバーグをつつく。

「学校は楽しい?」

「うん。でもマサキむかつく」

「どうして?」

大悟は不満げに唇を尖らせウインナーを箸で摘まんだ。

「こないだ酸吐きやがって服溶けた。母ちゃんに怒られたんだ」

「それはハードだね。――君は？ 最近あった事とか教えて」

話を振られた忠太は口の中の卵焼きをぐくんと飲み込んで答える。
「生き物係なんだけど、ツチノコの蓋締め忘れて逃げられて、先生に怒られた」

「見付かった？」

「うん」

最後に蓮は翔哉に話し掛けた。

「君は？」

「クラスみんなが頭いいから、ちょっと授業に付いていくのが大変。角度求めるの難しい」

「ふーん。君何年生？」

「一年生だよ」

顎に手を当てて蓮がじつと翔哉を見る。

「一年生で角度……、十組は少し進みが早いんだね。後で教えてあげるよ」

翔哉がパツと明るい表情になった。

「ほんと？ ありがとう」

微笑んで頷く蓮を見ながら、美緒が感心したように呟く。

「蓮君意外と子供好き」

その言葉を聞いた隣に座っている優牙が鼻を鳴らした。

「あれは『調査中』って言うんだよ」

「調査……、お父さんとお母さんと一緒だね。蓮君も特殊警察官でしゅか？」

「馬鹿言つてないで早く食え」

優牙の拳が美緒に落ちる。

「ふぎゃあ！ 痛い！」

涙目の美緒の頭を蓮が苦笑して撫でた。

食後、約束通り蓮は翔哉の勉強を見てあげていた。

「そう、だからそこは？ …… 隣合わない角度の和と等しいんだよね」

「あ！ そうか」

カリカリと鉛筆を走らせる翔哉に蓮は微笑む。

その様子を床の上をゴロゴロ転がりながら美緒は見ていた。

「おい、姉ちゃん」

大悟がそんな美緒を体当たりで止める。

「おお、大胆な」

「勉強教えてよ」

「え？ 私が？」

「兄ちゃん達は忠太と翔哉教えてるから、もう姉ちゃんしか空いてないんだよ」

美緒は座って大悟が持っているテキストをパラパラと捲った。

「ふむふむ。あ、分かる」

「当たり前だろ？ 姉ちゃん高校生なんだから」

「これは引っかけ問題でしゅね。この部分に罠が仕掛けてあります。それに気付くかどうかはあなたしだい。一度引っかければ思考は泥沼にはまり、抜け出すのは容易ではない。キャッチセールスと同じです。可愛い女だと思って付いていけば高額商品を――」

「真面目に教えやがれ！」

優牙の蹴りが炸裂し、美緒が転がる。

「姉ちゃん転がってばかりだね。ちゃんと教えてよ」

「…… はいい。申し訳ございませんでした」

美緒は這って大悟の元へと戻り、そこからは真面目に勉強を教え

た。

そして二時間後――。

大きく口を開けてあくびする翔哉の頭を蓮は撫でた。

「ちよつと頑張り過ぎたかな？　そろそろお風呂に入って寝たほうがいいね」

「うん。ありがとうお兄ちゃん、凄く分かりやすかった」

大悟も美緒に礼を言う。

「姉ちゃん、意外にも教え方上手いんだな。授業より分かりやすかった。ありがとう」

「わーい！　褒められた」

ピョンピョン飛び跳ねる美緒の姿に笑いながら蓮は立ち上がった。

「さて、僕は帰るよ」

翔哉が蓮のズボンを握る。

「帰っちゃうの？　泊まらないの？」

翔哉はすっかり蓮に懐いたようだ。

蓮が翔哉の頭をもう一度撫でる。

「またね」

「……うん」

大悟が翔哉の背中を慰めるように叩いた。

「またな、兄ちゃん」

「また勉強教えてね」

「おやすみ兄ちゃん！」

「いつか再び相まみえようぞ」

子供達と美緒に手を振って蓮は帰っていった。

第64話

優牙がまだまだパワーの有り余る子供達を風呂に入れ、グツタリとしながら先にあがった子供達の待つ和室に戻ると……。

「ぎゃあー」

「あはははは！」

「枕投げするな！ 修学旅行か！」

美緒と子供達が枕を投げて遊んでいた。

「あー。すげえなお姉ちゃん、強ええよ」

「うん！ 弟子にして」

子供達の頭を優牙が小突く。

「枕投げで師匠も弟子もないだろ——姉ちゃん？」

優牙は眉を寄せて美緒を見た。

「な、なんか気持ちいい。もっと言って」

美緒が恍惚とした表情で子供達にせがむ。

「え？ すげえ」

「もっと」

「強い」

「もっと」

「尊敬する」

「はわわわわー！」

「うるせえ！ 寝ろ！」

美緒を怒鳴り付けて優牙は電気消す。

「おやすみー」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

子供達が布団に潜り込み、そして——瞬で眠った。

「凄い。もう寝ちゃった」

美緒がポカンと口を開ける。

「姉ちゃんも早く寝ろよ。絶対明日も早朝からエンジン全開だから」

「ん」

だがしかし、美緒はじつと子供達を見つめたまま動く気配を見せない。

優牙が片眉を上げた。

「どうした？」

「んー……」

美緒の手が翔哉の頭を撫でる。

「ねえ優牙、優牙は将来何になりたいの？」

「あ？ なんだいきなり」

「いやあ、何となく」

優牙は少しだけ笑って顎に手を当てた。

「そうだな、まあパティシエになりたかったけどな」

「過去形？」

「今はこいつらをけしかけてる奴の罠にはまってやってもいいかな
と思っている」

美緒が首を傾げる。

「けしかけてる……？」

「三好が何か言ってたかったか？ 俺の将来について」

「あ、教師候補？」

「そうだ」

翔哉から手を離し、美緒は暗い部屋の中で目を凝らして優牙を見つめた。

「先生になるの？」

「まあそうなるな」

「……蓮君は教育学部じゃないって言ってた」
「ふーん、で？ 姉ちゃんはとうするんだ？」

「……………」
美緒が子供達に視線を戻し呟く。

「子供って可愛いねえ、単純で」

「……へえ、一番子供っぽくて単純な姉ちゃんがそれを言うか？」
「どうして蓮君は結婚しようなんて言ったのかな？」

優牙は笑って手を伸ばし、美緒の頭をつついた。

「本人に訊け」

「訊いたよ。好きだからだって。——誰を？」

「おいおい姉ちゃ……………」

笑って済まそうとした優牙が美緒の真顔を見て眉を顰める。

「うーん、どっちも私だしねえ。だけど……………いつまで待てばいいのかな？」

「……………」
「前に蓮君は言ってた。『今はまだすべてに応えられない』って。じゃあ何故無理してでも結婚しようなんて思うの？」

「……………」
優牙は溜息を吐いて肩を落とす、頭を掻き毟った。

「姉ちゃんにシリアスは似合わねえな」

「おお、人の真剣告白に水を差すかね」

「取り敢えず——、待つのがめれば？」

「ふえ？」

首を傾げる美緒に優牙は笑う。

「待つ必要があるのか？」

「……優牙、なぞなぞじゃないんだから。もっと懇切丁寧に分かりやすく述べなさい」

「後は自分で決めろ」

「……………」

美緒が溜息を吐いた。

「優牙」

「なんだ」

「ひねくれた子に育った——痛ひゃい痛ひゃい痛ひゃい」

美緒の頬を優牙が思い切り引つ張る。

「馬鹿が！」

痛む頬を押さえ、翔哉の隣の布団に入る優牙を美緒は見た。

「優牙」

「まだ何か用か？」

「うん。決めた」

「そうか。じゃあ早く風呂入って寝ろ」

美緒が笑いながら立ち上がる。

「おおう、冷たい。どうするか訊かないの？」

「訊かねえよ。おやすみ」

「おやすみ」

美緒が和室から出て行き、優牙はあくびをして目を閉じた。

第65話

「私、先生になろうと思います」

放課後、三好の研究室を訪れた美緒は開口一番そう言った。

三好が片眉を上げる。

「ほお、理由は？」

「簡単に尊敬されて気分がいいから——痛いでしゅ先生。馬鹿になつたらどうしてくれるんですか」

分厚い本で頭を叩かれた美緒が涙目で三好に抗議した。

「ふざけるな。不純な動機で教師を目指すな。率先して学級崩壊させる奴が教師に向いているのか？」

「向いているかいはいかとはにかく、多少やる気になったんだからよしとしましょう。駄目だったら結婚という逃げ道もある——痛いでしゅ」

もう一度頭を叩かれて美緒が蹲る。

「うう……、一度ならずも二度までも」

「で？ 本当の理由は？」

美緒が頭を擦りながら立ち上がり、眉を寄せた。

「うーん、本当の理由と言われても……。今出来ることをまだやるうかなと。それと『手に職』……ですかねえ。頼ってばかりではなく引つ張っていけるように。それに将来破局したとしても自分の足で踏張れるようにしとけばダメージも少ないかなーなんて。人に何かを教えるというのはなかなか新鮮で面白い体験だったし、子供は可愛い。この学園は職員不足で困ってるから就職も簡単そうだしねえ」

「この学園の教員採用試験は激ムズだぞ」

「おおう、しまった。読みが甘かったか」

どうしよう……と顎に手を当てて悩む美緒の姿に三好が溜息を吐

く。

「まあ、やってみろ」

「はい……。そうでしゅね。じゃあさようならヨシヨシ先生」

美緒が三好に手を振って研究室のドアを開ける。するとそこには蓮がいた。

「あ、蓮君。迎えに来てくれたの？」

微笑み美緒の頭を撫でる蓮。

「帰ろうか。ああ、先生」

蓮が三好に視線を移して口角を上げる。

「僕の進路希望、悠真の教育学部に変更をお願いします。エサに誘われ罫にはまることにしました」

トゲのある言い方に三好は苦笑しながら右手を上げた。

「了解」

美緒が目を見開く。

「え？」

「帰ろう」

蓮に手を引かれ、美緒は一步踏み出した。

月日は流れて卒業式――。

「うう……。悲しいねえ」

式終了後の校舎前、ハンカチで涙が一粒も出ていない目を拭う美緒に蓮は苦笑した。

「大学も同じ敷地内じゃないか」

「おおう、クールでしゅ。雰囲気を楽しむ心を大切にしようよ。あ、

ヨシヨシ先生――！」

美緒が三好に向かって走る。

「ヨシヨシ先生――！ 寂しいよう」

三好は微笑んで美緒の頭を撫でた。

「元気でやれよ」

「うん」

「勉強しろよ」

「うん」

「教授に迷惑かけるなよ」

「うん」

「佐倉が好きか？」

「うん！」

「……頑張れ！」

美緒と三好がガツチリ抱き合う。

そんな二人の横から掛けられる言葉。

「美緒、ダーリンが嫉妬するわよ」

「あ、愛ちゃん」

美緒が三好から離れて愛の胸に飛び付く。

「愛ちゃん、大学も一緒に嬉しいでしゅ」

美緒と蓮と愛、三人は同じ道へと進むと決めた。

「はいはい。逃げられそうにないから——ねえ、三好先生？」

三好が苦笑する。

「無理強いした覚えはないぞ」

「でも強引ではあるわよね。でもいいわ、悠真の先生っていうのに興味があるから。さよなら三好先生。お世話になりました」

「ああ。お前達の『先生』をやれて幸せだった」

微笑む三好に美緒が呟いた。

「陳腐な台詞……痛いでしゅヨシヨシ先生」

三好に拳骨を落とされた頭を抱えて美緒は叫ぶ。

「暴力教師！ 訴えてやる！」

そのまま校門に走って行く美緒の姿に三好が目を細め、蓮と愛が苦笑しながら追った。

「ううー。痛いでしゅ」

ブツブツと文句を言う美緒の頭を追い付いた蓮が撫でる。

「これも一種の愛情表現だよ。それより何か食べに行こうか？」

美緒がパツと明るい顔になって蓮を見上げた。

「行く！ 愛ちゃんも一緒に行こ。卒業式に親が来てくれなかった者同士、仲良くパアツとやろうよ」

「え？ 私も？ そうね……」

愛が首を傾げて考える。

そんな愛の目の前に一台の車が停まった。

「……………」

驚く愛と美緒。

「この高級車はまさかもしかして……アレでしゅか？」

「アレ……？」

蓮が眉を寄せる。

運転席から出て来たのは、帽子を目深にかぶり、サングラスに口ングコート、マフラーに皮手袋をしたあからさまに怪しい人物だった。

「パパ……！」

愛が怪しい人物に飛びつく。

「迎えに来てくれたの？」

「ああ。愛、卒業おめでとう」

怪しい人物は愛の父親だった。

背は高く、声は低くて渋い——が、怪しすぎる。

「うわ！ 本当に愛ちゃんパパだ。こんな明るい時間に外出るなんて自殺行為だよ！」

眉を寄せて危険を訴える美緒の頭を愛の父親が撫でた。

「久し振りだね、美緒ちゃん。そして——」

サングラス越しの視線が蓮に向けられる。

「君が蓮君か」

少しだけ驚き、しかしすぐに冷静さを取り戻した蓮がじっと愛の父親を見ながら口角を上げた。

「河内さんのお父さんですか。はじめまして」
「はじめまして」

愛の父親が手袋取って蓮に手を差し出す。

「……………」

蓮も手を出し握手をした。

「これから宜しく頼むよ」

「ええ、こちらこそ」

愛の父親はもう一度手袋をきっちりはめてから「行こうか」と愛を促す。

「美緒、佐倉、またね」

「うん。またね愛ちゃん」

「さよなら河内さん」

愛と愛の父親は車に乗って去って行った。

「……………」

それを見送って、蓮がフウツと息を吐く。

「河内さんのお父さんの肌は緑色してるんだね」

「うん」

「指の間には水掻きがあるんだね」

「うん」

蓮が美緒の手を握り歩きだした。

「蓮君、愛ちゃんパパ見てたらお寿司食べなくなっちゃった」

「そうだね」

「やっぱり回転寿司だよね」

口元に笑みを浮かべて蓮が提案する。

「優牙君も呼んで食べに行こうか？」

「うん！」

鞆から携帯電話を取り出した蓮は、優牙に電話をかけた。

第66話（人生の選択編 終了）

回転寿司店で皿を重ねながら、優牙がブツブツと文句を言う。

「普通、デートに彼女の弟呼ぶか？」

「そう言いながら優牙君は来たし、しっかり食べてるじゃないか」

「奢りだつて言うから来ただけだ。姉ちゃん普通の寿司も食え」

変わり種の寿司やデザート類ばかり食べる美緒に優牙は眉を寄せた。

「だつて面白いのがいっぱいあるんでしゅよ。回転寿司なんて……
つていうか外食なんて久し振りだね」

「あー、そうだな。何で急に寿司食おうと思ったんだ？」

「愛ちゃんパパに会ったから」

優牙の動きがピタリと止まる。

「おじさんに？ こんな昼間に外に出たのか？ いくら卒業式だらつて……無謀すぎるだろう」

渋い顔をする優牙に美緒がうんうんと頷いた。

「本当にねえ。蓮君ビックリした？」

蓮が苦笑する。

「そうだね。手しか見てないけど、河内さんとあまりに似てないから驚いた」

「あー、でも愛ちゃんの頭も髪の毛掻き分けると小さいのがあるんだよ。それに足首から先はよく似て——うぎゃ！」

優牙が手裏剣のように投げた皿が美緒の鼻を直撃した。

「馬鹿。外でペラペラ喋りすぎだ」

鼻を押さえる涙ぐむ美緒の頭をポンポンと慰めるように叩き、蓮が優牙に笑う。

「将来のことを考えると、僕も色々勉強しなくちゃいけないな」

優牙は鼻を鳴らして視線を逸らし、回転する寿司を一皿取った。

「じゃあ、暫く会えなくなるけど、電話するからね」

「……うん」

玄関前、美緒が唇を尖らせて頷く。

蓮は苦笑して美緒の頭を撫でた。

大学が始まるまでの間は実家で過ごす、蓮は先程急に美緒に告げた。

遊びに行く計画を立てていた美緒は当然怒り、そんな美緒をなんとか宥めて蓮はこれから駅へと向かう。

「お土産たくさん買って戻ってくるからね」

「……うう。他の犬と浮気したらだめだよ」

「当たり前だろ」

「メス犬は見るのも禁止だよ」

「僕を信用して。じゃあね」

蓮が美緒の頬を両手で包みこむ。

触れ合う唇――。

「……え？」

呆然とする美緒に蓮は笑って去って行った。

「……」

美緒が自分の唇にそつと指で触れる。

軽くだけど、確かに感じた温もり。

暫く玄関前に立ち続け、美緒はギクシャクと家の中に戻った。

「野郎は帰ったか？」

リビングのソファ―に座っていた優牙が振り向き美緒に訊く。

「……キスされた」

「…………あ？」

「キス……変身してないのに」

「……………」

片眉を上げて優牙は笑った。

「そりゃするだろ。恋人同士なら」

「…………うん」

美緒がゆっくり優牙に近付き横に座る。

「うへへへへ！」

「気持ち悪い笑い方をするな」

嬉しさを隠しきれない美緒の頬を、優牙はギュッと引つ張った。

番外編 「焦り」(前書き)

蓮視点です。

番外編 「焦り」

久し振りの実家は相変わらず居心地が悪かった。

リビングで珈琲を飲む僕と父さん。母さんはキッチンで食事の後片付けをしている。

年の割には若くかつこいい父さんと美しい母さん。表面上は仲の良い、何の問題もない家族。だが――。

「大学合格おめでとう」

遠慮がちに言う父さんに、僕は微笑んだ。

「ありがとう。ごめんね、勝手に進路決めて」

「いや、いいんだ。蓮の好きな道を進みなさい」

理解がある、と言うより遠くの高校に転入させた負い目があるの
で、父さんは僕が教師になるのを反対しなかった。いや、もしかして既に学園との間で話がついているのかもしれない。

「どうだった？ 高校生活は」

「楽しかったよ」

「そうか。彼女はいるのか？」

何気ない質問。

ガシャーン！

キッチンから聞こえた音に振り向くと、母さんの足元で皿が割れていた。

「あ、ご、ごめんなさい」

謝りながら破片を集めようとする母さん。

「大丈夫か？」

父さんが心配そうに声を掛け、僕が立ち上がり母さんの元へ行く。

「母さん、僕がやるよ」

「いいのよ」

首を振る母さんの腕を、僕は強引に引っ張った。

「大丈夫、慣れているから」

「え？」

母さんをソファアに座らせて、キッチンに戻って破片を拾う。母さんはそんな僕をじっと見つめた。

そつと溜息を吐く。

分かっている、居心地が悪いのは自分のせい。

必要以上に優しい母さんを、早く安心させてあげてよう。

「彼女がね、凄くドジで、よく食器を割るんだ」

「彼女！？」

目を見開き、叫ぶような声を上げて、母さんが驚愕した。

「うん、彼女」

「れ、蓮、それって……」

視線が彷徨い口ごもる。『人間か』と訊きたいのだろう。

破片を片付け、僕はズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

「ほら、可愛いだろ？」

そう言って両親に見せたのは、卒業式後に美緒と一緒に撮った写真。

「ほお、可愛いな」

父さんが破顔する。

「うん、ありがと。『美緒』って言うんだ。今度家に連れてくるよ。ね、母さん」

笑顔で振り向く。すると母さんは涙を流していた。

「おい、どうした」

驚く父さんに、母さんは涙を拭って微笑む。

「ごめんさい。あまりにも可愛いから感激で……」

「びっくりした？」

「ええ……」

それから少し美緒の話をして、僕は自室に戻った。
大きく息を吐いてベッドに寝転がり、先ほどの母さんのホツとした笑顔を思い浮かべる。

いつの頃からか、母さんは僕の恋愛対象が普通でないことに気付いていた。そして僕を責めずに自分を責めた。

どうにもならないことだが、申し訳ないという気持ちはあった。
だが、これで母さんも長年の悩みから解放されるだろう。

もう一度大きく息を吐いた時――。

「ん？」

携帯電話が震える。

誰からの着信か確認し、僕は電話に出た。

「はい」

「おいこら変態、人型の姉ちゃんにキスしたそうだな。プロポーズ
といい、何をたくらんでやる？」

いきなりの喧嘩腰に苦笑が漏れる。

「人聞きの悪い。キスしたのは美緒が好きだからだよ」

「……へえ」

「信じてないのかい？」

「本当は？」

僕は横向きになり、昔から壁に貼られたままの犬のポスターを見
つめた。

「参ったな。正直に言うと、焦っていたんだ」

「はあ？」

「僕は狼の美緒を愛している。そして人間の美緒に情がある」

少しの沈黙。

「……それで？」

「変身した姿も人間の姿も同一人物であることは頭では分かっている
んだ。だが僕の身体は人間の美緒にときめかない。それは美緒も
本能的に感じ取っていたみたいだけ」

「……ああ、そうだな」

僕は笑った。

「これでは美緒が愛想をつかして離れていってしまうのではないか。それは嫌だ。だから思わず『結婚』なんて言葉が出てしまった」

優牙君が唸る。

「それはつまり、衝動的に口走ったと？」

「そうなるな」

「……………」

優牙君は大きな溜息を吐いた。

「何だそれは？」

「これでも人間の美緒を愛そうと努力しているんだよ」

「それがキスか？」

「情はあるんだ。だから何とか身体が反応しないかなあと」

「馬鹿か！ 変態が！」

一方的に電話は切れた。優牙君の怒った顔が目に見えかぶ。

僕は起き上がって携帯電話をベッドの上に放り投げ、そして壁に貼ってあるポスターのところに行き、それに手を触れた。

「狼も人間も、どっちの美緒も好きなんだよ」

青春時代を共に過ごしたポスターをビリビリと乱暴に破り、ゴミ箱に捨てた。

番外編 「姉ちゃんのバイト」 (前書き)

優牙視点です。

番外編 「姉ちゃんのバイト」

「馬鹿か！ 変態が！」

思い切り怒鳴って通話を切る。

あいつは筋金入りの変態だ。あんなのに姉ちゃんをまかせて本当にいいのか？

今更ながら後悔が押し寄せてきて、俺は溜息を吐く。と、そこに――。

「変態――！ 優牙、蓮君と話してるの！？ 貸して！」

…… 変態って言葉に反応して部屋にきやがった。つーか『変態』

『彼氏』ってのが当たり前になってんのがすげーな。

「もう切っちゃったよ」

「ええー！ もう一回電話かけて！」

「嫌だ。家の電話からかけろ」

姉ちゃんは眉を寄せ、唇を尖らせた。

「じゃあ蓮君のケイタイの番号教えて」

「……………」

おいおい、マジか？ 知らないのか？ 彼女なのに。

信じられない関係だな。いくら姉ちゃんが携帯電話持つてなくても、番号ぐらい教えるだろう。姉ちゃんもなんであいつに訊かないんだ？

俺の絶句をどう捕らえたのか、姉ちゃんが溜息を吐く。

「うつ、ケチめ！ あーあ、ケイタイ欲しいな。春休みの間バイトして買おうかな。でも短期間でケイタイ買っただけのお金って稼げるのかな？ うーん、短期で割のいい……、パンツを売るとか？」

「馬鹿なこと言ってるじゃねえ！」

ふざけんな！ 冗談でも言っていていいことと悪いことがあるんだぞ！
姉ちゃんに蹴りを食らわせ、ついでに頭を踏みつけて俺は考える。
携帯電話を親父に強請るのではなく、自分で買おうという意思是
尊重してやるう。だが、姉ちゃんにバイトなんてできるのか？ ど
うするか……。

「そうだ、あいつが確か——」

姉ちゃんをチラリと見て、俺は携帯電話に登録してあった、ある
番号に電話をかけた。

数回のコールの後に出た相手に俺は言う。

「よう。ああ、手伝いが欲しいって言ってたよな？ ちょうどいい
のがいるから貸してやる。頑丈な身体と鉄の胃袋を持つお姉さんだ
ぞ」

電話の向こうから歓喜の声が聞こえ、足元から呻き声があがった。

朝、眠いとこねる姉ちゃんを叩き起こして、ある店に連れて行く。
「え？ ここ、『街の妖精』じゃない」

姉ちゃんが驚く。

『街の妖精』は、近所では評判のパンと洋菓子の店だ。そして、
ここの店主は看板の通り——。

「優牙兄ちゃん！ いらっしやい！」

店の裏口を開けると、二メートルを優に超える大男が嬉しそうに
笑う。

肩まで伸びた、クリクリの天然パーマの銀髪。筋骨隆々の、見た
目はまるで格闘家のこの男が、店主の『銀』だ。

「このお姉ちゃんがお手伝いしてくれるの？」

銀が首を傾げる。

「そうだ。俺の姉ちゃんだ。ところで陸の怪我はどうだ？」

「うーん、あと一週間くらい寝てなきゃ駄目だって。お姉ちゃん、陸ちゃんのお怪我が治るまでお手伝いしてね。お願いします」

ぺこつと頭を下げる銀を姉ちゃんが指差した。

「……野太い声で幼児口調。優牙、これは何プレイ——うぎゃ！」
姉ちゃんの頭を叩く。

「こいつはそんなじゃねーよ。本当にまだ子供なだけだ」

そう、銀は成長しすぎの妖精なのだ。本来妖精は、大人でも二十センチ程度にしか成長しないのに、こいつだけ異常に大きい。

本人曰く、千年に一度願いを叶える木に『早く大きくなりたい』と願ったら急成長したらしいが、それが本当に原因かどうかは分からない。

「この店唯一の人間が事故って怪我しちまったんだ。いつもレジや
つてる女の子、見たことあるだろ？ そいつの怪我が治るまでの間、
代わりをしてやってくれ」

姉ちゃんを銀にポイと渡す。

「あのね、僕がお店に出ると、お客さんが逃げちゃうんだ。他のみ
んなも出れないし……」

「みんな？」

「うん。みんな、集まって！」

銀が呼ぶと、奥から銀の仲間達が透明な羽をパタパタさせて飛ん
できた。ちなみに銀の背中にも羽があるが、体が成長しすぎて飛ぶ
ことは不可能らしい。

姉ちゃんが目を丸くする。

「妖精！？ 初めて見た！」

「お姉ちゃん、僕も妖精だよ」

「え！？」

銀は笑って、興味津々の妖精達に姉ちゃんを紹介した。

「みんな、このお姉さんが陸ちゃんが元気になるまでの間、お手伝いしてくれるって」

ワツと妖精に囲まれる姉ちゃんから、俺は離れる。

「まあ、頑張れ」

俺はそう言い残して、その場から立ち去った。

「うげえ……。お腹が苦しい……」

夜、店に行くと、姉ちゃんは残ったケーキを食いすぎて動けなくなっていた。

「すごいね、お姉さん。僕もたくさん食べるけど、お姉さんはもっと食べるね」

銀は姉ちゃんの食いつぷりと味覚を褒めちぎり、今日の分のバイト代をくれた。

「ほれ、帰るぞ」

「優牙、歩けない。おんぶ」

「甘えるな」

ごねる姉ちゃんの腕を掴んで引き摺って家に帰る。

そして「もう一步も動けない」と床に倒れた姉ちゃんをソファに転がした。

「ほら、バイト代」

だらしなく寝転ぶ姉ちゃんに、俺は金の入った封筒を渡した。

「うわーい！」

姉ちゃんが喜んで中身を確認する。

「どうだった？ 初のバイトは」

「ん、大変だったけど、美味しかった」

「……どんな感想だよ」

まあでも、頑張ってたな。

実はちよつとだけ気になり少し離れた場所から見てたんだが、不

器用ながら一生懸命やっていた。心配していた大きな失敗も無く、驚いたことにつまみ食いをしている様子もなかった。

姉ちゃんもそれだけ成長してるってこと……か？

「あー、早くケイタイ欲しいな。そうだ！これを元手に宝くじ——あう！」

馬鹿が！ 苦労して手に入れた金を無駄にする気が。前言撤回、やっぱりまだまだ馬鹿だ。

溜息を吐きながら、俺はキッチンへと行く。そして、置いてあった紙袋を持ってきて、姉ちゃんに渡した。

「あ！これってもしかして！」

「ケイタイだ。金は立て替えただけだからな、ちゃんと返せよ」

「うおう！優牙好き！」

抱きついてくる姉ちゃんを思い切り投げ飛ばし、俺は手を払う。

床に叩きつけられた姉ちゃんは少しだけ呻き、すぐ復活して立ち上がった。……まるで不死身みたいだな。

「愛と俺と野郎と、それから父さん母さんの番号とメルアドはもう登録してある」

「うん！電話する！」

姉ちゃんはソファーに座りなおし、さっそく電話をかける。勿論相手は——。

「あ、蓮君？」

……嬉しそうな声出しやがって。

「風呂、先に入るからなー」

呟くように言って、俺はリビングから出て行った。

第67話

夜十時――。

人気の無い真っ暗な小学校の校舎。その昇降口前に立つ四人――美緒、蓮、愛、優牙。

「なんだか怖いでしゅねえ」

蓮の腕にしがみつき、美緒が呟く。

美緒と蓮、それに愛は大学二年生、優牙は大学一年生になっていた。

「こんなところに呼び出して、いったい何の用なのかな？」

昼間、大学の事務職員から、四人は十時にこの場所に集まるようにと言われた。ただし、呼び出しの理由については一切聞かされていないのだ。

「学校の七不思議体験ツアーにご招待とか？」

その時、校舎の中にボウ……と光が浮かんだ。

「ぎゃあ！ ヒトダマ！」

叫ぶ美緒に苦笑して、蓮が光を指差す。

「へ？」

よく見るとそれは『ヒトダマ』ではなく『人』のようで、昇降口の戸を開けて四人に笑いかけた。

「ようこそ、夜の学園へ」

美緒はポカンと口を開けて、昇降口に立つ人物を見上げた。
「ヨシヨシ先生だ。一年ぶり。どしたの？ こんなところで」

久し振りに見た三好は以前と変わらぬ様子で美緒の頭を撫でる。

「みんな、元気そうだな」

「元気だよ。そして卒業式での涙の別れからたった一年で再会とは、正直がっかりだよ」

「さて、行くか」

「おお、無視？ 先生は変わってしまった。たった一年の間に何があったというのか」

三好が苦笑しながら四人を校舎内に入れ、懐中電灯で足元を照らしながら歩き出した。

「一年間に何があったか聞きたいか？ 簡単に言つと信じられないほど忙しかった。疲労が限界にきている教員や、実際ダウンした者もいて、俺も小中高掛け持ちでヘトヘトだ」

美緒が眉を寄せる。

「小中高？」

「このままでは理事長が最終手段を使いかねない」

「最終手段？」

「ということ——」

三好は階段下の何の変哲も無い壁の前で立ち止まり、四人の顔を見回した。

「今から教育実習を行う」

「教育実習！？」

美緒が驚きの声を上げ、残りの三人が渋い顔をする。

「おおー。教師への道を確実に進んで——うぎゃー！」

うるさい美緒を押し退け、優牙が三好の前に立って腰に手を当てた。

「呼び出しを聞いた時にまさかと思っただけ、本当に教育実習だったのか。おいこら、今何月か知っているか？」

三好が片眉を上げる。

「四月だ」

その答えに優牙のこめかみがピクピクと動いた。

「俺は大学に入学したてだが？」

「では行くぞ」

「無視かよ！」

三好が壁に手を当てると、どういう仕組みになっているのかは分からないうが、壁の一部がギギギと音を立てながら開き、下への階段と長い通路が現れる。

「欲しいのは即戦力だ。期待している」

口角を上げる三好に優牙が鼻を鳴らして通路に入り、その後美緒達が続いた。

美緒はキョロキョロと周りを見回し、そんな美緒がこけないように腕を引つ張りながら蓮が呟く。

「校舎内に隠し出入り口ですか」

愛も肩を竦めた。

「ここにこんなものがあつたなんて、全然気付いてなかったわ」

「実は十組の教室への出入り口は学園内のいたるところにある。こ

こはそのうちの一つにすぎない」

「たくさんあるのですか？ 危険では？ 何かの偶然で一般生徒に

見つかりでもしたら……」

人外が存在がばれてしまい、大変な事態になる。

だが三好は首を横に振った。

「いや、いざという時にすぐに十組の教室に教職員が駆けつけられる体制が整っていた方がいい」

「そうなのですか？」

首を傾げる蓮に三好は笑う。

「ああ。何しろ十組はいろんな生徒がいるからな」

目の前に現れた階段を上り、ドアを三好は押した。そこには……。

「ん？ フツーだね」

美緒の言った通り、何の変哲も無い廊下と教室。ただ違うのは、窓が極端に少なく小さいという点だけだ。

「二年生の教室に行くぞ」

三好に案内されて、四人は二年十組の教室へと向かった。

第68話

二年十組の教室に向かいながら、三好は四人に告げた。

「今日は十組の授業がどんな感じか見学をしてもらう。もし何か起こったとしても、むやみに手を出すなよ」

「何が起こると言うのでしゅか、ヨシヨシ先生」

「まあ、いろいろな。ここだ」

三好が立ち止まり、教室のドアに手を掛ける。美緒達は少し緊張した面持ちで、ドアが開けられるのを見ていた。すると――。

「ぎゃああああー！」

ドアが開いた瞬間、響く悲鳴。目の前で繰り広げられる光景に、美緒達は目を見開いた。

鋭いかぎ爪と牙、頭から背中に掛けて生えたトゲ。赤い体毛が生えた体長一メートルくらいの人外が、異常に大きな頭とキリリとした目の男の子の肩に、鋭い舌を刺している。

「い、いろいろ起きた！ いきなり起きた！」

パニック寸前の美緒の頭を軽く叩き、三好が怒鳴る。

「こら聡！ お友達ともの血を吸うな」

聡と呼ばれた舌を肩に刺しているほうの人外が振り向いた。目は丸く赤い。

聡はストローのような舌をお友達ともの肩から抜くと、頬を膨らませた。

「だって先生、誠二せいじが僕の消しゴム盗ったから……」

「盗ってねーよ！ 借りただけだろ、ケチ」

誠二と呼ばれた人外が、肩を抑えて聡を蹴る。

「嘘！ 盗ったね。泥棒だー！ おまわりさーん、ここに泥棒がいますよー！」

「うるせえ！ 馬鹿！」

「馬鹿って言うほうが馬鹿なんだよ！」

「なんだとこら！」

三好はパンパンと手を叩いて、揉めている子供達に言った。

「仲直りしろ！」

「……………」

「……………」

「んー？ 先生の言うことが分からないか？ 仲直りしろ」

子供達が渋々握手をする。

「勝手に消しゴム借りて悪かったよ」

「あー、俺もやりすぎた」

他の生徒達から拍手が起こった。

三好が満足気に頷き、それを見ながら優牙が呟く。

「想像以上にハードそうじゃねえか……………」

「うう…………」。血を吸うお子様はちよつと苦手でしゅ」

いきなりとんでもないものを見てしまった。美緒は隣に立つ蓮の袖を掴んだ。

三好が黒板の前に立ち、生徒達の顔を見回す。

「はい、席に着け。いいか、みんな。先生とのお約束だ。『お友達を噛まない・食べない・血を吸わない』。さあ言え」

「噛まない・食べない・血を吸わない」

生徒達が声を揃えて三好の後に続けて言った。

「必要以上に脅かしたり呪ったり幻覚を見せたりするのも駄目だぞ」

「はい」

元気良く返事する生徒達をじっと見ながら、蓮が感心したように眉を上げた。

「凄い教えだね。美緒、さっき揉めていた子は何ていう種族かな？」
「へ？ さあ？」

首を傾げた美緒の代わりに愛が答える。

「『チュパカブラ』と『ぬらりひょん』。どっちも有名なんだから、それくらい知ってて当たり前よ」

「へえ、あれがそうなのか」

蓮が顎に手を当てる。

「でもあの子、生徒として受け入れるのは少々危険じゃないのかな？」

全身毛むくじやらの者や人とは形からして違う者、それらを通り越して蓮の視線がチュパカブラで止まった。美緒が唸る。

「うーん、まあそうかも——」

「それは違うぞ」

いつの間にかまた四人の前に立った三好が、厳しい視線を蓮に向けた。

「必要なのはちゃんとした教育だ。本能を理性で抑える術や、人間との共存の大切さを教えるのも教師の仕事だからな。お前達は後ろで見学している」

「……はい」

蓮が頷き、四人は後ろへと行く。その途中、一つ目小僧の翔哉が嬉しそうに手を振ってきたのに美緒と蓮は小さく手を振り返す。

三好が出席簿を開いた。

「では出席をとるぞ。綾部、加藤、木村、近藤……」
生徒達が返事をする。

このクラスの生徒、二十五人の出席を確認し、三好は爽やかに笑った。

「みんな気付いていると思うが、今日は教育実習生が来ている。休み時間にはたくさん遊んでもらえ」

生徒達が振り向き、歓声をあげる。

「え？ 期待されてる？」

キラキラと輝く瞳で見つめられ、美緒が首を傾げて蓮を見上げた。
「そのようだね」

蓮が口角を上げ、優牙が拳を握り締める。

「これは気合入れないと大怪我するな。姉ちゃんは特に気を付けろ。
いくら脅威の回復力があっても、脳みそ吸われたらおしまいだぞ」
「うう、怖いこと言わないでよ……」

美緒が震える。愛が頷いた。

「本当に気を付けてね、美緒。何かあっても絶対に私は巻き込まないで」

「愛ちゃん、冷たい！」

「さあ、みんな、こっち向いて算数の教科書を出せ！」

三好の言葉に生徒達は一斉に前を向き、教科書を出す。
授業が始まった。

第69話

授業中は驚くほど大人しくしていた生徒達だが、休み時間になると、我先にと実習生である美緒達の元へと駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん！ 僕の友達、浩介こうすけだよ」

翔哉が蓮に紹介したのは長い首の男の子、『ろくろ首』と呼ばれる妖怪だった。

「こんにちは。宜しく」

蓮が微笑むと、浩介は照れたように笑ながら首を伸ばした。

その隣で大きなトカゲ——『リザードマン』と呼ばれる人外の子供が優牙に訊いた。

「人間？」

優牙は親指で蓮を指す。

「こいつだけ人間」

「へえー、そうなんだ。お兄ちゃん人間に見えるのに」

話しかけてくる子供達に答えていると、三好がやってきた。

蓮が美緒の腕を引いて、話の輪から抜け出す。

「生徒数は意外と多いんですね」

三好が頷く。

「学園には全国から生徒が集まるからな。寮も完備されていて、人外の親が安心して子供を任せられる環境が整えられているしな」

「寮？ どこにそんなものあるんですか？ そもそもこの校舎も敷

地内のどこにあるのですか。何となく位置は分かるのですが、そこに校舎らしきものがあつた記憶はありません」

「そこらへんは、上手く分からないようしてある」

「どうやって？」

「内緒だ」

蓮は片眉を上げて、視線を優牙と愛に群がる子供達に移す。

「授業は夜間行われるのですか？」

「現在は主に夜間だ」

「見つかつて騒ぎになるのを避けるには、やはり夜間の方が都合がいいからですか？」

「そうだな。自宅から通学している子も多いし、そうなると夜間のほうがいい。だがそれだけではなく、教師不足から夜間にやらざるを得ないという状況でもある」

蓮は「ふーん」と言って顎に手を当てた。

「人外と一口に言っても、所謂妖怪から未確認生物、伝説上の生き物までいろいろ揃っていて、なんでもありな雰囲気ですね」

「節操が無いでしゅ」

話に割り込んできた美緒の頭を三好が撫でる。

「どんな種族も受け入れる、というのが理事長のお考えだからな」

「なるほど。先生、一人だけ人間っぽい子が居ますね。あの女の子」
蓮が指差した子を見て三好は笑った。

「ああ、子ダヌキだな。まだ長時間化けることができないから十組にいるが、あの子の兄は高三でクラスメイトだった金城だぞ」

その言葉に驚いたのは、蓮ではなく美緒だった。

「え！？ 金城君タヌキだったの！？」

蓮が苦笑して美緒の鼻にチョンと触れた。

「気付いてなかったのかい？」

「れ、蓮君は知ってたの？」

「僕は美緒の正体を知ってから、注意して生徒達を見ていたからね。タヌキだとは知らなかったけど、何となく人間ではないかなと思っていたよ」

「うっ……。素晴らしい洞察力」

三好は笑って美緒の頭をクシャクシャと撫でた。

「これからはしっかりしてくれよ。教師陣は新戦力に期待しているんだからな。それにボーッとしていると、うっかり喰われてしまうおそれもある。気を付けろ」

「……………」

美緒が蓮の袖を掴んで呟く。

「もしかして、この道に進むと決めたのは早計だったかな？」

「じゃあやめる？ 中途半端は危ないよ」

見上げると、真剣な表情の蓮と目が合った。

少しだけその目を見つめ、美緒は首を横に振る。

「やる」

蓮が口角を上げた。

「そう」

三好が息を吐いて二人から離れる。

「じゃあ頑張ろう」

「うん」

大きく頷く美緒。微笑みあう二人。その時――、近付いてくる生徒に気付き、蓮が顔を上げる。

大柄な子供が美緒と蓮の前に立った。

「先生！ 次の休み時間にドッジボールやろうよ！」

子供を見た美緒の顔が引きつる。

「……ドッジ？ えーと、素敵なツノが生えた君は何の種族？」

「鬼！」

「……おお、それはまたデンジャラスなドッジになりそうだね」

蓮が鬼の子に微笑む。

「いいよ。後でね」

鬼の子は「やったー！」と叫んでピョンピョンと飛び跳ねた。

「ほら、次の授業が始まるよ」

蓮に言われて鬼の子が席に戻る。

美緒が大きな溜息を吐いた。

「骨折の予感」

「そうならないように必死に逃げないとね」

「うう、初日からキツイ……」

三好が黒板の前に立ち、二時間目の授業が始まった。

第70話

「うげえ！ やっぱ鬼は反則……！」

腹にめり込んだボールが床に落ち、コロコロと転がった。
美緒が口元を押さえて跪く。

「アウトー！ 大上、外野へ」

三好の非情な声が体育館に響いた。

「うう……冷たい。ドッチボール恐るべし」

ドッチボールをしたいという鬼の子の要望に応え、三好は四時間目の授業を体育館でのドッチボールに変更した。

三好曰く、たまには生徒達に息抜きをさせることも大事なしいのだが、美緒にとっては命懸けの遊びだ。

ヨロヨロとしながらコートの外へと出る。すぐに再開される激しい球の応酬。

そんな中、人外相手に普通に楽しんでいる蓮と優牙が、美緒には信じられなかった。

「優牙はともかく、蓮君は凄いなあ」

思わず呟くと、すぐ傍から声が返ってくる。

「人間なのに、ホントね」

「あう、愛ちゃん苦しい」

試合が始まってそうそうにボールに当たり、それからずっと外野にいた愛が笑った。

「馬鹿ね。こういう時は、わざと軽く当たって外野に行けばいいのよ」

「う、悪知恵」

愛が美緒の腕を引き、少しだけコートから離れる。

「努力してるんじゃないの？」

美緒が「ん？」と愛を見た。

「佐倉よ。鍛えてるんでしょうね、身体」

「うーん、そうなのかな？」

曖昧な返事に、愛が眉を寄せる。

「ねえ、まさか佐倉の裸を見たことが無いとか？」

「まあ！ 愛ちゃん破廉恥な！」

「真面目に答えなさい」

愛が美緒の頬を引っ張った。

「いひゃい、いひゃい！」

「あんた、彼女なんでしょ？」

美緒から手を離し、愛は長い髪を掻き上げる。

頬を押さえて美緒が答えた。

「うーん、裸ねえ。見たことあったっけ？ 覚えが無いなあ。蓮君

とは清い交際してるからね」

「……何年付き合ってるのよ」

あきれたように言う愛に、美緒が首を傾げる。

「変？」

「変——と言うより意外」

「そうかなあ。あ、ボールがきた」

外野めがけて飛んでくるボールを、美緒は取ろうと手を伸ばした。

「キャー……タッチ！」

しかしボールは目の前で突然消える。コート内にいる緑色の髪をした女生徒がニヤリと笑った。

「マ、マンドラゴラの触手も反則……！」

緑の髪——正確には葉や触手を巧みに操り、マンドラゴラの子はボールを投げる。

「うー！ ちょっと悔しい！」

頬を膨らませる美緒を愛は笑った。

「じゃあ、美緒も変身して頑張れば？」

「変身！　そうかじゃあ……　って、よく考えたら狼の姿でどうやってボールを投げればいいの？」

「あら、そこに気付いた？　偉い偉い」

頭を撫でられて美緒が眉を寄せる。

「愛ちゃん、馬鹿にしてましゅね？」

「褒めてるのよ」

クスクスと笑う愛を睨みつけ、美緒は味方コートの生徒に大きな声で命じた。

「行け、かまいたち！　突風攻撃だ！」

ビシッと指差した美緒の頭に靴が飛んでくる。

「こら大上！　変なことを教えるな！」

三好の怒りの声。

「うう……。何も靴を投げなくても……」

蹲る美緒に愛が呟くように言う。

「あ、美緒ボール」

「え？」

顔を上げた美緒を、鬼が投げたボールが直撃する。

「……だから鬼は反則だって。愛ちゃん、後は頼んだ……」

パタリとわざとらしく倒れた美緒に、愛はやれやれと肩を竦めた。

第71話

「えーと……」

夜、美緒は蓮のマンションで、生徒について覚えたことをノートに纏めていた。

あれから週に数回は教育実習という名目で、夜呼び出されている。美緒達は何とか頑張つて、十組の生徒達に慣れてきていた。

「ハルちゃんは二口女だから早弁に注意。小人の木本君は小さいから踏まないように。それからえーと、一反木綿は図工と習字の時間は汚れないように、人魚と半魚人は干からびないように注意……」

美緒がペンを置いてテーブルの上に突つ伏す。

「うー！　まず生徒の特徴を覚えるのが大変だね」

愚痴を零す美緒の頭を蓮が撫でた。

「小学校から高校までだからね。それに幼稚園も今度手伝いに来いって言つてたな」

美緒が「え！？」と顔を上げる。

「幼稚園まで？」

「うん。人手不足だつて」

「……………」

大きな溜息を吐いて美緒は項垂れた。

「そりゃ先生達も病気になるよ。はあ、疲れた」

そして床に寝転ぶ。

「先生になるのは大変だね。早まつたかな？」

蓮が美緒の顔を覗き込んだ。

「じゃあ、やめるのかい？」

「う。それはそれで勿体ない気もする」

美緒が手を伸ばし、蓮が美緒を抱き上げる。

「でも、さすがに僕も疲れたよ」

美緒が目を見開いた。

「あれ？ 弱気発言なんて珍しい。じゃあ元気にしてあげる！」
そう言った直後、美緒の口が尖り、毛が生え、耳と長い尻尾が現れる。

「美緒！」

「うげ！ 苦しいよ」

狼に変身した美緒に、蓮はキスをする。

「……………」

美緒はふと、先日のドッチボールの時のことを思い出し、蓮の身体をベタベタ触った。

「何？」

首を傾げる蓮に、美緒が訊く。

「ねえ、鍛えてる？」

「まあ、少しは」

「ふーん」

肉球で胸や腕や足を触る美緒に、蓮が眉を寄せる。

「あまり触らないでほしい」

「何で？」

「……美緒、僕の理性を試しているのかい？」

そつと押し倒され、美緒の胸は高鳴った。

「え、あ、蓮君……ちよつと……」

口では拒否しつつも、心の中ではそろそろそういう関係になってもいいと思っていた。

美緒は人型に戻り、蓮の首に腕を絡める。

「蓮君……」

「……………」

蓮がスツと美緒の身体から離れた。

「美緒、ケーキでも食べる？」

立ち上がり、キッチンへと行く蓮。そんな蓮の背中を、美緒は茫然と見つめた。

「……何で？」

美緒が呟く。

「え？ どうしたんだい？」

笑顔で振り向く蓮。わざととぼけているのは美緒にさえ分かった。

「まだ……駄目なの？」

もう何年も付き合っているのに、無理なのか。

「美緒……」

「どっちも私なのに……」

美緒の目からポロポロと涙が零れる。

「美緒……」

「据え膳食わぬは男の恥——!!」

馬鹿、最低、ド変態——。

美緒は叫びながらももう一度狼に変身して、マンションを飛び出した。

第72話

蓮のマンションから飛び出し、走って走って走って……ふと美緒は気付いた。

「あれ？ 二二二二？」

周囲を見回すと、見たことのない景色。

「えーと……」

感情にまかせ、やみくもに走りすぎた。

「あう。どうしようかなあ」

携帯電話は蓮の家に置いてきた。それどころか服も荷物もすべて——と考え、先刻の蓮とのやり取りを思い出し、涙ぐむ。

「う、いやいや、今はそれより家に帰ることが先決——おおう！ そっか、匂いだ！」

よく考えたら、今は狼に変身中だったのだ。これなら匂いを辿っていけば、自宅に帰れるではないか。

美緒は気合いで涙を止め、鼻を上に向けて、空気中の匂いを嗅ぐ。

「くんくん。うーん……。うなぎ、トンカツ、から揚げ、ギョーザ……うぎゃあ！ 恐るべし、晩御飯の時間帯！」

食べ物の匂いが気になって集中できない。お腹がグーと鳴る。

「と、取り敢えず歩こうかな」

仕方なく美緒は、知っている場所に出るかもしれないと、トボトボ歩き始めた。

落ち着いて周りをもう一度見回すが、何度見ても知らない場所だ。住宅街のようだが、近所ではないことは確かだろう。

「……蓮君、心配してるかな？」

無意識に呟いて、慌てて首を振り、少し足を速める。そして――。

「うーん、商店街か」

美緒は商店街に辿り着いた。しかし残念ながら、この場所にも見覚えは無い。

余程遠くまで走ってきてしまったのだろうか？

途方に暮れていると、高校生くらいの男の子三人組が、美緒に気付いた。

「うお、何だ？ 野良犬か？」

三人組が近付いてくる。

（誰が野良犬でしゅか！）

声は出せないで、美緒は心の中で抗議した。

「腹減ってるのか？ ほら」

男の子の一人が、食べかけのコロッケを美緒に向かって投げる。

（う、食えと？）

コロッケは美味しそうな匂いがするが……。

（これを食べたら大切な何かを失う気がする）

「何だ？ 食べないのか？」

「具合でも悪いんじゃないか？」

コロッケを食べない美緒の様子に疑問を感じた男の子達が騒ぎ出し、それを聞きつけて人が集まり始める。

（あ、やばい！）

美緒は踵を返して急いで逃げた。

狼の姿で無ければ道を尋ねることも出来たのに、と愚痴を言いながら走り、誰も追いかけてこないことを確認して足を止める。

大きく息を吐き、美緒は周りを見回した。

「あう、ここも知らない場所だ」

しかも辺りは街頭も民家もあり無く、寂れた雰囲気とする。

「……………」

どうしてこんなことに……。辛うじて残っていた美緒の理性がプツリと切れた。

「うぎゃあ！ どこだここは！ 家、家！ 家に帰りたいのでしょー！」

まるで遠吠えをするように、口を空に向ける。

人間に見られたら危険な状況であるという意識は、すっかり吹き飛んでしまっていた。

「だいたいこんなことになったのも、蓮君が、蓮君が、蓮くう——あれ！？」

美緒の叫びがピタリと止まる。

突然の浮遊感。地面から身体が離れていく——。

「え？ え？ 浮いてる？ ってゆーか……飛んでる？」

誰かが後ろから美緒の身体に腕を回して、がっしりと掴んでいる。そして聞こえるバサバサという音。

「……………」

景色が流れていく。これはやはり、飛んでいる。どう考えても飛んでいる。羽音のようなものも聞こえるし、巨大な鳥にでも掴まれたのだろうか？

しかし、回されている腕は人間のものに間違いない。ならばどうやって飛んでいるのか。

「……………」

何が起こっているのか確認するのは怖い。だが、確認しないのはもっと怖い。

美緒は意を決し、拘束されている身体を無理矢理捻って後ろを振り向き——驚愕した。

「ヨシヨシ先生!？」

三好は美緒に、ニッコリと笑った。

第73話

「うわー、街があんなに小さく見えるー」

まるで台詞を棒読みするように抑揚なく言つて、美緒は後ろで自分を掴んでいる人物を振り向いた。

「えーと、ヨシヨシせんせー。何で……ってゆーかどうやって飛んでるんでしゅか？ 視界にチラチラと見えるバツサバツサしているものはいったい……。それに何処へ向かつてるんですかねえ」

美緒の疑問には答えずに三好はクスリと笑い、スピードを上げる。

「うぎゃあ！ ジェットコースター！？ 絶叫系は苦手でしゅー！」

悲鳴を上げて目を瞑る美緒。すると突然、三好が止まり、抱えていた美緒をそつと下に下ろした。

「ほら、着いた」

「へ？」

美緒が目を開ける。

「んん？」

周りを見回すと、どうやら何処かのマンションのベランダらしいというのが分かった。しかもどうして、こんなところに自分を連れてきたのか。

疑問に思いながら三好を見上げる。

「せんせー。何で先生の背中には翼があるんでしゅか？」

三好が背中中の黒い翼を軽く羽ばたかせ、片眉を上げた。

「それはね、大空を飛ぶためだよ」

「へー。そうでしゅかー……って納得できません！」

三好は笑いながら、二人の前にある大きな窓を開ける。すると――

「え！？ ヨシヨシ先生！」

目の前に三好が居た。

美緒が目を見開き、目の前と横に居る二人の三好を見比べる。

「こっちはヨシヨシせんせー、こっちもヨシヨシせんせー……。うぎゃあ！ ドッペルゲンガー！？ 嫌ー！ まだ死にたくない！」

地面に伏せて前足の間に顔を埋める美緒に、目の前の三好がやれやれと溜息を吐いた。

「何を馬鹿なことを言っているんだ。吉樹^{よしき}、何でも拾ってくるな」
吉樹と呼ばれた美緒の横に居る三好が肩を竦める。

「だって、この子が父さんが言ってた美緒ちゃんだろ？ 狼の姿のまま、路上で叫びまくってたんだよ」

二人の会話に、美緒が「え！？」と顔を上げた。

「父さん！？ ドッペルゲンガーじゃなくて！？」

「なんだ、そのドッペルゲンガーというのは。そいつは息子の吉樹だ。そっくりで驚くだろう？」

美緒は隣に立つ三好——吉樹を再び見上げる。

「うん、凄くそっくり。よく見ると先生より若いけど。でももつと驚きポイントが……。お宅の息子さん、翼がありますが？」

三好が腰に手を当てる首を傾げた。

「翼があつちやいけないのか？」

「え？ いけないわけではないでしゅが……。そういえばここ何処？」

「俺の家だ。取り敢えず中に入れ」

三好に促され、美緒は部屋の中へと入った。中は広めのリビングで、大きなテレビとソファが置いてあり、奥はキッチンになっているようだ。

「あ、唐揚げの匂いがする！」

美緒が鼻をクンクンとさせたその時——、奥のキッチンから声が

した。

「ご飯の用意が出来たわよ。美緒ちゃんも食べていきなさい」
落ち着いた女性の声。美緒が三好を見上げる。

「誰？」

「嫁さんだよ」

「おお、先生の奥様、それはそれは。大上美緒と申します。先生にはお世話になってます」

頭と、ついでに尻尾も下げると、キッチンからヒョコリと顔が出てきた。

「へ？」

美緒が一瞬固まり、そして絶叫する。

「鳥ー！！」

三好に体当たりするように勢いよく飛びついて、美緒はキッチンから出てきたモノを前足で指した。

「先生！ 人間大の鳥が二足歩行で唐揚げ持ってるー！」

三好が眉を寄せて美緒の身体を引き離す。

「失礼な事を言うな。俺の嫁さんだ」

「え、嫁？」

美緒はキョトンとし、改めて視線を『嫁』といわれるモノに向けた。

嘴があり、黒い羽毛に覆われた、あきらかに鳥の顔。人間のよう
に二足歩行で服を着ているが、背中には黒い翼がある。

「……鳥でしゅよ。身体はギリギリ人間と言い張れても、首から上
はまるつきり鳥——うぎゃ！」

三好が美緒の頭に拳を落とす。

「だから失礼だ、大上。俺の嫁さんは天狗なんだよ」
目から涙を一粒零しながら、美緒は首を傾げた。

「天狗……？ 天狗って、赤い顔で鼻が長くて——」

「それは鼻高天狗だろう？ こいつはカラス天狗だ」

「カラス……？」

益々首を傾げる美緒の様子に、三好が溜息を吐く。

「天狗の種類くらい覚えておけ。常識だぞ」

「え？ これって常識なんではゆか？」

驚く美緒に、三好の妻であるカラス天狗はクスクスと笑いながら、唐揚げが山盛りに載った皿をテーブルに置いた。

「あなた、そんなに怒らないの。天狗を初めて見たのなら、驚いて当然でしょう？ ほら美緒ちゃん、沢山食べてね」

勧められた美緒が、唐揚げと三好の妻を交互に見る。

「……共食い？」

三好が無言で美緒に拳を落とし、美緒は床に倒れた。

「うう……、暴力教師」

「いいからここにお座りしろ」

「はい……」

促されて行儀よくお座りすると、三好の妻がお手拭で美緒の足を拭き、お皿に唐揚げを一つ載せて、美緒の前に置いてくれた。

「美緒ちゃんどうぞ」

「はあ、いただきます」

皿に入った唐揚げをパクリと口へ。途端に美緒は、尻尾を左右に振った。

「揚げたて熱々ウマウマ！」

「……もう少しまともな日本語は話せないのか？」

三好は顔を顰めたが、その妻と息子の吉樹は美緒を微笑んで見つめ、唐揚げを口に入れた。

「う、共食い……ふぎゃあ！」

「しつこい！」

三好が美緒の耳を引っ張る。

「面白いわね、美緒ちゃんって」

「本当に。父さんに聞いていた通りだ」

そう言って頷く三好の妻と吉樹に、美緒が首を横に振った。

「いえいえ、こちらの家族の方が余程面白いと思いますよ。ね、ヨシヨシ先生」

「人の家庭を面白がるな。——ところで、大上は何故こんな時間に狼の姿で彷徨っていたんだ？」

美緒は「うーん……」と唸り、前足で唐揚げを器用にする。

「……もういいや。鳥人間の衝撃で吹っ飛んだ」

「そうか。悩みがあったら言うんだぞ。それと——カラス天狗だと何度言ったら分かる？」

軽く頭を叩かれて、美緒の口から唐揚げが落ちて床に転がる。

「うお！ 唐揚げ待てー！」

慌てて追いかける美緒の姿に笑が起こった。

「美緒ちゃん、たくさんあるからね。はい、どうぞ」

三好の妻が美緒の皿に唐揚げを三個載せる。

「ありがとうございま——ん？」

不意に言葉が途切れ、耳をピクピクと動かし始めた美緒に、三好が訊く。

「どうした？」

「んー……。優牙の声が聞こえたような。気のせいかな？」

「大上弟の？」

三好が首を傾げたちょうどその時、外から「アオーン」と遠吠えが聞こえた。

「あれ？ やっぱり優牙？」

窓の外に美緒が視線を向ける。三好が立ち上がってベランダへ行き、そして美緒を手招きした。

「大上、お迎えだぞ」

「え？」

美緒が急いでベランダに行って下を見ると、そこには狼姿の優牙と自転車に乗った蓮の姿があった。

第74話

三好に招き入れられ、蓮と優牙が玄関から入ってきた。
リビングから少しだけ顔を出してその様子を見ていた美緒に、蓮
が気付いて駆け寄る。

「美緒！」

美緒の尻尾がビクリと上がった。

「美緒、心配したんだよ」

蓮が美緒の前に跪き、視線を合わせる。

「うん……」

途端に耳が倒れて尻尾も下がった。助けを求めるように視線を彷徨わせると、同じく狼姿の優牙と目が合う。

「うー！」

美緒は思わず後ずさった。優牙の目が怒りに満ち溢れている。

「姉ちゃん！この馬鹿——」

飛びかかろうとする優牙。美緒が悲鳴を上げる。しかしその時、
リビングの中から明るい声がした。

「いらっしやい。あなたたちもご飯を食べていきなさい」

優牙と蓮が顔を上げ、そして目を見開く。
リビングから出てきたモノ、それは——。

「鳥だ」

「……鳥」

三好がコホンと咳払いをする。

「俺の嫁さんのカラス天狗だ」

優牙が振り向いて三好を見た。

「カラス天狗？　これが？」

初めて見た……と呟き視線を戻した優牙とじっと動かない蓮に、三好の妻は微笑む。

「いつまで廊下に居るの？　ほら、こっちに来て」

促されてリビングの中へと視線を向け、優牙と蓮はまたしても驚いた。

「翼……？　鳥と人間のハーフ……鳥人間、いや『人間鳥』か？」
「……………」

三好が大きな咳払いをする。

「息子だ。失礼すぎるぞ、お前達。いいから部屋に入れ」

一方、吉樹はまったく気にしていない様子で、クスクスと笑って皆を手招きした。

「どうぞ、座って。美緒ちゃんもおいで」

勧められるまま中に入って座ると、三好の妻がキッチンからまた大量の唐揚げを持ってくる。

「どうぞ、たくさん食べてね」

鳥が唐揚げを持つという光景に、蓮と優牙が唖った。

「……唐揚げですか」

「う。なんかエグイな」

そんな二人に、三好の妻が唐揚げを取り分けて渡す。

「美味しいわよ。ね、美緒ちゃん」

「うん。美味しいよ」

既に唐揚げを頬張っている美緒の姿に、優牙は溜息を吐いた。
「姉ちゃん、ちゃんと反省してるのか？」

「う、うん。そりゃ勿論……だよ？」

「何で疑問系なんだよ！」

怒る優牙を三好の妻が宥める。

「まあまあ。それより焼き鳥とタンドリーチキンもあるから食べていきなさい」

「……鳥料理ばかりかよ」

こうして蓮と優牙も加わり、妙に賑やかな雰囲気ですごす食事が始まった。

第75話

三好のマンションからの帰り道――。

蓮が自転車に乗って走り、その少し後ろを狼姿の美緒と優牙が並んで走る。

「う……。飲食後の激しい運動はちょっと辛い」

「食べすぎだ」

「だって鳥の作った鳥料理が美味しくて……」

「いいから喋らず走れ」

優牙がスピードを上げ、美緒も慌てて足を速めた。そして優牙にまた話しかける。

「蓮君が乗ってるあの自転車って、私のだね。屋根裏に片付けてあったやつ」

「ああ」

「何で蓮君が使ってるの？」

「お前を探すために貸したんだよ。いいから黙って走れ。あんまりうるさいと喉笛咬み切るぞ」

「おお、それは怖い」

それから美緒は黙々と走り、やがて自宅に着いた。

「う……。疲れた」

迷子になって、美緒は随分遠くまで行っていたようだ。

庭でへたり込む美緒の横に、蓮が自転車を置く。

「じゃあね、美緒」

あっさりと別れの挨拶をして踵を返す蓮に、美緒が驚いて立ち上がり、声を掛けた。

「蓮君、寄っていかないの？」

チラリと蓮は振り向いて片手を挙げる。

「もう遅いから。お休み」

「お、お休み……」

去っていく蓮。遠ざかる足音。

「……………」

美緒は再びへたり込んだ。

「うう、微妙な雰囲気」

優牙が鼻を鳴らす。

「やっぱ人間とじゃ難しいんじゃないか？ 別れて狼男と付き合えば？」

「それは……………」

「……………」

「……………」

美緒が俯き、優牙は溜息を吐いた。

「とりあえず家に入るぞ」

「うん……………」

二人揃って玄関へと行き、優牙が器用にドアを開け、美緒が先に家の中に入る。そして優牙も家の中へと入ろうとした、が。

「ん？」

眉を寄せて、優牙は振り向いた。近付いてくる車の音。それだけではなく――。

「おいおい、マジか？」

優牙の呟きに、美緒が振り向いた。

「どうしたの？」

優牙が無言で外に向かって顎をしゃくる。首を傾げて美緒が外に目を向けると、ちょうど家の前に車が止まった。

「え？ まさか……………」

美緒も気付く。車のドアが開いた。

「美緒ー！」

美緒が目を見開き、優牙が舌打ちする。近所迷惑な大声を上げながら降りてきた、茶色い短髪の逞しい体つきの男。それは――。

「お父さん！？　うわ、久し振り！　あ、お母さんも。うわー、大上家が揃った！　何年振りだろ？」

美緒と優牙の父親である拓真たくまと母親の冴江であつた。

拓真が突進するように美緒に抱きつき、冴江は美緒と優牙の姿を見て首を傾げる。

「あんたたち、こんなところで何してるの？　しかも二人とも変身して」

冴江の質問に、優牙は曖昧に答えた。

「いや、まあな。それより、帰ってくるなら何故事前に連絡しない？」

「急に休みが取れたのよ。優牙ご飯何？」

優牙が溜息を吐く。

「いきなりそれかよ。煮魚ならあるぞ」

「肉が食べたい」

「……買って来いと？」

当然というように頷く冴江に優牙はまた舌打ちをして、拓真と拓真に押し潰されている美緒を避けて家の中に入った。

「ほら、美緒とお父さんも入るよ」

拓真の襟首を掴んで美緒を救出し、冴江も家の中に入る。

「うう……、危つく圧死するところだった。ところでお父さん、お土産は？」

美緒に訊かれた拓真が笑う。

「もちろんあるぞ。とりあえず家の中に入るか」

「うん」

美緒と拓真がリビングに行くと、すでに優牙は人間の姿に戻って
冴江にお茶を出していた。

「で？ お父さん、お土産は？」

「今回は凄いぞ」

「え！ なになに？」

期待に目を輝かせる美緒に、拓真は旅行用バックから大きな封筒
を取り出し、「ほーら、美緒、見てみる」と言いながら封筒の中身
を見せる。途端に美緒が、そして少し離れた場所から様子を見てい
た優牙が固まる。

「……はい？」

美緒は目の前に差し出されたものをまじまじと見つめた。

「ほら、いい狼だろ？」

左側に狼、右側に二十代前半の男の姿が写っている写真。立派な
台紙に貼られたこれはもしかして……。

「会ってみたいか？」

つまり、やはり、そうなのかと思いながら美緒が呟く。

「お見合い？」

「いや、とりあえず顔合わせだ」

「……顔合わせって何？」

拓真が首を傾げた。

「嫌なのか？ ほら、釣書を見てみる。優秀な青年だろう？ 顔も
なかなかいいしな」

「……………」

美緒の視線が彷徨う。まさかこんなに早く見合いを勧められるな
と思ってもいなかった。どうしようかと考えながら口を開く。

「いやあ、学生だし……」

「だから、ただの顔合わせだ。今回は」

「『今回は』って何でしゅか？」

助けを求めて周りを見ると、冴江と目が合った。

「お、お母様……」

よろよと手を伸ばす美緒。ところが冴江は、片眉を上げて、のんびりとお茶を一口啜る。

「そうだねえ。狼人間は狼人間同士結婚するのが幸せかもしれないねえ」

美緒が目を見開いた。

「そんな……！」

冴江は蓮の存在を知っている筈なのに、どうしてそんな事を言うのか。そして――。

「うう……。図ったようなこのタイミング……何故？」

蓮との仲が微妙な雰囲気な時に、あまりにもタイミングが良すぎる。もしかや拓真も蓮の存在を知っているのだろうか。いや、それならばもつと大騒ぎになってもおかしくない。ただの偶然なのだろうか？

「どうだ？ 会うよな」

「……………」

美緒は冴江から視線を優牙に移し、『助けて！』と念じた。しかし優牙は視線を逸らす。

「俺、買い物行ってくる」

歩き出す優牙に美緒は慌てた。

「あう！ テレパシー通じず！？ 優牙、私も一緒に――」

「いいよ、姉ちゃん。一人で行く」

「駄目！ 待つて、置いていかないで」

叫びながら優牙を追いかけようとする美緒の尻尾を拓真が掴む。

「美緒、話が終わってないぞ。会ってみるだろう？」

「あう！ いや、その……、無理」

「どうしてだ？」

「えっと……」

正直には言えない。リビングから出て行こうとする薄情な弟を見つめ、美緒は『そうだ！』と閃いた。

「私は優牙を愛しているのー！ 両親の居ない間に兄妹を超えた愛に目覚め、あんなことやこんなこともー」

「馬鹿か、お前は！ もっとマシな嘔吐きやがれ！」

優牙の跳び蹴りが炸裂し、美緒が悲鳴と共に吹っ飛んだ。

番外編「姉ちゃんと変態と巻き込まれた俺」(前書き)

73 話付近のお話。

番外編「姉ちゃんと変態と巻き込まれた俺」

夕飯の仕込み中、突然開いた玄関のドアとドカドカという音。

……土足で家上がったきやがったな。だけど、この足音は姉ちゃんのものじゃない。

「優牙君！」

姉ちゃんの馬鹿が移ったのか？

「靴を脱ぎやがれ！」

俺が投げたお玉を奴は華麗に避けて、叫ぶように言った。

「美緒は！？」

真剣な表情。おいおい、なんかあったのか？

「一緒にじゃないのか？」

「……戻ってないんだね」

伏せられた瞳と噛みしめられた唇。

「……なにがあった？」

「飛び出して行って」

「喧嘩か？」

「……………」

当たりか。飛び出していったきり見つからないんだな？

「何処に居るか分からないかい？」

俺は舌打ちをした。仕方ねーな。

「靴を脱いでちょっと来い」

大人しく靴を脱いだ奴を連れて、俺は二階の自分の部屋へと行く。そして机の引き出しから小さな鍵を取り出し、奴に向かって放り投げた。

「屋根裏にある自転車を庭に出せ」

頷いて去っていく背中を見送り、俺は服を脱いだ。

一瞬、身体が溶けるような感覚があり、そして変化をしていく。本当は奴の前でこの姿にはなりたくなかったんだが……。完全に狼になった俺は、軽快に階段を降り、奴が待つ庭へと行った。

足音に気付いて奴が振り向く。

「美緒！？」

奴は目を大きく見開き、俺に飛びついた。

「やめろ、変態！ 俺だ！」

撫で回すな気色悪い！

「優牙……君？」

「そうだ」

「……すごい、そっくりだ」

そう言いつつまだ俺を撫で回す手を、強めに咬む。

「——っ！」

「行くぞ。自転車で付いてこい」

俺は走り出し、奴が慌てて自転車に跨る。微かな匂いを頼りに、姉ちゃんの行方を追った。

何処まで行ってやがるんだ、あの馬鹿は！

自宅からも奴の住むマンションからも、そこそこ距離がある場所までやってきた。

姉ちゃんの姿はまだない。そして——気になることもある。

俺は空中の匂いを嗅いだ。

妙な匂いがする。

姉ちゃんと一緒にいるのか。

気になりつつも進んでいくと、今度は知っている匂いがした。
おいおい、どうなっている？

俺は足を止め、目の前のマンションを見上げた。

「優牙君、ここに……？」

頷き、俺は唸った。

「ああ、連れてこられたみたいだな」

まったく、何をやらかしてくれなんだ、姉ちゃんもこの変態も。
面倒なことにならないかやいいけどな。

俺は大きく息を吸い込んで、遠吠えをした。

第76話

「どうすればよいのでござりまするか」

ベッドに寝転んで本を読んでいた優牙は、傍らに座り込む美緒をチラリと見て、また視線を本に戻した。

「知るか。俺の部屋から出て行け」

美緒が俯き、涙を拭うまねをする。

「ああ冷たい。そちはほんに氷の男ぞ」

「なんだよ、その良く分からないキャラは。見合い相手に会うだけ会えばいいだろ？」

優牙がページを捲り、美緒がフツと溜息を吐いて遠い目をした。

「会えば最後、強引に話を進められて結婚させられるんだよ」

「大体俺じゃなくて、奴に相談すれば？」

「……………」

途端に無言になった美緒。優牙は眉を寄せて本を閉じ、ベッドの上に座った。

「仕方ねーな。じゃあ愛に相談しろ」

「愛ちゃん……………」

美緒は少し考えて、首を傾げる。

「最近の愛ちゃん、付き合いが悪いつて言うか何か変つて言うか、避けられているつて言うか、ぶっちゃけあんまり電話にも出てくれないんだよね。どうしたんだろ？」

「嫌われてんだろ？」

「ええ！？」

目を見開く美緒に、優牙は口角を上げた。

「嘘だよ。出来たばっかの彼氏に夢中なだけだ」

「へー、彼氏か。そうか彼氏……………」

彼氏彼氏と呟き、美緒はその意味を漸く理解して叫んだ。

「え！？ マジですか！？」

美緒が驚愕のあまり、後ろによろめく。

「マジだ」

「……し、親友が黙って彼氏を作った……」

まさか、そんなはずはないと首を振る。

「お前にばれるとうるさいからな」

「……………」

暫く呆然と中空を見つめ、それから美緒はベッドの上に飛び乗り、優牙に詰め寄った。

「どんな男でしゅか！ まさか優牙？」

ゴッソ！

優牙の拳が美緒のこめかみを叩く。美緒が倒れた。

「何で俺なんだよ。ありえねえ」

「うう……。だって仲いいじゃない」

「よくねえよ。ただの腐れ縁だ」

「じゃあ誰？」

優牙は枕元に置いていた携帯電話を掴み、愛に電話を掛けて美緒に渡す。

「自分で訊け」

「……………」

受け取った電話を耳に当てる美緒。コールすること五回、電話が繋がった。

「彼氏が出来たって本当でしゅか！？ 私の目の黒いうちはそんなこと認めない——あう！」

優牙の蹴りが美緒の腹にクリーンヒットする。

「うっ、痛い。もう駄目かも。せめて最期はそなたの腕の中で——え？ 彼氏じゃない？ ……うん、うん、分かった。じゃあ明日」

電話を切った美緒は、それを優牙に返ししながら、眉を寄せた。

「交際申し込まただけだって」

「ふーん」

優牙が片眉を上げる。

「私の愛ちゃんに交際を申し込むとは、何処のどいつだろう？ 明日愛ちゃんを尋問するでしゅ」

力強く頷く美緒に優牙は鼻を鳴らし、シッシと手を振った。

「そうか、それは良かったな。じゃあ部屋に帰れ」

そんな優牙に美緒はしがみ付き、涙を拭つまねをする。

「ああ冷たい。そちはほんに氷の男ぞ」

「だからそれは何なんだよ！」

美緒は優牙の部屋から追い出された。

第77話

教育実習の休憩時間、美緒は空いている教室に愛を呼び出した。

「で？ 相手はどんな男でしゅか。頭の皿は大きい？ 水掻きは？ キュウリあげるから答えなさい」

愛が眉を寄せて美緒の頬をつねる。

「うちの種族馬鹿にしてるの？」

「めっほうもごらいまへん、いひゃい、いひゃい！」

「……彼は人間よ」

「ふえ？」

美緒から手を離し、愛は髪をかきあげた。

「人間なの」

「へー！ そうなんだ。で、どうするの？」

「迷ってる」

愛の言葉に、美緒が首を傾げる。

「何で？」

「佐倉みたいに、あきらかな変態じゃなくて普通の人だから、いいのかなって」

美緒は腕を組んで頷いた。

「ふーん、なるほど。ところで出逢いはどこで？」

「……」

愛が視線を逸らす。

「あれ？ どうしたの、愛ちゃん」

フウツと息を吐き、愛は渋々答えた。

「夜、川で泳いでいたら、溺れていると勘違いされて彼に保護されたの」

「……は？」

美緒がポカンと口を開けて愛を見る。

「愛ちゃん、本当に？」

「何で嘔吐かなきゃいけないの？」

「いやあ、ガードの堅い愛ちゃんとは思えない馬鹿っぷり」

「悪かったわね！」

人間に捕獲されることを常に警戒している愛を知っている美緒としては、それは信じられないようなミスだった。

「相手は愛ちゃんがハーフだって知ってるの？」

「見られたから、そうね」

美緒が目を見開く。

「見られた！？ どこを！？ あ、愛ちゃんたらふしだらな！ そんな子に育てた覚えはありません！」

「何もしてないわよ！ …… まあ私のことはいいから、あんたの話をしましょう。見合いするんだって？」

愛の言葉に美緒は驚いた。

「あれ？ 何でお見合いのこと知ってるの？ テレパシー？」

「優牙に聞いたのよ。で、どうするの？」

美緒が肩を落とす。

「あー…… どうしましょう」

「してみれば、見合い」

「何ですと！？」

大袈裟に身を引く美緒に、愛は肩を竦めて言った。

「だって、最近ぎこちないじゃない、あんた達」

「う。鋭い指摘」

「一度違う男にも目を向けてみたら？」

「うっ…… でも」

美緒が頭を抱える。

「じゃあね」

「え、ちよつと待って！ 愛ちゃん！」

話は終わったとばかりに愛は教室から出て行き、残された美緒は

頭を掻き毟った。

「はうう！ どうすればいいのー！」

美緒が叫ぶ。すると――、教室のドアが開き、予想外の人物が現れた。

「え！？ ヨシヨシジュニア？」

それは三好の息子の吉樹だった。吉樹が笑いながら教室に入ってくる。

「やっぱり美緒ちゃんだ。どうしたの？ 廊下まで声が聞こえていたよ」

「ジュニアこそ、どうしてここに？」

驚く美緒に、吉樹は手に持っている小さな鞆を見せた。

「父さんにお弁当を届けにきた」

「ふーん、そうなんだ」

頷く美緒に、吉樹がもう一度訊く。

「で、こんなところでどうして叫んでいたのかな？」

美緒は真面目な顔で答えた。

「人生の難しさを痛感していたんでしゅ」

「そっか。悩みがあるなら、お兄さんが相談に乗ってあげるよ」

「ジュニアが？」

吉樹が笑顔で頷く。美緒は俯いて顎に手を当ててうーんと唸り、それから顔を上げた。

「じゃあちよつとだけ。彼氏と微妙で見合いが困った」

「なるほど、それは悩むね」

「嘘！ 通じた！？ テレパシー！？」

吉樹が声を出して笑う。

「彼氏って、こないだうちに美緒ちゃんを迎えに来た、あの人間だよね」

「うん」

「人間と人外は難しいよ。うちの両親は仲いいけど」

三好の妻の姿を思い出し、美緒は呟くように言う。

「鳥と仲良くできるって凄いでしゅ」

「天狗だよ。うん、でもやっぱり人間と人外で上手くいくのはごく僅かだよ。人間と駆け落ちして傷ついて帰ってきた子って多いから」

美緒が眉を寄せた。

「そうなの？」

「うん。種族の壁を越えるのは難しいんだよ」

「……………」

俯き黙り込む美緒。そんな美緒をじつと見つめ、吉樹は口を開いた。

「美緒ちゃん、俺にしない？」

突然の思いがけない言葉。美緒が顔を上げ、ポカンと口を開ける。
「は？」

「俺はハーフだけど人外の気持ちは分かるし」

吉樹が美緒に一步步近づく。美緒は思わず後ろに下がった。

「な、何言ってるんでしゅか」

「実は、前々から美緒ちゃんの話をお父さんから聞いていて、気にな
っていたんだ。実際会ったら可愛かったしね」

吉樹がもう一步步近づく。

「い、いや、そんなこと急に言われても」

「美緒ちゃん、将来俺と結婚して子供が生まれたら、翼の生えた狼

——翼狼が生まれるかもしれないよ」

「え？ よ、よくろう？」

戸惑う美緒に、吉樹は顔を近づけ視線を合わせた。

「想像してごらん、空を自由自在に飛ぶ狼を」

「空を飛ぶ狼……………」

美緒の頭に、大空を飛び回る狼の姿が浮かぶ。

「は、はう！」

「ね、いいだろ？」

「……いい！ 素敵！」

「だから、俺と付き合おう」

吉樹の顔が更に近付き、そして――。

ガラガラ、ドン！

教室に響く大きな音。美緒は飛び上がり、音のした方向に視線を移す。そこには――。

「れ、蓮君！？」

蓮が、無表情に美緒と吉樹を見つめていた。

「何をしていたんだい？」

蓮が淡々と訊く。

「え、いや、えーと……」

視線を彷徨わせる美緒。吉樹がそんな美緒の肩をポンと叩く。

「じゃあね。考えておいて」

「あ！ ジュニア！」

吉樹は蓮の横を通り、教室から出て行った。

「美緒、休憩時間は終わりだよ」

「う、うん」

美緒が慌てて蓮の元に走る。

「で？ 何をしていたんだい？」

「……」

「美緒」

低い声に殺気を感じ、美緒はビクリと震えた。

「……じ、人生の厳しさについて語り合っていました」

「ふーん」

本当のことを言ったら、何が起こるか分からない。

美緒の背中に冷や汗が流れた。

第78話

「翼狼」

美緒が呟く。机に向かって勉強していた優牙が眉を寄せた。
「はあ？ 何だそれ。つか、自分の部屋に戻れよ姉ちゃん」

「翼の生えた狼」

「だから何だそれは」

優牙が溜息を吐いて、ペンを美緒に向かって投げる。美緒はペンが当たった額を押さえ、優牙を見つめた。

「ヨシヨシジュニアとの子供が生まれたら、翼狼が生まれるかもしれないって……」

優牙が眉を寄せる。

「はあ？ ヨシヨシジュニアって、あの人間鳥のことか？」

「うん。交際を申し込まれた」

「は？ 交際？」

美緒がうんうんと頷き、優牙はこめかみに指を当てた。

「で、翼狼か」

「うん。絶対かっこいいよね」

「うまくいけば、な。でも下手すりゃ顔だけが鳥の子供が誕生するかもしれないぞ」

美緒が目を見開き、「う！」と詰まる。

「それは……」

優牙は溜息を吐いた。

「見た目じゃねーだろ、大事なのは。馬鹿なこと吹き込まれてんじやねーよ。変態はどうした」

「……………」

「乗り換えるのか？」

美緒が首を振る。

「そんなことしないよ。蓮君は彼氏だもん」

「ふーん」

じつと美緒を見つめる優牙。

「……何、優牙。その目は」

たじろぐ美緒に、優牙は鼻を鳴らした。

「別に。変態か鳥か、究極の選択だな。狼が一番マシじゃねーの？」

「そんな……」

「見合いして結婚するのが姉ちゃんにとって、一番幸せかもな」

「うう……」

優牙は立ち上がり、涙目になった美緒の首根っこを掴む。

「ほら、勉強の邪魔だ。出てけ」

廊下にポイと放り出されて、鍵まで掛けられる。

「あう、酷い。たった二人の姉弟なのに、この仕打ち」

美緒は文句を言いつつ、仕方なく自分の部屋に戻った。

「はあー。どうしよう」

ベッドに寝転び、頭を抱える。

蓮と別れる気などない。だけど、このままでいいのかという思いもある。待つつもりはあるが、それがいつまでか分からないのが怖い。

「あう、駄目だな……」

ベッドの上をゴロゴロと転がり、そのまま床に落ちる。

「イタタタ……ん？」

美緒が首を傾げる。窓の方から小さな音が聞こえた。時刻はもう十二時を回っている。こんな時間に何の音なのか。

コンコン。

「うぎゃー！」

今度ははつきりと、窓を叩くような音が聞こえた。美緒はがばつと身体を起こした。

「ゆ、幽霊！？ 駄目でしゅ！ 幽霊の入室はお断りしております！」

カラカラカラ。

「うぎゃあ！ 今度は何の音でしゅか！」

美緒が叫んだ時――。

「美緒ちゃん、窓の鍵を開けっ放しにしてたら危ないよ」

聞こえた声に、目を見開く。

「え？ ジュニア？」

吉樹はにつこり笑って部屋の中に入ってきた。

「ごめんね、遅い時間に。美緒ちゃんの顔が見たくなっちゃって」

「う、いや、まあ……」

突然の訪問と、幽霊ではなかったことにホッとしているのとで、美緒は上手く返事が出来ない。

「まだ寝てなくて良かった」

吉樹がそんな美緒の頭を撫でた。

「……………」

美緒は吉樹の顔をボーッと見つめる。そしてハッとある事実に関心した。

「あの、お父さんに見つかるやバイので、帰っていただけます？ 変身はしていないので、それほど匂いや声に敏感に反応はしないとは思うが、

もし何かの拍子に見つかったら大変な騒ぎになる。

吉樹は素直に頷いた。

「急にごめんね。帰るよ」

「うん」

窓から出て、吉樹は翼を羽ばたかせる。

「美緒ちゃん、俺本気だから。じゃあね」

「う、うん」

手を振られ、振り返す。

「返事は急がないから」

吉樹は飛んで行った。

「……………」

美緒は窓を閉め、鍵を掛ける。そしてベッドにダイブした。
「うっ、どうしよう……」

はつきりと断ることだって出来た筈なのに。

美緒は頭を抱えて唸った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7414i/>

わぁおん！

2011年10月17日23時06分発行